

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所の
第5期中期目標期間の終了時に見込まれる
業務の実績に関する評価

令和7年

文部科学大臣

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所 中期目標期間評価（見込評価） 目次

1-2-1	評価の概要	・・・ p 1
1-2-2	総合評定	・・・ p 2
1-2-3	項目別評定総括表	・・・ p 6
1-2-4-1	項目別評定調書（国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する事項）	・・・ p 7
	<u>項目別評価調書 No. I-1 特別支援教育に係る実際の・総合的研究の推進による国の政策立案・施策推進等への寄与及び教育現場への貢献</u>	・・・ p 7
	<u>項目別評価調書 No. I-2 各都道府県等における特別支援教育政策や教育実践等の推進に寄与する指導者の養成</u>	・・・ p 23
	<u>項目別評価調書 No. I-3 総合的な情報収集・発信や広報の充実及び関係機関等との連携強化を通じた特別支援教育に関する幅広い関係者の理解の促進</u>	・・・ p 38
1-2-4-2	項目別評定調書（業務運営の効率化に関する事項、財務内容の改善に関する事項及びその他業務運営に関する重要事項）	・・・ p 66
	<u>項目別評価調書 No. II-1 業務運営の効率化に関する事項</u>	・・・ p 66
	<u>項目別評価調書 No. III-1 財務内容の改善に関する事項</u>	・・・ p 72
	<u>項目別評価調書 No. IV-1 その他業務運営に関する重要事項</u>	・・・ p 79

1-2-1 中期目標管理法 中期目標期間評価（見込評価） 評価の概要

1. 評価対象に関する事項		
法人名	独立行政法人国立特別支援教育総合研究所	
評価対象中期目標	見込評価	第5期中期目標期間（最終年度の実績見込を含む。）
期間	中期目標期間	令和3年度～令和7年度

2. 評価の実施者に関する事項			
主務大臣	文部科学大臣		
法人所管部局	初等中等教育局	担当課、責任者	特別支援教育課、生方裕
評価点検部局	大臣官房	担当課、責任者	政策課、生田知子

3. 評価の実施に関する事項
令和7年8月5日 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所の評価等に関する有識者会合に評価結果案を諮り、意見を聴取した。

4. その他評価に関する重要事項
—

1. 全体の評定	
評定 (S、A、B、C、 D)	A
評定に至った理由	・全体として中期目標に定められた以上の業務の進捗が認められるため。

2. 法人全体に対する評価	
法人全体の評価	・全体として中期目標に定められた以上の業務の進捗が認められるため。
全体の評定を行う上で特に考慮すべき事項	—

3. 課題、改善事項など	
項目別評定で指摘した課題、改善事項	<p>【特別支援教育に係る実際の・総合的研究の推進による国の政策立案・施策推進等への寄与及び教育現場への貢献】</p> <p>○研究成果の教育現場等での活用状況について、令和3年度から令和6年度にかけて6割以上となっており、高く評価できる。今後はさらに現場で活用しやすい成果物の作成を追求し、効果的な活用方法を分析し、SNS等を駆使し幅広く周知するなど、量的のみならず質的な面においても毎年度改善を図ることが重要である。(p.10 参照)</p> <p>○我が国唯一の特別支援教育のナショナルセンターとしての役割を踏まえ、国の政策的課題や新たな教育現場の課題に柔軟かつ機動的に対応すべく、研究所でなければ実施できない学校現場に根差した実践的な調査・研究に更に精選・重点化して実施する必要がある。(p.10 参照)</p> <p>○次期中期目標期間においては、基礎的研究活動を含めた全ての研究活動において、最先端の理論と学校現場の実践を架橋する研究活動を期待したい。その際、基礎的研究活動を含め、障害種の枠にとらわれることなく、特別支援教育をめぐる将来的な動向や課題も見据えた最先端の実践的な研究活動に取り組むことを期待したい。また、基礎的研究活動を含めて研究活動の選択と集中を行い、限られたリソースの有効活用を図られたい。(p.10 参照)</p> <p>○全ての研究活動の実施について、引き続き、国と密に連携を取りながら喫緊の課題に対応して実施することが求められる。また、アウトカムを意識して、学校現場の変革に繋がる研究活動に集中的に取り組むことを期待したい。(p.10-11 参照)</p> <p>○多様な障害領域の研究者を配置している大学や、研究機関や民間企業と組織的かつ継続的な連携体制を構築し、研究の多様性の確保に努め、先端的な研究を推進すること。また、引き続き、研究者が創意工夫しながら行う多様な研究について、適切に評価を行うとともに、研究職員の研究力の向上及び外部競争的資金獲得に向けた取組を実施すること。(p.11 参照)</p>

○研究所の研究活動について、その研究費が公費で賄われている研究課題においては、研究活動の透明性や効率性を確保し、その信頼性を確保することが求められていることを踏まえ、次期中期目標期間においては、外部資金による研究や受託研究等を除く全ての研究活動について、外部評価の対象とすること。また、外部評価にあたっては、特別支援教育を必ずしも主たる専門とはしない隣接領域の研究者等も委員に加えることを検討すること。(p.11 参照)

○研究成果のとりまとめ・公表にあたっては、文部科学省とも連携しながら、学校現場や保護者を意識し、わかりやすく、学校現場を意識したものとなるよう留意いただきたい。次期中期目標期間においては、基礎的研究活動を含めた全ての研究活動の成果について、国の政策立案への寄与については、各研究の成果が国のどのような政策に、どのような場面で活用されているのかを具体的に把握することが必要であり、国との連携について、これまで以上に取組を進めていただきたい。また、任命権者の政策立案への寄与についても、各研究の成果が任命権者の政策立案において、具体的にどのように寄与しているのか、把握することに努めていただきたい。(p.11 参照)

○次期中期目標期間においては、通常の学級に在籍しながら通級による指導を受ける子供や、特別支援学級に在籍する子供が増加する一方で、障害の多様化や重度・重複化なども進んでいることを踏まえ、特別支援教育の現場において、一人一人の教育的ニーズに的確に応える指導が提供できるよう、多様な課題に柔軟に対応でき、先端的かつ革新的な研究が可能となる組織体制を整備すること。(p.11-12 参照)

【各都道府県等における特別支援教育政策や教育実践等の推進に寄与する指導者の養成】

○定量的目標については、第5期中期目標期間中、新型コロナウイルス感染症が拡大していた令和3～4年度を除いては、高い達成率を示している。国が目指す免許保有率100%を達成するためにも「免許法認定通信教育及び免許法認定講習による単位取得者数」の更なる向上を目指す必要がある。(p.25-26 参照)

○他の研修施設等には無い研修効果が得られるよう、更なる取組の改善が必要である。また、各受講者が専門研修等で身につけた成果が校内研修の実施等を通じて他の教員にも普及がなされるような取組を期待する。(p.26 参照)

○特別支援教育におけるオンライン教育の有効性に関する研究の実施やオンラインを活用した参加型研修の実施に加えて、あらゆる研修事業において、学校現場におけるデジタル学習基盤の活用を前提とした研修を進める必要がある。(p.26 参照)

○小・中学校の管理職の多くが特別支援教育の経験がないという状況を踏まえ、次期中期目標期間においては、小・中学校の管理職に対する研修の充実にも取り組むこと。(p.26 参照)

○オンラインによる研修を実施することで、対面では実施できない研修事業に取り組むことも可能となることから、これまでの研修事業では対象となっていなかった教員に対する研修事業の実施も検討すること。(p.26 参照)

○次期中期目標期間の開始にあたっては、各研修事業の内容についても、学校現場をとりまく喫緊の課題に対応するとともに、次期学習指導要領や教員の採用・養成・研修に関する検討状況など最新の教育動向を踏まえた研修内容になるよう、対面とオンラインのベストミックスを意識しつつ、研修内容をゼロベースで見直し、スクラップ&ビルドを通じた抜本的な見直しを行うこと。(p.26 参照)

○中央教育審議会に諮問・検討されている「多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成を加速するための方策について」の議論の内容や答申等を踏まえた対応について、次期中期目標期間中においても研修内容の見直しを行うなど、中教審の議論を踏まえた柔軟な対応を講じること。(p.26-27 参照)

○NISE 学びラボについては、特別支援学校の教師のみならず、小・中・高等学校で障害のある子供たちの指導にあたる教師にとっても重要な講義コンテンツであることから、コンテンツの内容について、定期的に最新の理論や知見にアップデートするよう運営の充実を図ること (p.27 参照)

○次期中期目標期間においては、通常の学級に在籍しながら通級による指導を受ける子供や、特別支援学級に在籍する子供が増加する一方で、障害の多様化や重度・重複化なども進んでいることを踏まえ、特別支援教育の現場において、一人一人の教育的ニーズに的確に応える指導が提供できるよう、多様な課題に柔軟に対応でき、現場に必要とされる研修が機動的に実施できる組織体制を整備すること。(p. 27 参照)

【総合的な情報収集・発信や広報の充実及び関係機関等との連携強化を通じた特別支援教育に関する幅広い関係者の理解の促進】

○定量的目標については、第5期中期目標期間中、全ての項目において目標を達成できており、評価できるが、特別支援教育に係る有益な情報や学びのコンテンツをあらゆる層の教員に活用してもらうためには、引き続き SNS を有効活用するなど様々な手段により、受講者を限定しない形での研修会の実施や教育団体への周知を行い、関係者及びそれ以外の人々に対する効果的な情報発信・理解啓発の在り方の工夫をする必要がある。(p. 41 参照)

○次期中期目標期間においては、情報発信の強化を図る観点からも、戦略的な広報に取り組むこと。特に、プレス対応については文部科学省とも事前の情報共有を図りつつ、特別支援教育についての教員や保護者の理解促進が図られるような広報戦略を検討し、実施すること。特別支援教育の高い専門性を有する教員等に対する情報発信と、特別支援教育の知識や経験が十分に有していない教員等に対する情報発信や広報について、それぞれ、更なる強化を期待するとともに、高等学校の教員向けの情報発信についても、更なる強化を期待したい。

(p. 41 参照)

○引き続き、外部機関や民間企業との連携をさらに強化した上で、相互の強みを生かしたエビデンスベースの研究を進め、国の政策立案に寄与することはもとより、学校、民間企業、各種団体等、多方面からの理解・支援を得ることができるよう努めること。(p. 41 参照)

○インクルDBについては、改正障害者差別解消法が令和6年4月に施行され、私立学校も含めた全ての学校において合理的配慮の提供が義務化されたことを踏まえ、次期中期目標期間においては、合理的配慮の提供に関する学校現場の様々な事例を収集し、学校現場が現に直面している困り感に応えることができる最新のコンテンツを提供できるよう、不断に更新が可能な体制を構築することが必要である。(p. 41-42 参照)

○日本人学校への相談支援については、各学校のニーズや活用状況を把握した上で、引き続き、日本人学校が直面する課題の解決に資する情報提供を行う体制を構築することが必要である。(p. 42 参照)

【業務運営の効率化に関する事項】

○業務運営の効率化、業務負担軽減の観点から、更なるDXを推進する必要がある。(p. 67 参照)

【財務内容の改善に関する事項】

○受託事業による外部資金及び科研費等の獲得による自己収入の拡大を図るため、引き続き、積極的な取組が必要である。(p. 73 参照)

【その他業務運営に関する重要事項】

○情報セキュリティ水準の維持・強化並びに職員の情報セキュリティに対する意識及び能力の向上を図ることは重要であるが、情報セキュリティ上のインシデントが発生した場合は、組織として迅速に対応すべきである。(p. 80 参照)

	<p>○引き続き、自治体、教育機関、民間企業、福祉機関、医療機関等の多様な機関との組織的かつ継続的な連携によるさらなる協力関係の構築及び外部資金の獲得等も視野に入れた共同研究の推進が必要である。また、自治体であれば首長部局の福祉部門等、関係団体であれば地域福祉、障害児、障害者福祉団体など、より幅広い部門と連携を期待する。(p. 80-81 参照)</p> <p>○次期中期目標期間においては、限られたリソースの中で、研究職員が研究活動や研修活動に注力できるようにするとともに、研究所の活動に関する企画運営や組織運営、広報等の機能強化を図るため、これまで以上に機動的な業務運営が可能となる組織体制の見直しを図るとともに、研究職員と事務職員の役割分担についても、適切に見直しを図ること。(p. 81 参照)</p>
その他改善事項	特になし。
主務大臣による改善命令を検討すべき事項	特になし。

4. その他事項	
監事等からの意見	<ul style="list-style-type: none"> ・研究及び普及促進について、大学、高等専門学校機構や民間企業との連携を引き続き進めていく必要がある。また、限られた人的リソースの中で、研究所業務を適切に運営していくためにも同様に外部機関との連携が重要である。 ・学びラボやインクル DB 等の活用、研修のオンライン化等を引き続き進めていただくことで ICT の活用を促進するよう期待する。また、業務運営効率化等の観点から、規模に応じた DX についても引き続き推進していく必要がある。 ・研究所について保護者、通常学級の教員や管理職にもこれまで以上に知っていただけるように縦のネットワークを築くことを期待する。そのネットワークを活用して、現場からの様々なニーズを吸い上げて研究に反映いただければと思う。
その他特記事項	特になし。

※ 評定区分は以下のとおりとする。(「文部科学省所管の独立行政法人の評価に関する基準(以降「評価基準」とする)」p17～参照)

S：中期目標管理法人の業績向上努力により、全体として中期目標における所期の目標を量的及び質的に上回る顕著な成果が得られていると認められる。

A：中期目標管理法人の業績向上努力により、全体として中期目標における所期の目標を上回る成果が得られていると認められる。

B：全体としておおむね中期目標における所期の目標を達成していると認められている。

C：全体として中期目標における所期の目標を下回っており、改善を要する。

D：全体として中期目標における所期の目標を下回っており、業務の廃止を含めた抜本的な改善を求める。

1-2-3 中期目標管理法 中期目標期間評価（見込評価） 項目別評価総括表様式

中期目標	年度評価					中期目標期間評価		項目別 調書No.	備考 欄
	令和3 年度	令和4 年度	令和5 年度	令和6 年度	令和7 年度	見込 評価	期間実 績評価		
I. 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する事項									
1. 特別支援教育に係る実際の・総合的研究の推進による国の政策立案・施策推進等への寄与及び教育現場への貢献	B○ 重	A○ 重	A○ 重	A○ 重		A○ 重		I-1	
2. 各都道府県等における特別支援教育政策や教育実践等の推進に寄与する指導者の養成	A○ 重	S○ 重	A○ 重	A○ 重		A○ 重		I-2	
3. 総合的な情報収集・発信や広報の充実及び関係機関等との連携強化を通じた特別支援教育に関する幅広い関係者の理解の促進	B○ 重	A○ 重	A○ 重	A○ 重		A○ 重		I-3	

中期目標	年度評価					中期目標期間評価		項目別調 書No.	備考 欄
	令和3 年度	令和4 年度	令和5 年度	令和6 年度	令和7 年度	見込 評価	期間実 績評価		
II. 業務運営の効率化に関する事項									
1. 業務運営の効率化に関する事項	A	B	A	A		A		II-1	
III. 財務内容の改善に関する事項									
1. 財務内容の改善に関する事項	B	B	B	B		B		III-1	
IV. その他業務運営に関する重要事項									
1. その他業務運営に関する重要事項	B○ 重	A○ 重	A○ 重	A○ 重		A○ 重		IV-1	

1. 当事務及び事業に関する基本情報			
I-1	特別支援教育に係る実地的・総合的研究の推進による国の政策立案・施策推進等への寄与及び教育現場への貢献		
関連する政策・施策	施策目標2 確かな学力の向上、豊かな心と健やかな体の育成と信頼される学校づくり 政策目標2-8 一人一人のニーズに応じた特別支援教育の推進	当該事業実施に係る根拠(個別法条文など)	独立行政法人国立特別支援教育総合研究所法第12条第1項第1号
当該項目の重要度、困難度	【重要度：高】 研究活動は、研究所の諸活動の中核であり、我が国の特別支援教育のナショナルセンターとして、国の政策立案・施策推進に直接に寄与することはもとより、研修事業や情報普及活動を通じて研究成果を教育現場に還元することは、インクルーシブ教育システムの構築を図る上で不可欠であることから、重要度は高い。	関連する政策評価・行政事業レビュー	令和7年度行政事業レビュー番号 予算事業ID 001546、001547

2. 主要な経年データ													
① 主要なアウトプット(アウトカム)情報								② 主要なインプット情報(財務情報及び人員に関する情報)					
指標等	達成目標	基準値 (前中期目標期間 最終年度値等)	令和3年度	令和4年度	令和5年度	令和6年度	令和7年度		令和3年度	令和4年度	令和5年度	令和6年度	令和7年度
研究課題の実施件数	毎年度5~7件	8 ※前期目標値「毎年度10件程度」	6件	6件	5件	5件		予算額(千円)	308,332	303,567	296,198	308,301	
研究成果の教育現場等での活用状況	6割以上	89.4	82.5%	81.9%	83.3%	77.2%		決算額(千円)	268,423	259,263	236,925	258,168	
研究活動の外部評価 (研究終了時の評価で5段階で4以上の割合)	100%	100%	—(3年度に終了した研究課題はない)	100%	100%	—(6年度に終了した研究課題はない)		経常費用(千円)	275,126	264,010	242,141	248,268	

合)														
									経常利益 (千円)	503	7,536	9,037	8,074	
									行政サービス実施 コスト (千円)	—	—	—	—	
									行政コスト (千円)	276,345	264,010	242,141	248,268	
									従事人員数	22	20	19	20	

3. 中期目標期間の業務に係る目標、計画、業務実績、中期目標期間評価に係る自己評価及び主務大臣による評価

中期目標、中期計画				
主な評価指標等	法人の業務実績・自己評価		主務大臣による評価	
	業務実績	自己評価	(見込評価)	
<p>(1)国の政策課題等に対応した研究の推進と研究成果の普及</p> <p><主な定量的指標></p> <p>・国の政策立案・施策実施や教育現場の喫緊の課題解決のために必要な調査研究を、大学や国の研究機関等多様な機関との連携を進めながら、毎年度5～7件程度実施する。</p>	<p><主要な業務実績></p> <p>【国の政策立案・施策実施や教育現場の喫緊の課題解決への寄与<定量的指標、その他の指標>】</p> <p>ア 研究課題の実施状況</p> <p>この5年間に取り組んだ重点課題研究及び障害種別特定研究(※)は以下のとおりであり、実施件数について、全ての年度で目標を達成した。</p> <p>各研究課題の実施に際しては、重点課題研究について、研究職員の障害種別の専門性の枠を超えたチーム編成を行い、複雑化・多様化する課題に柔軟に対応できる体制を整備するとともに、都道府県等の教育委員会と協力し、6つの自治体から1年間派遣された特別研究員に参画いただくことで、教育現場の情報を得ながら研究を進められる体制を確保した。加えて、重点課題研究に限らず全ての研究課題において、文部科学省の視学官及び特別支援教育調査官、関係団体・機関、研究者、有識者等に研究協力者または研究協力機関として参画いただいた。このように、国との密接な連携を図りつつ、現場の課題と研究の</p>	<p><自己評価> A</p> <p>主な定量的指標、その他の指標において、いずれも所期の目標を上回る成果が得られたものと考え、A評定とした。所期の目標・指標を十分に達成している具体的な根拠は以下のとおりである。</p> <p><根拠></p> <p>研究基本計画に基づき、国の特別支援教育政策の推進又は教育現場の喫緊の課題解決に寄与する研究(重点課題研究)及び、各障害種における喫緊の課題の解決に寄与する研究(障害種別特定研究)に取り組む、その実施件数について、<u>目標値を達成する見込みである。</u></p> <p>すべての研究課題において、文部科学省の視学官及び特別支援教育調査官に研究協力者として参画いただいたことで、<u>随時、国の動きに係る情報を得たり、政策的な観点からの助言を得たりすることができ、研究内容の充実を図れたこと、ま</u></p>	<p>評定</p> <p>A</p>	<p><評定に至った理由></p> <p>全体として中期目標に定められた以上の業務の進捗が認められるため。</p> <p>定量的指標を着実に達成し、研究成果の教育現場等での活用状況については、定量的指標の120%以上を達成しており、我が国の特別支援教育を取り巻く状況を踏まえ、国の政策課題や教育現場の喫緊の課題に対応した研究を中心に精選、重点化して、戦略的かつ組織的に実施していると認められる。</p> <p>他にも、研究職員の研究力の向上や外部競争的資金獲得の取組として、外部専門家を招聘した「研究力向上セミナー」の実施、外部競争的資金獲得を支援するための所内説明会や参与との懇談の場を定期的に設けていること、研究成果を学校現場等で活用しやすい形で提供</p>

接続を図れる体制を構築することで、研究の実効性及び質を伴う研究とした。

○第5期の研究課題一覧

課題名		実施年
重点課題研究		
1	学習指導要領に基づく教育課程の編成・実施・評価・改善に関する研究	令和3～4年度
2	障害のある子どもの就学先決定の手続きに関する研究	令和3～4年度
3	ICT等を活用した障害のある児童生徒の指導・支援に関する研究	令和3～4年度
4	通常の学級における多様な教育的ニーズのある子供の教科指導上の配慮に関する研究	令和3～4年度
5	高等学校における障害のある生徒の社会への円滑な移行に向けた進路指導と連携の進め方等に関する研究	令和3～5年度
6	特別支援教育に係る教育課程の基準等に関する研究	令和5～7年度
7	多様な教育的ニーズのある子供の学びの場の充実に関する研究・通常の学級に在籍する子供への指導・支援に焦点を当てて	令和5～7年度
8	共生社会の担い手を育む教育に関する研究・障害理解教育の検討を中心に	令和5～7年度
9	障害のある児童生徒のキャリア教育の充実に関する研究	令和6～7年度
障害種別特定研究		
10	知的障害教育における授業づくりと学習評価に関する研究	令和3～4年度
11	肢体不自由教育におけるICTの活用に関する研究	令和5～7年度

た、関係団体、大学研究者、有識者等に研究協力機関・研究協力者として参画いただいたことで、各現場の実践的な知見や有識者の持つ知見を、各研究の調査内容や考察等に大いに反映できたことで、質の高い研究成果につながった。さらに、毎年度、外部有識者による評価を受けることで、様々な立場や専門分野からの幅広い視点を取り入れた研究の充実につながっており、一つの自治体や大学での実施は難しい、特別支援教育のナショナルセンターだからこそ可能な研究を実現した。

なお、研究課題の選定にあたっては、文部科学省特別支援教育課及び視学官、特別支援教育調査官との協議や教育委員会等を対象としたニーズ調査を踏まえて決定しているが、外部評価において、委員のコメントとして、「教育課程の編成、実施、評価、改善の在り方に関する研究がこの時期に実施された意義は大きく、…今後の実施に大きく寄与」「子どもや保護者が安心して就学を迎えるための要点6項目が示されていることは評価される」「障害特性に応じたICT活用が示されており、幅広く施策や課題解決への寄

するために、成果の概略やポイントを視覚的に提示したり、より理解しやすいレイアウトにしたりするだけではなく、成果物のイメージが出来た段階で学校等に意見照会を行うなど、学校現場の活用可能性を広げ、研究成果の還元強化したこと、及び、外部機関と連携を一層推進し、研究活動の充実を図ってきたことなどは評価できる。

<指摘事項、業務運営上の課題及び改善方策>

・研究成果の教育現場等での活用状況について、令和3年度から令和6年度にかけて6割以上となっており、高く評価できる。今後はさらに現場で活用しやすい成果物の作成を追求し、効果的な活用方法を分析し、SNS等を駆使し幅広く周知するなど、量的のみならず質的な面においても毎年度改善を図ることが重要である。

・我が国唯一の特別支援教育のナショナルセンターとしての役割を踏まえ、国の政策的課題や新たな教育現場の課題に柔軟かつ機動的に対応すべく、研究所でなければ実施できない学校現場に根差した実践的な調査・研究に更に精選・重点化して実施する必要がある。

・次期中期目標期間においては、基礎的研究活動を含めた全ての研究活動において、最先端の理論と学校現場の実践を架橋する研究活動を期待したい。その際、基礎的研究活動を含め、障害種の枠にとらわれることなく、特別支援教育をめぐる将来的な動向や課題も見据えた最先端の実践的な研究活動に取り組むことを期待したい。また、基礎的研究活動を含めて研究活動の選択と集中を行い、限られたリソースの有効活用を図られたい。

・全ての研究活動の実施について、引き続き、国と密に連携を取りながら喫緊の課題に対応して実施することが求められる。また、アウトカムを意識して、学校現場の変革に繋がる研究活動に集中的に取り組

<p><その他の指標></p> <ul style="list-style-type: none"> ・国との協議を経て研究体系を策定し、研究の必要性や方向性、研究所が実施する研究の内容、達成すべき成果等を踏まえ、戦略的かつ組織的に研究を実施したか。 	<p>※「重点課題研究」国の特別支援教育政策の推進、または教育現場等の喫緊の課題解決に寄与する研究</p> <p>「障害種別特定研究」各障害種における喫緊の課題解決に寄与する研究</p> <p>○研究課題の実施件数【目標：毎年度5～7件】</p> <table border="1" data-bbox="504 387 1019 730"> <thead> <tr> <th></th> <th>実施件数</th> <th>目標達成率</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>令和3年度</td> <td>6件</td> <td>100%</td> </tr> <tr> <td>令和4年度</td> <td>6件</td> <td>100%</td> </tr> <tr> <td>令和5年度</td> <td>5件</td> <td>100%</td> </tr> <tr> <td>令和6年度</td> <td>5件</td> <td>100%</td> </tr> <tr> <td>令和7年度 (実施中)</td> <td>5件</td> <td>100%</td> </tr> </tbody> </table> <p>イ 戦略的かつ組織的な研究の実施</p> <p>上記の研究の実施にあたり、5年間の研究のロードマップを明らかにした「第5期中期目標期間における研究基本計画」を策定し、それに基づいて、戦略的かつ組織的に重点課題研究及び障害種別特定研究を実施した。なお、この研究基本計画については、特別支援教育を巡る国の動向等を踏まえた新たな研究課題の設定について反映させるなど、随時柔軟に見直しを行った。</p> <p>さらに、研究課題毎に、より詳細な研究実施計画書を作成し、これに基づいて進捗管理を行いながら研究に取り組んでおり、毎年度実施している外部評価における評価者からの意見や、教育委員会や学校長会等に対して行う研究ニーズ調査における</p>		実施件数	目標達成率	令和3年度	6件	100%	令和4年度	6件	100%	令和5年度	5件	100%	令和6年度	5件	100%	令和7年度 (実施中)	5件	100%	<p>与が期待できる」「学校現場において、全ての教師が各教科の指導の際に理解をして実践できるよう…、分かりやすくまとめられている」「多くの教育現場で活用されることにより…、生徒の進路実現とともに、進路先での適応や活動の充実につながることを期待できる」「学習指導要領との関連も含めて検討・整理することは教育現場にとって意義は大きく重要な取組である」などの意見が示されており、<u>各研究課題に</u> <u>取り組む意義や必要性について外部有識者からも評価をいただいている。</u></p>	<p>むことを期待したい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・多様な障害領域の研究者を配置している大学や、研究機関や民間企業と組織的かつ継続的な連携体制を構築し、研究の多様性の確保に努め、先端的な研究を推進すること。また、引き続き、研究者が創意工夫しながら行う多様な研究について、適切に評価を行うとともに、研究職員の研究力の向上及び外部競争的資金獲得に向けた取組を実施すること。 ・研究所の研究活動について、その研究費が公費で賄われている研究課題においては、研究活動の透明性や効率性を確保し、その信頼性を確保することが求められていることを踏まえ、次期中期目標期間においては、外部資金による研究や受託研究等を除く全ての研究活動について、外部評価の対象とすること。また、外部評価にあたっては、特別支援教育を必ずしも主たる専門とはしない隣接領域の研究者等も委員に加えることを検討すること。 ・研究成果のとりまとめ・公表にあたっては、文部科学省とも連携しながら、学校現場や保護者を意識し、わかりやすく、学校現場を意識したものとなるよう留意いただきたい。次期中期目標期間においては、国の政策立案への寄与について、基礎的研究活動を含めた全ての研究活動の成果が国のどのような政策に、どのような場面で活用されているのかを具体的に把握することが必要であり、国との連携について、これまで以上に取組を進めていただきたい。また、任命権者の政策立案への寄与についても、各研究の成果が任命権者の政策立案において、具体的にどのように寄与しているのか、把握することに努めていただきたい。 ・次期中期目標期間においては、通常の学級に在籍しながら通級によ
	実施件数	目標達成率																			
令和3年度	6件	100%																			
令和4年度	6件	100%																			
令和5年度	5件	100%																			
令和6年度	5件	100%																			
令和7年度 (実施中)	5件	100%																			

<p><その他の指標></p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究課題の精選・採択や研究計画・内容の改善を図るため、文部科学省との協議、各都道府県教育委員会や特別支援学校長会等の関係機関に対する研究ニーズ調査を行った上で研究を行ったか。 ・期待される研究成果を明確化した上で、研究計画の立案をしたか。 	<p>意見等を参考に、研究内容等を随時見直しながら研究を進めた。この見直しに関しては、毎年度所内の役員ヒアリング等を実施して見直しの有無及び見直し内容を確認し、研究実施計画書に反映させるようにした。</p> <p>ウ 協議やニーズ調査等を踏まえた研究の実施</p> <p>各研究課題については、文部科学省特別支援教育課及び特別支援教育調査官と協議するとともに、毎年度、都道府県等教育委員会や特別支援教育センター、学校長会等に対して研究ニーズ調査を行い、その結果も踏まえて、研究課題の精選・採択や研究計画・内容の改善を図った。また、研究実施計画書にも、ニーズ調査結果等を踏まえて見込まれる研究成果を明記する等、研究の立案段階から出口を見据えて計画を立てることで、計画から成果物のとりまとめ・情報発信に至るまで、一貫した目的に向かって研究を進めた。</p> <p>ニーズ調査では、重点課題研究及び障害種別特定研究の研究課題について、令和3年度は課題6件に対して338件、令和4年度から6年度は、課題5件に対して、それぞれ309件、260件、246件と、多くの意見をいただいた。いただいた意見を参考に、特別支援学校のみを調査対象としていたところ小・中学校も対象に含めるなど調査の対象を拡大したり、研究成果の提示の仕方を工夫（モデルの提示、具体的な取組事例の提示、地域や学校で活用可能な事例集の提供等）したりするなど、研究内容及び成果物の充実につなげた。</p>	<p>毎年度実施している研究ニーズ調査によって、<u>都道府県・政令指定都市等が抱える課題意識や、学校現場や有識者が求める研究成果、研究内容等について把握することができ、</u>それらを研究に反映させることで、<u>より質の高い研究の実現及び活用されやすい成果物のとりまとめにつなげることができた。</u>特に、各方面から期待される成果が明確になり、とりまとめのイメージを意識化した上で研究を進めることができたこと、また、成果物の中で事例を効果的に取り上げるなど、いただいた意見を踏まえた成果物の充実を図れたことは大変有意義であり、こういった観点が、外部評価における高評価にもつながった。</p>	<p>る指導を受ける子供や、特別支援学級に在籍する子供が増加する一方で、障害の多様化や重度・重複化なども進んでいることを踏まえ、特別支援教育の現場において、一人一人の教育的ニーズに的確に応える指導が提供できるよう、多様な課題に柔軟に対応でき、先端的かつ革新的な研究が可能となる組織体制を整備すること。</p> <p><その他の事項></p> <p>【有識者からの意見】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第5期においては、重点課題研究9件、障害種別特定研究2件は、いずれもインクルーシブ教育システムの更なる発展、次期学習指導要領の検討などにつながる有用な知見等を提起しており、特別支援教育に関するナショナルセンターとしての役割を十分に果たしたと評価できる。第6期においても、文部科学省や教育関係者が必要と判断し、かつ、研究所でなければ取り組めない総合的な研究の推進を望んでいる。 ・大学等との連携について、第5期においては、広島大学、福岡教育大学、大阪大学等との連携構築が進んだことで、研究の幅が広がり、その水準がより深まったことが伺える。第6期においても、大学（教育系大学・学部の特別支援教育関連講座等）との連携を増加させることが求められる。その際は、教育系単科大学か総合大学の教育学部か、地域型の小規模の教育系大学・学部か、エリアの拠点となっている大規模な教育系大学・学部かなどで、連携の在り方が多少変わることが考えられ、こうした点を念頭に入れたネットワークの構築を検討する必要がある。 ・科研費等の外部競争的資金の獲得について、研究所は、設置目的や業務内容などから、これらの獲得については大学等と比較してかなり厳しい状況にあるものの、第5期においては、「研究力向上セミナー」
---	---	--	---

<p><その他の指標></p> <ul style="list-style-type: none"> 多様な障害領域を配置している大学や国の研究機関との組織的かつ継続的な連携体制を構築し、研究の多様性の確保に努め、先端的な研究を推進したか。 将来的な教育政策の検討資料を提示する「先端的・先導的研究」、大学等との共同研究、国からの要請等に応じた研究、科学研究費補助金等の各種研究資金制度を活用した外部資金研究等の実施を促し、研究活動の活性化を図ったか。 	<p>【大学等関係機関・団体との連携による研究の実施<その他の指標>】</p> <p>ア 先端的・先導的研究</p> <p>上記の重点課題研究及び障害種別特定研究のほか、将来的な教育政策の検討資料や教育実践の選択肢、特別支援教育研究における新たな手法等を提示することを目指すとともに、研究職員の主体的かつ意欲的な研究活動を推進するものとして、「先端的・先導的研究」1課題を令和5～6年度に実施した。研究員の創意工夫による主体的かつ意欲的な研究活動とするため、研究テーマについて、令和4年度に所内公募を実施し、審査委員会を経て採択された「知的障害のある児童生徒に対する系統的なプログラミング教育推進のための先導的研究」に取り組んだ。</p> <p>本研究は、プログラミング教材を開発している大手通信会社の関連会社と共同研究協定を結び、5校の研究協力機関（特別支援学校）とともに実施した。教材の開発企業との共同研究が実現したことで、具体的なツールを活用した実践及びその結果のフィードバックや課題等に関する具体的な協議が可能となり、プログラミング教材について、知的障害のある児童生徒にも活用しやすいインターフェースやツールの改善と活用方法について成果を上げることができた。</p>	<p><u>知的障害のある児童生徒を対象としたプログラミング教育は、実施には困難が伴うため、実践事例が十分に蓄積されておらず、かつ、市場規模が小さいために民間事業者の参入が厳しい</u>という現状がある。こうした現状を踏まえれば、「知的障害のある児童生徒に対する系統的なプログラミング教育推進のための先導的研究」は、<u>教育現場の喫緊の課題に対応する重要度の高い研究課題であり、また、その課題に大手通信会社の関連会社と連携して取り組んだことは実用化に向けた観点からも非常に意義のあるもの</u>である。</p> <p>本研究では、プログラミング教材を活用した実践研究を通して、知的障害のある生徒のプログラミング教育の教育課程上の在り方（カリキュラムマネジメント、教科等の内容との関連、評価の在り方）の検討を行っており、今後、実践事例と併せて研究成果を公表することで、<u>各学校における実践の充実に資するもの</u>になると考える。</p>	<p>等の実施によって、令和6年度の採択率及び交付額が向上しており、評価すべきことである。第6期においては、連携協定を結んだ大学等との共同研究などを一層進めるなどして、これらの獲得をさらに目指す必要がある。</p> <ul style="list-style-type: none"> 研究成果の公表について、第5期においては、コンパクトなリーフレットにするなどの工夫がなされている。第6期においては、教員はどのような情報を、どのような手段で得たいと考えているのかなど、ニーズ調査を組織的・系統的に行い、より効率的かつ効果的な活用につながる工夫を検討する必要がある。 文部科学省が新規採用教員を対象に10年目までに特別支援学級等での経験をさせるとした背景には、現状の特別支援教育が児童生徒や保護者の期待に十分に答えきれていない現状があり、その要因の一つとして、特別支援教育が必要な児童生徒の増加と多様化がある。そして、インクルーシブ教育システムが各学校で展開されるには、全ての教員に特別支援教育の知識や技能が必要な現状を捉えてのことだと考えている。 <p>現状、各校の特別支援教育の実施状況やその質は、校内にその中核となる特別支援教育の知識や技能を身に付けた教員がいるかないかで、差が生まれている。特に学校全体で取り組む必要がある特別支援教育では、校長のリーダーシップが重要である。しかし、全国特別支援学級・通級指導学級等設置校長協議会の調査では、校長自身が特別支援学級等での指導の経験がなく、校内の特別支援教育をリードするには不安を抱えている現状が見て取れる。全国特別支援学級・通級指導学級等設置校長協議会でも校長等に管理職研修を行っているが、日々校内で起こる様々な対応には、その場で使えるツールが必要である。そのようなときに助けとなっているのが研究所の様々な調査研究に基づいた資料等である。</p>
--	---	---	---

	<p>イ 大学等との連携</p> <p>研究所では、研究の多様性を確保し、また、質の充実を図るため、大学等の関係機関との連携体制の構築に努めてきた。</p> <p>①広島大学との連携協定を踏まえた共同研究</p> <p>障害種別特定研究「肢体不自由教育における ICT の活用に関する研究」において、広島大学の研究者に研究協力者として参画いただき、肢体不自由教育に関する有識者として、知見の提供や調査結果の検討・分析等に協力いただいている。広島大学と共同で研究を進めることにより、協力者の専門性に加え、教員養成課程を有する大学及び総合大学としての知見の提供も受けることができ、また、広島大学と連携して ICT 活用に係る取組を精力的に進めている広島県立の特別支援学校における事例研究の展開が可能となり、研究活動の充実につながった。</p> <p>②国立高等専門学校機構との連携協定を踏まえた共同研究</p> <p>同様に、障害種別特定研究「肢体不自由教育における ICT の活用に関する研究」において、国立熊本高等専門学校の研究者に研究協力者として参画いただき、ICT 活用に関する専門的立場からの知見の提供をいただいている。国立高等専門学校機構と共同で研究を進めることにより、当研究所だけでは十分に持ち合わせていない工学分野からの知見を得ることができ、研究の質的向上につながった。</p> <p>③福岡教育大学との連携</p> <p>福岡教育大学における九州エリアにおける教員養成の中核拠点の形成を目指した将来構想を踏まえて、特別支援教育を担う教員の資質向上と、地域課題の解決に向けた研究における連携・協力体制をとることにより、我が国の特別支援教育及びインクルーシブ教育システムの構築・推進</p>	<p>国の政策推進や教育現場の喫緊の課題に対応するため、大学等の関係機関との連携協定や共同研究を通じて、<u>研究所が有する専門性以外の知見を取り入れることで、研究活動の充実を図ってきた。</u></p> <p>具体的には、研究協力者として参画いただく方の専門分野に加え、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・広島大学が有する教員養成大学及び、総合大学としての知見 ・国立高等専門学校機構が有する工学分野の知見 ・福岡教育大学が有する教員養成大学及び九州エリアの拠点としての知見 ・大阪大学大学院連合小児発達学研究所が有する医科学的知見等、<u>各組織が有する知見を取り込むことで、当研究所の研究及び研修の幅の拡大及び質の充実を図ることが可能となる。</u>今期を通じて、これら大学等との連携の実現及び協議を進められたことは、<u>今後の特別支援教育の一層の充実・推進につながる成果である。</u> 	<p>先日、都内A中学校で特別支援教育の校内研修をした際、通常の学級に在籍する支援が必要な生徒について研究所を紹介したが、30人ほどの教員の内、10名ほどの教員がすでにチェック済みであった。ここ数年で学校現場での研究所の認知度はかなり高くなっている。それだけ現場のニーズがあるということである。特にこの5年間に取り組んだ重点課題研究と障害種別特定研究の内容は、学校現場が抱える喫緊の課題であり、研究所の研究に基づく支援の具体は、現場での児童生徒の支援に直結しており、評価できる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・近年の状況を踏まえると、複合障害への対応を含めて、障害種別を超えた、多角的多面的な研究が必要である。そこで、重点課題研究について、研究職員の障害種別の専門性の枠を超えたチーム編成を行い、複雑化・多様化する課題に柔軟に対応できる体制を整備したことは評価できる。また、都道府県等の教育委員会と協力し、6つの自治体から1年間派遣された特別研究員の参画を得たことは、教育現場の情報を得ながら研究を進められる体制確保であり継続を期待する。 ・特別支援教育の課題として、今期は特に「教育課程の編成、実施、評価、改善の在り方に関する研究」が実施された意義は大きい。今後も専門家はもとより教育現場と密接に連携した研究の継続が期待される。 ・「こども基本法」が施行されている今、こどもの視点・児童生徒の視点が重視される必要がある。そこで、「子どもや保護者が安心して就学を迎えるための要点6項目」が示されていることは評価される。 ・今期は、GIGA スクール構想の普及が進む時期であったところ、障害特性に応じた ICT 活用が示されていることは有意義である。引き続き、ICT の活用が児童生徒の自律的主体的学習を保障する方向での
--	--	---	--

	<p>並びに関連分野の発展・推進に寄与することを目的とし、当研究所と福岡教育大学との間で連携協定を締結した。</p> <p>とりわけ、地域課題の解決に向けた研究の推進において、当研究所と大学、及び自治体が、それぞれどのような役割を担い協働するのか等の観点から検討を進め、教員の養成・研修と研究の一体的取組や共同研究等の組織的かつ効果的な実施などについて盛り込んだ協定書を令和7年7月4日に締結した。</p> <p>④大阪大学との連携に向けた協議</p> <p>大阪大学大学院連合小児発達学研究科の研究領域が、当研究所の研究課題と関連する可能性が考えられたこと、さらに、医科学系の研究と当研究所の教育系の研究の融合は有益な成果をもたらすと考えられたことから、当研究所の各研究班の取組の中で、関連すると思われる研究活動等を取り上げ、連携の可能性について協議を進めた。</p> <p>⑤神奈川歯科大学との共同研究に向けた協議</p> <p>横須賀地域研究機関等連絡協議会の参画機関である神奈川歯科大学と連携し、同大学教授が開発したVR（仮想現実）教材を活用した、知的障害のある児童生徒に対する防災教育におけるICT活用の検討や、盲ろう児に関わる教員向けの、指導・支援内容の課題や改善点を把握することができる研修コンテンツの開発を目的とした共同研究の可能性についての協議を令和6年7月から開始した。協議はオンラインにより実施し、具体的な研究内容について意見交換を行った。令和7年度から共同研究を実施する方向でさらに検討することとしている。</p> <p>⑥その他地域連携</p> <p>地域との連携強化の一環として、筑波大学附属久里浜特別支援学校との連携をはじめ、神奈川県教育委員会や県内</p>	<p>研究が期待される。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・広島大学・国立高等専門学校機構との連携協定を踏まえた共同研究、福岡教育大学、筑波大学附属久里浜特別支援学校との連携をはじめ、神奈川県教育委員会や県内特別支援学校等との協働の継続は有意義である。また、広島大学との連携協定に基づき設置した西日本ブランド広島オフィスを拠点とした地域連携、広島県立教育センターが実施する特別支援教育・教育相談に関する研究事業への参画は、広域的な地域貢献の事例として評価し、持続可能性の確保を期待する。 ・外部専門家等を招聘した「研究力向上セミナー」を毎年度2～3回実施し、研究職員の研究力の向上及び研究活動の活性化に努めている点は有意義である。加えて、研究の内部評価及び外部評価を実施しており、特に「研究成果の公開及び還元」の重視を評価する。 ・研究内容は、どれも学校現場の喫緊の課題に対応した内容であり、今後の特別支援教育の充実のために貴重な資料となるものである。また、それらをより広く広報するご努力に敬意を表す。今後は、それらの資料が実際の教育活動にどれだけ活用され、効果に結びついているかも検証していく必要がある。 ・ファーストリテイリング財団から資金をいただいて盲ろうに関する教育支援の在り方について研究をしている点は、特別支援教育のナショナルセンターだからこそできる研究であり、非常に良い取組である。
--	--	---

	<p>特別支援学校等との協働により、研究の社会的実装と成果の還元を推進した。さらに、広島大学との連携協定に基づき設置した西日本ブランチ広島オフィスを拠点とした地域連携も活発に進め、広島県立教育センターが実施する特別支援教育・教育相談に関する研究事業への参画のほか、地域研修において研究所の研究成果を取り入れた講義を行うなど、積極的に情報発信を行った。</p> <p>以上のように当研究所では、外部協力者との連携、現場との接続、柔軟な体制構築という観点から、研究推進の基盤を多面的に整備しており、国の施策推進および教育現場への還元に資する実践的かつ実効性のある研究体制の強化に努めてきた。</p> <p>ウ 研究活動の活性化</p> <p>外部専門家等を招聘した「研究力向上セミナー」を毎年度2～3回実施し、研究デザイン、研究手法、統計・分析、効果的な結果の示し方（図の作成）等について取り上げ、研究職員の研究力の向上及び研究活動の活性化に努めた。加えて、各研究チーム、研究班、研究職員が参与と面談する機会を定期的に設け、研究方法、考察の視点等について助言を得るなど、研究の質的充実に努めた。</p> <p>また、外部資金研究等の実施に向けては「外部競争的資金への申請に向けた準備に資する経費」を設け、研究職員の外部資金獲得を支援した。当経費は、研究職員からの申請に基づき、所内審査を経て支給を決定しており、令和3～6年度に当経費を支給された研究職員及び研究班26件のうち、12課題が科学研究費助成事業（科研費）に採択された（採択率46.2%）。</p>	<p>後述のとおり（本評価書P95-96）、科研費の実施状況については、令和6年度実施課題までを対象とした新型コロナウイルスによる研究課題の延長措置があったため、新規の申請件数が少ない状況にあったが、<u>令和6年度には採択率及び交付額ともに令和5年度から向上した</u>。さらに、令和7年度には、個人研究だけでなく、<u>研究所の研究班として申請した課題も採択された状況であり、毎年度の研究力向上セミナーの実施や、「外部競争的資金への申請に向けた準備に資する経費」の取組が実を結んだ結果と考える。</u></p> <p><u>研究成果の活用状況について、令</u></p>	
--	--	---	--

<主な定量的指標>

・教育現場における研究成果の活用状況について毎年度アンケート調査を実施し、6割以上の現場で改善に活用される。

<評価の視点>

・主務大臣からの指摘事項等への対応を行ったか。

【研究成果の普及、活用状況等<定量的指標、その他の指標、評価の視点>】

ア 研究成果の活用状況の調査の実施

終了した研究課題毎に、研究成果の活用状況（教育委員会での業務での活用、研修会等での活用、学校への情報提供等）について、都道府県等教育委員会や特別支援教育センター等にアンケート調査を実施した結果、「活用できた」割合は以下のとおりであり、令和6年度までの全ての年度において、目標値を達成した。

	活用できた割合
令和3年度	82.5% 【137.5%】
令和4年度	81.9% 【136.5%】
令和5年度	83.3% 【138.8%】
令和6年度	77.2% 【128.7%】

※【 】内の％は「数値目標 60%以上」に対する目標達成率

イ 活用方法等の把握（活用度調査の改善）

令和3年度実績評価時における主務大臣からの指摘や、有識者からの意見を踏まえ、活用状況の調査において研究成果の活用に関して、定量的な側面だけでなく、活用の方法についても把握するよう調査の改善を図った。

具体的には、令和4年度より、活用の具体例についても併せて調査することとし、活用の実際を把握し、研究成果の示し方や研究成果物の工夫に生かした。具体的な活用場面としては、

和6年度までの全ての年度において高い活用度となっており、令和6年度までの全ての年度において目標値を超えて達成している。

主務大臣の指摘を踏まえ、研究成果の活用状況に加え、活用方法についても把握するよう改善を図ったことで、就学時健診時等において活用した、入学説明会や特別支援教育理解のための説明会の資料として活用した等、具体的な活用の実態を把握することができた。これを基に、具体的な活用場面や活用方法を

<p><その他の指標></p> <p>・研究成果について、特別支援教育に関する国の政策立案・施策推進等に寄与するよう国に提供したり、教育実践に寄与するよう、都道府県等教育委員会・特別支援教育センター・学校等に提供したりするとともに、広く一般に公開するなど、研究成果等の普及及び特別支援教育に関する理解啓発を図ったか。</p>	<p>特別支援教育コーディネーターや管理職の研修会における資料、入学説明会や特別支援教育理解のための説明会の資料、予算要望の際の資料、施策検討の参考資料等、様々な回答があり、自治体や学校の状況やニーズに応じて活用いただいていることがうかがえた。</p> <p>＜主務大臣指摘＞（令和3年度実績評価時）</p> <p>研究の活用方法についても把握するなど、質的な側面の充実に努めること</p> <p>＜有識者意見＞（令和3年度実績評価時）</p> <p>今後（どのように活用されたのか）を捉えることで、さらなる活用充実が図れることが望まれる</p> <p>【研究成果の効果的還元<その他の指標>】</p> <p>ア 研究成果の公開及び還元</p> <p>研究成果については、文部科学省特別支援教育課に提供するとともに、研究所ホームページ等への成果報告書等の掲載や研究所セミナーにおける発表等を通じて、都道府県等教育委員会、特別支援教育センター、学校等をはじめ広く一般の方に公開した。また、研究と研修に一体的に取り組んでいる研究所の強みを生かし、特別支援教育専門研修や指導者研究協議会、NISE 学びラボ等の講義内容にも最新の研究成果を反映させ成果の還元を行った。</p> <p>なお、研究成果については、研究成果報告書のほか、サマリー集やリーフレット、ガイドブック、指導資料等を作成しており、主務大臣や有識者の指摘、外部評価、都道府県等教育委員会等を対象とした研究ニーズ調査の結果を踏まえ、現場で活用しやすい情報提供を行った。加えて、情報発信に関しても、研究所のホームページから研究成果物等にアクセスしやすいようにページのレイアウトを工夫したり、研究成果物を活用しや</p>	<p><u>想定しながら研究成果物の作成に取り組むことが可能となるなど、提供方法を検討する上で大きな効果があり、より活用しやすい研究成果をとりまとめることができた。</u></p> <p>研究成果については、<u>それぞれのニーズに応じて活用しやすくなるよう、研究成果報告書だけでなく、リーフレットやガイドブックなど、様々な形でとりまとめ、提供するとともに、ホームページによる公表や教育委員会等宛に送付するだけでなく、研究所主催のセミナーや研修の講義の中で実際に活用する場面を設けるなど、その有用性や活用方法を理解いただけるよう工夫し、普及を行った。</u></p>	
--	--	---	--

<p><評価の視点></p> <p>・主務大臣からの指摘事項等への対応を行ったか。</p>	<p>すくするためのチラシを作成したりして、一層の成果普及を目指した。</p> <p>イ 研究成果のコンパクト化</p> <p>令和3年度及び5年度実績評価時の主務大臣指摘、令和4年度実績評価時の有識者からの意見を踏まえ、研究成果の普及・活用の充実につながるよう、成果物のとりまとめを工夫した。具体例として、自閉症班において令和4年度から継続して取り組んだ「自閉症のある子供の自立活動の指導に関する検討」について、この成果を基に、令和7年3月に、「自閉症のある子供の自立活動と各教科等の関連を図った指導を考えよう！」と題したリーフレットにまとめた。リーフレットは全部で6ページとし、漫画や図式を多用してポイントが簡潔に伝わるよう工夫した。</p> <p>また、資料作成等に係る所内研修を行い、レイアウトの工夫の観点など、研究成果の効果的な提示に関して知見を深める機会を設けた。</p>	<p><u>主務大臣の指摘を踏まえ、研究成果については、学校現場等にわかりやすく、活用しやすい形で提供するために、成果の概略やポイントを視覚的に提示したり、より理解しやすいレイアウトにしたりする等、工夫・検討を重ねてまとめるようにしている。</u>例えば、成果物のイメージ案ができた段階で、研究協力機関となっている学校に意見照会を行って改善を図るなど、現場のニーズに寄り添った成果物の作成を心がけ、<u>コンパクトなリーフレット等に提供したことで、学校現場の活用可能性を広げられたことは、研究成果の還元を強化し、特別支援教育に取り組む自治体や学校現場へのより一層の支援につなげることができた。</u></p> <p>また、資料作成に係る所内研修を実施したことも、研究成果物の作成に効果をもたらしたと考える。</p> <p>以上、<u>重点課題研究及び障害種別特定研究等の着実な進捗と、終了課</u></p>	
---	--	---	--

	<p><主務大臣指摘> (令和3年度及び令和5年度実績評価時)</p> <p>研究成果をコンパクトにまとめるなど、多忙な教職員でも手に取りやすいような成果物を作成し、普及啓発の窓口を広めるとともに、ナショナルセンターとしての認知度を高めること。(令和3年度)</p> <p>成果物であるリーフレット等をより広く普及させるため、読み手のニーズを的確に把握した上で、レイアウト等の更なる工夫を期待する。(令和5年度)</p> <p><有識者意見> (令和4年度実績評価時)</p> <p>研究成果のエッセンスをコンパクトにまとめたリーフレット等は、学校現場での活用の幅を広げている</p>	<p>題に関する<u>研究成果の活用状況や研究成果の還元において成果を上げ、高い水準で目標を達成したほか、都道府県・市町村教育委員会等へのニーズ調査結果や、主務大臣からの指摘事項等にも十分に対応している</u>と考える。</p> <p><課題と対応></p> <p>特に、特別支援教育に対して関心が低い層にもアプローチできるよう、研究所の認知度向上に取り組みながら、研究成果の教育現場における一層の活用に向けて取り組んでいく。</p>	
<p>(2) 評価システムの充実による研究の質の向上</p> <p><主な定量的指標></p> <p>・外部評価において、全ての研究で、研究終了時に高い評価(5段階評価で4以上)を得る。</p>	<p><主要な業務実績></p> <p>【外部評価結果<定量的指標>】</p> <p>研究の内部評価及び外部評価として、研究課題(重点課題研究及び障害種別特定研究)の実施期間中に行われる中間評価及び、研究終了時に行われる最終評価を実施した。内部評価については当研究所の評価委員会において、外部評価については当研究所の運営委員会の下に置く外部有識者で構成される外部評価部会において行った。</p> <p>外部評価においては、令和5年度までに終了した全ての研究課題(6課題)において、5段階評価で4以上(A、A+)の評価を得ており、これまでの成果では目標値を達成している状況</p>	<p><根拠></p> <p>研究課題については、毎年度中間及び終了時に内部評価及び外部評価を実施し、<u>外部評価においては、令和6年度までに終了している全ての研究課題で「A+」または「A」の評価を受けた。目標値(5段階評価で4以上)を達成できる見込み</u>である。</p>	

<p><その他の指標></p> <p>・研究区分の特性に応じた評価システムを構築し、アウトカムを重視した評価の観点・項目の設定等を行い、評価システムの改善を図ったか。また、PDCA サイクルを重視して評価システムを運用したか。</p>	<p>である。</p> <p>【研究区分に応じた評価システム<その他の指標>】</p> <p>ア 先端的・先導的研究の評価</p> <p>先端的・先導的研究については、令和5～6年度実施の1課題について、役員、参与、外部有識者による開始前の評価を行い、研究の必要性等を検討のうえで実施を決定した。研究期間中は、定期的な参与との面談を通して、研究計画、内容に関する助言を得て適宜改善を図るとともに、役員ヒアリング及び所内研究成果等共有会において、研究の経過と成果、今後の課題等について報告・共有及び意見交換を行い、所内職員、参与から研究の充実に向けた助言を得た。そのうえで、研究成果報告書を作成し、研究成果を運営委員等の有識者に提示し、研究成果の意義や活用可能性等についての意見を得た。</p> <p>イ 外部資金研究等の評価</p> <p>外部資金研究等に関して、各研究の成果や意義について所内で検討するとともに、各研究の内容、結果、成果等を総覧できる NISE 研究レポートを作成して、運営委員会へ報告し、成果の意義や普及方法について意見・助言を得た。</p>	<p>先端的・先導的研究については、将来的な教育政策の検討資料や教育実践の選択肢を提示することを目標とする<u>研究の性格や役割を踏まえ、参与による定期面談、役員や所内職員による進捗確認、有識者による評価など、多くの視点を取り入れ、柔軟な評価や見直しを可能にしたことで、研究を進める過程で、学校現場での実用化に向けて、企業の開発担当者と意見交換の機会をもつなど、研究の充実に図ることができた。</u></p> <p>また、運営費交付金で行う研究とは枠組みが異なる<u>外部資金研究について、運営費交付金で行う研究と同様に、研究所の研究総覧である「NISE 研究レポート」に掲載することし、運営委員に提示したり、ホームページで公表するようにしたこと</u>で、<u>研究職員の外部資金研究への意識や研究内容、研究の進捗等に影響を与え、研究活動の充実につながった。</u></p>	<p>研究の評価については、中期計画にある、研究区分の特性に応じ、<u>アウトカムを重視した評価システム</u></p>
<p><評価の視点></p> <p>主務大臣からの指摘事項等への対応を行ったか。</p>	<p>【評価システムの充実<その他の指標>】</p> <p>評価の観点として、国の政策立案への寄与、国の施策推進への寄与、地方自治体の施策推進等への寄与、学校現場の課題解</p>	<p>研究の評価については、中期計画にある、研究区分の特性に応じ、<u>アウトカムを重視した評価システム</u></p>	

	<p>決への寄与の観点で該当する研究成果の活用可能性を評価するなど、アウトカムを重視する評価の観点を設定した。</p> <p>また、令和6年度には、中間評価について、研究の進捗状況の評価と次年度に向けた改善策や充実につながる方策についての意見を求めるとともに、その時点までの研究結果及び研究成果の公表の状況についても次年度の見通しを含めて評価するなど、評価の観点・項目の改善を行った。</p> <p>評価結果については、研究の改善・充実策を含めて速やかに研究チームに伝達し、PDCA サイクルを重視した評価システムの運用を行った。</p> <p>（主務大臣指摘）（令和5年度実績評価時）</p> <p>研究成果が国の政策立案・施策推進等や教育実践に寄与するよう、調査研究によって得られるアウトカムをより具体的に把握し、研究の質の向上を図ることが必要である。</p>	<p><u>を構築し、自己評価の充実を図った。また、内部評価及び外部評価ともに、評語による評価だけでなく、中間評価において研究結果や研究結果の公表の状況（今後の見込みを含む）、研究の改善・充実のための方策など、記述による評価を多く取り入れるなどの改善を図り、評価が、最終的な研究成果の充実に一層つながるものとなるよう工夫した。</u></p> <p>評価システムの運用に当たっては、<u>評価結果について、速やかに研究チームに伝えるなど、PDCAサイクルを重視した運用を行い、研究活動の質的向上につなげることで、中期目標を達成できる見込みである。</u></p> <p><課題と対応></p> <p>主務大臣の指摘を踏まえ、研究成果の活用については、アウトカム評価の指標について検討する。</p>	
--	--	--	--

<p>4. その他参考情報</p>
<p>令和3年度：予算額と決算額の差が10%以上であるが、新型コロナウイルス感染症感染拡大防止の観点から研究方法の変更によって支出が抑えられたことが要因である。</p> <p>令和4年度：予算額と決算額の差が10%以上であるが、研究活動に従事する人員数に変更があったことが大きな要因である。</p> <p>令和5年度：予算額と決算額の差が10%以上であるが、研究活動に従事する人員数の減少があったことが大きな要因である。</p> <p>令和6年度：予算額と決算額の差が10%以上であるが、当初の計画に比べ効率的に執行したことが大きな要因である。</p>

1. 当事務及び事業に関する基本情報			
I-2	各都道府県等における特別支援教育政策や教育実践等の推進に寄与する指導者の養成		
関連する政策・施策	施策目標2 確かな学力の向上、豊かな心と健やかな体の育成と信頼される学校づくり 政策目標2-8 一人一人のニーズに応じた特別支援教育の推進	当該事業実施に係る根拠(個別法条文など)	独立行政法人国立特別支援教育総合研究所法第12条第1項第1号
当該項目の重要度、困難度	【重要度：高】 ポストコロナ社会において、ICTを活用した適切な支援をはじめ、教育現場のニーズに対応できる各都道府県等の特別支援教育の指導者養成は喫緊の課題である。また、新しい時代の特別支援教育を担う教員の専門性向上に向けては、特別支援学校や特別支援学級、通級による指導の担当教員のみならず、全ての職員の資質を向上させることが求められており、各都道府県等が進める教員の資質向上への支援は喫緊の課題であることから、重要度は高い。	関連する政策評価・行政事業レビュー	令和7年度行政事業レビュー番号 予算事業ID 001546、001547

2. 主要な経年データ													
① 主要なアウトプット(アウトカム)情報								② 主要なインプット情報(財務情報及び人員に関する情報)					
指標等	達成目標	基準値 (前中期目標期間最終年度値等)	令和3年度	令和4年度	令和5年度	令和6年度	令和7年度		令和3年度	令和4年度	令和5年度	令和6年度	令和7年度
受講者の参加率	80%以上	—	113.3%	99.5%	100.2%	105.1%		予算額(千円)	250,015	233,096	227,438	236,731	
研修受講者の研修修了後における指導的役割の実現状況	80%以上	97.2%	98.6%	98.2%	98.9%	95.4%		決算額(千円)	215,860	230,032	209,830	206,199	

研修受講者が事前に設定した自己目標の研修修了直後における実現状況	80%以上	—	91%	90.5%	91.2%	91.6%		経常費用 (千円)	217,428	231,685	220,018	213,148	
講義配信の自治体の団体受講登録割合	中期目標期間終了までに、80%以上	—	44.7%	53.2%	72.3%	89.4%		経常利益 (千円)	△1,121	2,584	△2,153	0	
講義配信の受講登録数	中期目標期間終了までに、8,000人以上	7,174人	11,012人	13,476人	18,239人	21,765人		行政サービス実施コスト (千円)	—	—	—	—	
免許法認定通信教育及び免許法認定講習による単位取得者数	中期目標期間終了までに、4,000人以上	1,321人	1,336人	3,107人	5,414人	7,400人		行政コスト (千円)	217,812	231,685	220,018	213,148	
								従事人員数	15	16	15	15	

3. 中期目標期間の業務に係る目標、計画、業務実績、中期目標期間評価に係る自己評価及び主務大臣による評価

中期目標、中期計画				
主な評価指標等	法人の業務実績・自己評価		主務大臣による評価	
	業務実績	自己評価	(見込評価)	
(1)国の政策課題や教育現場のニーズ等に対応できる指導者の専門性の向上 <主な定量的指標> ・受講者定員に対する実際の受講者の参加率が、80%以上	<主要な業務実績> 【受講者参加率<定量的指標>】 受講者定員に対する受講者の参加率は下記表の通り、各年度において目標値を達成している。 ○研修事業全体の状況【募集人員 420 名(令和5年度以降 430 名) 参加率目標 80%以上】	<自己評価> A 主な定量的指標、その他の指標において、いずれも所期の目標を上回る成果が得られたものと考え、A評価とした。所期の目標・指標を十分に達成している具体的な根拠は以下のとおりである。 <根拠> 深刻な教員不足などを背景に、教育現場等を一定期間離れて研修に参加することが難しい状況が生じている。特に、専門研修のように長期間(9週間)にわたるものや、職場を離れて宿泊を伴う研修への派遣については消極的になる派遣元も少なくない。 このような現状に加え、コロナ禍を経て急速に進んだ ICT 活用による環境の変化を踏まえ、 <u>受講者・派遣元の負担への配慮と研修内容の一層の充実の両面から、研修の内容及び実施方法について柔軟な見直しを継続的に行った。</u> 具体的には、	評価	A
			<評定に至った理由> 全体として中期目標に定められた以上の業務の進捗が認められるため。 定量的指標を着実に達成し、概ね定量的指標の120%以上を達成しており、各都道府県等における特別支援教育政策や教育実践等の推進に寄与する指導者の養成を実施していると認められる。 他にも、都道府県教育委員会へのニーズ調査、研修受講者が受講前に設定した自己目標の達成状況や受講終了1年後の状況を把握するなど、研修内容の質的向上及び、学校現場等へ波及効果に努めていたこと、「NISE 学びラボ」について、コンテンツの更新に加え、「理解度チェックテスト」を見直し、自動音声を付加し、動画時間を短縮など、教育現場において実践的かつ活用しやすい内容とするなど整備を行ったこと、及び、免許法認定通信教育の実施運営にあたっては、放送大学と連携した受講啓発パンフレットを作成し、全国の小・中・高等学校、特別支援学校、都道府県・市区町村教育委員会に発送し、周知活動の強化を図ったことなどは評価できる。 <指摘事項、業務運営上の課題及び改善方策> ・定量的目標については、第5期中期目標期間中、新型コロナウイルス感染症が拡大していた令和3～4年度を除いては、高い達成率を示している。国が目指す免許保有率100%を達成するためにも「免許法認定通信教育及び免許法認定講習による単位取得者数」	

	研修修了者	参加率	目標達成率
令和3年度	476名	113.3%	141.7%
令和4年度	418名	99.5%	124.4%
令和5年度	431名	100.2%	125.3%
令和6年度	452名	105.1%	131.4%

<p><主な定量的指標></p> <ul style="list-style-type: none"> ・研修受講者の研修終了後における指導的役割の実現状況について80%以上 <p><評価の視点></p> <ul style="list-style-type: none"> ・主務大臣からの指摘事項等への対応を行ったか。 	<p>[内訳]</p> <p>特別支援教育専門研修【募集人員 210名 目標 80%以上】</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>研修修了者</th> <th>参加率</th> <th>目標達成率</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>令和3年度</td> <td>200名</td> <td>95.2%</td> <td>119.0%</td> </tr> <tr> <td>令和4年度</td> <td>189名</td> <td>90.0%</td> <td>112.5%</td> </tr> <tr> <td>令和5年度</td> <td>192名</td> <td>91.4%</td> <td>114.3%</td> </tr> <tr> <td>令和6年度</td> <td>203名</td> <td>96.7%</td> <td>120.9%</td> </tr> </tbody> </table> <p>指導者研究協議会【募集人員 210名(R5以降 220名) 目標 80%以上】</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>研修修了者</th> <th>参加率</th> <th>目標達成率</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>令和3年度</td> <td>276名</td> <td>131.4%</td> <td>164.3%</td> </tr> <tr> <td>令和4年度</td> <td>229名</td> <td>109.0%</td> <td>136.3%</td> </tr> <tr> <td>令和5年度</td> <td>239名</td> <td>108.6%</td> <td>135.8%</td> </tr> <tr> <td>令和6年度</td> <td>249名</td> <td>113.2%</td> <td>141.5%</td> </tr> </tbody> </table> <p>【受講者の指導的役割実現状況<定量的指標, 評価の視点>】</p> <p>ア 教育委員会等や受講者に対するアンケート調査</p> <p>(ア) 特別支援教育専門研修</p> <p>専門研修の研修修了1年後を目的に、研修内容・方法等の改善・充実と研修受講後の受講者の各地域等における指導的役割の実現状況の把握を目的に、アンケート調査を実施している。アンケート結果は、下記表の通りであり、各年度において目標値を達成している。</p>		研修修了者	参加率	目標達成率	令和3年度	200名	95.2%	119.0%	令和4年度	189名	90.0%	112.5%	令和5年度	192名	91.4%	114.3%	令和6年度	203名	96.7%	120.9%		研修修了者	参加率	目標達成率	令和3年度	276名	131.4%	164.3%	令和4年度	229名	109.0%	136.3%	令和5年度	239名	108.6%	135.8%	令和6年度	249名	113.2%	141.5%	<ul style="list-style-type: none"> ・オンラインやオンデマンド配信を取り入れた受講負担の軽減 ・国の政策動向やICT活用の浸透を反映したコンテンツの追加 ・最新の研究成果を反映させたコンテンツの充実 ・参集時の協議・体験の充実などカリキュラムのメリハリ付け <p>といった工夫を行うことで、受講する魅力・意義のある研修とした。</p> <p>また、<u>外部有識者の意見や教育委員会等のニーズも反映した研修の企画立案に努めたことで、結果的に目標値を上回る参加率を達成し、特別支援教育に係る指導者の育成及び専門性の向上に貢献した。</u>指導者研究協議会において、台風の影響で集合・宿泊による開催が困難となった際にも、急遽オンライン開催への切り替えを行い、計画通りのプログラムを滞りなく行うことができたことは、オンライン配信等のノウハウが確実に蓄積された成果であった。</p> <p>さらに、各研修については、<u>主務大臣による指摘事項も踏まえ、その学校現場等への波及効果の把握に努めた。</u>受講前に設定した自己目標の達成状況や受講修了1年後の状</p>	<p>の更なる向上を目指す必要がある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他の研修施設等には無い研修効果が得られるよう、更なる取組の改善が必要である。また、各受講者が専門研修等で身に着けた成果が校内研修の実施等を通じて他の教員にも普及がなされるような取組を期待する。 ・特別支援教育におけるオンライン教育の有効性に関する研究の実施やオンラインを活用した参加型研修の実施に加えて、あらゆる研修事業において、学校現場におけるデジタル学習基盤の活用を前提とした研修を進める必要がある。 ・小・中学校の管理職の多くが特別支援教育の経験がないという状況を踏まえ、次期中期目標期間においては、小・中学校の管理職に対する研修の充実にも取り組むこと。 ・オンラインによる研修を実施することで、対面では実施できない研修事業に取り組むことも可能となることから、これまでの研修事業では対象となっていなかった教員に対する研修事業の実施も検討すること。 ・次期中期目標期間の開始にあたっては、各研修事業の内容についても、学校現場をとりまく喫緊の課題に対応するとともに、次期学習指導要領や教員の採用・養成・研修に関する検討状況など最新の教育動向を踏まえた研修内容になるよう、対面とオンラインのベストミックスを意識しつつ、研修内容をゼロベースで見直し、スクラップ&ビルドを通じた抜本的な見直しを行うこと。 ・中央教育審議会に諮問・検討されている「多様な専門性を有する
	研修修了者	参加率	目標達成率																																								
令和3年度	200名	95.2%	119.0%																																								
令和4年度	189名	90.0%	112.5%																																								
令和5年度	192名	91.4%	114.3%																																								
令和6年度	203名	96.7%	120.9%																																								
	研修修了者	参加率	目標達成率																																								
令和3年度	276名	131.4%	164.3%																																								
令和4年度	229名	109.0%	136.3%																																								
令和5年度	239名	108.6%	135.8%																																								
令和6年度	249名	113.2%	141.5%																																								

○研修修了1年後アンケート

「研修成果を教育実践等に反映できているか」という問いに「とてもそう思う」「そう思う」と回答した割合			
	受講者 (本人)	所属長 (学校長等)	任命権者 (教育委員会)
令和3年度	96.8% 【121%】	97.9% 【122%】	96.1% 【120%】
令和4年度	97.9% 【122%】	100% 【125%】	98.9% 【123%】
令和5年度	99.4% 【124%】	98.9% 【123%】	95.4% 【119%】

※令和6年度（受講者等）は令和8年1月に実施予定

※【】内の％は、数値目標（80%以上）に対する目標達成率

なお、研修修了1年後アンケートについては、主務大臣指摘を踏まえ、令和6年度に、学校現場等に具体的にどのような役立っているかの具体例及び研修成果の波及効果等に関する質問項目を新たに設けるなど改善を図った。

<主務大臣指摘>（令和5年度実績評価時）

研修の参加率など定量的指標の達成状況のみならず、研修が対象者に対して真に必要な内容であったか、学校現場等に具体的にどのように役立っているのかという観点での研修の質的向上をこれまで以上に図る事が必要である。

また、特別支援専門研修では、受講者一人一人に目的意識を持って研修にのぞんでいただけるよう、事前に受講者に「研修の自己目標」の設定を行ってもらい、研修修了直後に自己評価を行うアンケートを実施している。アンケート結果

況を把握したことで、研修の質的向上につながっただけでなく、受講者・派遣元の研修に対する意識をいっそう高める効果もあったと考えられる。アンケートの回答からは、様々な実態の子供たちや保護者に関わるときに研修で学んだ専門的な知識が役立っており、いろいろな角度から子供のことを考えられるようになったなど研修受講による効果を感じる意見があった。また、専門研修の受講生が障害理解に関する校内研修を企画して実施したり、翌年度の教育委員会主催の研修会において講師を務めたりするなど、研修の成果が具体的な対応をもって学校や自治体に還元されていることがうかがえ、研修を通して全国で特別支援教育の推進の中核的役割を担う指導者の育成及び専門性の向上に貢献した。

質の高い教職員集団の形成を加速するための方策について」の議論の内容や答申等を踏まえた対応について、次期中期目標期間中においても研修内容の見直しを行うなど、中教審の議論を踏まえた柔軟な対応を講じること。

・NISE 学びラボについては、特別支援学校の教師のみならず、小・中・高等学校で障害のある子供たちの指導にあたる教師にとっても重要な講義コンテンツであることから、コンテンツの内容について、定期的に最新の理論や知見にアップデートするよう運営の充実を図ること

・次期中期目標期間においては、通常の学級に在籍しながら通級による指導を受ける子供や、特別支援学級に在籍する子供が増加する一方で、障害の多様化や重度・重複化なども進んでいることを踏まえ、特別支援教育の現場において、一人一人の教育的ニーズに的確に応える指導が提供できるよう、多様な課題に柔軟に対応でき、現場に必要とされる研修が機動的に実施できる組織体制を整備すること。

<その他の事項>

【有識者からの意見】

・第5期の研修においては、毎年度高い参加者数であり、また、参加者アンケート（研修の評価）の評価（満足度）も高い。さらにこの評価は研修直後のみならず、1年後に実践に生かされたかどうかの追跡調査としても行っており、多面的・多角的に行っていることは評価できる。集合研修（宿泊型研修含む）だけではなくオンライン・オンデマンド研修も実施し、参加者の多様な参加形態のニーズにこたえている。第6期においても、教員の研修ニーズを的確に把握して、ニーズに即した目的、内容、方法などを検討し、特別支援

は下記表のとおりであり、各年度において目標値を達成している。

○研修終了直後のアンケート（対受講者）

自己目標の実現状況について、「十分に達成できたと思う」「達成できたと思う」と回答した割合	
令和3年度	91.0%【113.8%】
令和4年度	90.5%【113.1%】
令和5年度	91.2%【114.0%】
令和6年度	91.6%【114.5%】

※【】内の％は、数値目標（80%以上）に対する目標達成率

(イ) 指導者研究協議会

各指導者研究協議会においても同様に、研修の効果を把握するための研修終了1年後アンケートを実施している。アンケート結果は下記表のとおりであり、各年度において目標値を達成している。

○研修終了1年後アンケート

「研修成果を教育実践等に反映できているか」という問いに「とてもそう思う」「そう思う」と回答した割合			
	受講者 (本人)	所属長 (学校長等)	任命権者 (教育委員会)
令和3年度	95.2% 【119%】	97.5%【122%】	98.2%【123%】
令和4年度	95.9% 【120%】	98.6%【123%】	96.3%【120%】
令和5年度	96.9% 【121%】	98.7%【123%】	96.4%【121%】

※令和6年度（受講者等）は令和8年1月に実施予定

※【】内の％は、数値目標（80%以上）に対する目標達成率

教育に係る教員の資質向上につながる研修の実行が期待される。

・免許法認定通信教育及び免許法認定講習について、第5期においては、令和5年度以降、通信教育を中心にして飛躍的に多くの単位取得者数となっている。これにより、取得の機会が少ない視覚障害領域、聴覚障害領域に関する単位を認定でき、特別支援学校教諭免許状100%取得を目指す取組に貢献していると思われる。都道府県教育委員会等の開催する認定講習は開設講座数や参加者数に限界があり、研究所の取組は極めて大きな意義があり、高く評価される。第6期においても、放送大学と連携した開講が期待される。その際、小学校等の特別支援学級担任や通級による指導の担当教員の免許状保有率の向上まで視野に入れた実施が求められるだろう。これらの教員では特別支援学校教諭免許状は必須ではないが、より専門性の高い指導を展開するためにも、多くの教員がそれを保有することは意義あることである。特別支援学級や通級による指導の児童生徒が年々増加傾向にある中で、ますます重要な業務になると思われる。

・自閉症児を含めて、障害・特性を持った児童・生徒への教員の理解は確実に高まっていることを実感しており、研究所の優れた研究、また教員向け研修に積極的に取り組まれている成果である。今後とも、さらなる研究、研修及び広報を通じて、多くの教員に理解が広がっていくことを期待する。

・特別支援学校教諭免許状を取得するための現状の科目の中で、自閉症に関する内容が少ないと認識しており、発達障害や自閉症児の増加という現状に鑑み、内容をより充実していただきたい。今後の教員免許状取得に必要な科目の見直しの際などに、研究所の研

<p><その他の指標></p> <p>・国の特別支援教育政策の動向や教育委員会・受講者等の意見を踏まえたカリキュラム等の見直しを行い、外部有識者の意見を取り入れながらPDCAサイクルを十分に機能させる取組を行ったか。</p> <p><評価の視点></p> <p>・主務大臣からの指摘事項等への対応を行ったか。</p>	<p>【国の動向や社会情勢、教育委員会・受講者等の意見を踏まえた研修の実施<その他の指標、評価の視点>】</p> <p>ア 国の動向や社会情勢を踏まえた研修の実施</p> <p>(ア)「研修指針」に基づく研修の実施</p> <p>研修事業の実施にあたっての基本的な方針や概要、実施体制等を明らかにした「研修指針」を策定し、この「研修指針」に基づき、指導者の専門性の向上、教員の資質向上に関わる支援を実施している。</p> <p>実施方法については、新型コロナウイルスの感染拡大及びそれを契機としたICT活用の普及状況を踏まえ、随時柔軟に見直しながら取り組んだ。</p> <p><特別支援教育専門研修></p> <p>実施内容：視覚障害教育、聴覚障害教育、知的障害教育、肢体不自由教育、病弱教育、発達障害・情緒障害教育、言語障害教育の7コース（各年度）</p> <p>実施方法：令和3年度 9週間オンライン 令和4～5年度 3週間参集、6週間オンライン 令和6～7年度 4週間参集、5週間オンライン</p> <p><指導者研究協議会・セミナー></p> <p>実施内容：①ICT活用に関わる指導者研究協議会 ②高校の通級指導に関わる指導者研究協議会 ③交流及び共同学習推進指導者研究協議会 ④発達障害教育実践セミナー ⑤特別支援学校寄宿舎指導実践協議会</p> <p>(いずれも各年度)</p> <p>実施方法：令和3年度 ①～⑤オンライン 令和4年度 ①参集、②～⑤オンライン 令和5年度 ①②参集、③④オンライン、⑤ミック</p>		<p>究や研修の内容・経験を生かし、また大学など諸機関との連携を通じて、さらなる自閉症理解につなげる方向での検討を期待する。</p> <p>・研究所が実施する専門研修には、現場の教員のほか、各教育委員会の指導主事等も参加しており、現場を直接支援、指導する教育委員会が特別支援教育の専門性を向上する意味でとても有意義である。現状では教育委員会にも特別支援教育の専門性に差がみられているため、こうした機会に積極的に教育委員会の特別支援教育担当者が参加することを推進したい。</p> <p>・受講者数が目標値を上回ったことも評価する。このことは、専門研修のように長期間にわたるものや、職場を離れて宿泊を伴う研修への派遣については消極的になる派遣元も少なくない実情や、コロナ禍を経て実績がみられるICT活用を生かして、受講者・派遣元の負担に配慮するとともに、外部有識者の意見や教育委員会等のニーズも反映した研修の企画立案に努めて研修内容の充実を図っていることの成果と考える。</p> <p>・国立青少年教育振興機構、国立女性教育会館、教職員支援機構との連携について実施しているが、この取組は有効であり、継続が期待される。</p> <p>・都道府県等の障害のある児童生徒等の教育に携わる教員の資質向上を図る取組を支援するため、インターネットによる講義配信「NISE 学びラボ」を運用しているが、コンテンツの利用実態把握のため、都道府県教育委員会及び教育センター等の指導主事等を対象にアンケート調査及び情報交換会を実施している点を評価する。その際に収集した実践例を基に、オンデマンド型研修等を含めたハイブリッド型研修の効果的な企画・立案など、「NISE 学びラボ」</p>
--	--	--	--

	<p>ス</p> <p>令和6年度 ①参集, ②～④オンライン, ⑤ミックス</p> <p>ス</p> <p>※②は台風のため急遽オンラインに切替。</p> <p>令和7年度 ①②参集, ③④オンライン, ⑤ミックス</p> <p>ス</p> <p>(イ) 国の政策動向等を踏まえた対応</p> <p>主務大臣の指摘も踏まえ、研修等の企画立案にあたっては、文部科学省特別支援教育課及び広島大学教員（外部有識者）の協力を得て、研修企画検討会議を組織し、PDCA サイクルを回しながらカリキュラムの改善・充実を図ってきた。</p> <p>〔 <主務大臣指摘>（令和3年度実績評価時） 今後も、教育現場のニーズを把握し、ニーズに応じた研修企画を実施するとともに、外部有識者の意見を取り入れながら、PDCA サイクルを機能させること。〕</p> <p>国の政策動向を踏まえた対応として、全ての研修、協議会において「新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議報告」や「令和の日本型学校教育」の構築を目指して（中央教育審議会答申）」等で示された、特別支援教育を担う教師に求められる資質能力を踏まえ、カリキュラムの見直しを行った。このほか、最新の研究成果を講義内容に反映させたり、GIGA スクール構想や ICT 活用の普及状況等を踏まえて講義を追加したりするなど、随時更新を行った。</p> <p><特別支援教育専門研修において新たに設けた共通講義></p> <p>国の喫緊の課題に対応：</p> <p>「学習指導要領を踏まえた特別支援教育の充実」令和3年度</p> <p>「外国人児童生徒等への教育の動向」令和3年度</p>	<p>を活用した自治体の実情に応じた研修の在り方を探求することで、登録数も拡充している点を評価する。</p> <p>・特別支援教育における課題の一つである「免許状取得率の向上」については、免許法認定通信教育を実施していることは有意義である。また、特別支援教育専門研修の受講者を対象として免許法認定講習を実施している。免許法認定通信教育については、限られた人員で教材や試験問題の作成、受験者に対する配慮事項の検討や会場設置に係る調整などを毎年度計画どおりに確実に遂行し、令和6年度末までに目標（4,000人以上）の2倍近い約7,000人の単位取得者を出す結果につながっている。今後も、国が目指す免許状保有率100%の達成に向けて継続してほしい。</p> <p>・特別な支援が必要な児童生徒の数は、ここ数年大きく増加しているにもかかわらず、深刻な教員不足の状況もあり、学校現場においては、すべての学級において必ずしも専門性のある教員が指導にあたれていないのが現状である。中学校区等の小さな地域ごとでの専門性の高い核となる教員の育成は急務であり、専門研修等はそうした現状に大きな力となるものである。ただ、教員不足の中、研修派遣を考えたくても学校現場に教員がいなくなることによる子供たちへの影響を考えると二の足を踏んでしまうのも現実としてはある。今後もオンデマンド・オンライン研修を充実させ、いつでもどこでも教員にニーズに対応できる体制を整えるよう期待する。</p>
--	--	---

	<p>近隣の久里浜医療センターとの連携： 「ゲーム・ネット依存の実態と支援」令和3年度 ICT活用の普及状況を踏まえた対応： 「効果的なオンライン研修の実際」令和3年度 研究データの活用に対応： 「特別支援教育研究におけるデータの活用」令和4年度</p> <p>イ 教育委員会・受講者等の意見を踏まえた対応 国の政策動向だけでなく、教育実践の喫緊の課題に対応する観点からも、参加者アンケートや都道府県教育委員会等に対するニーズ調査を行い、それらを参考に内容の改善を図った。 例えば、専門研修では研修終了直後アンケートで意見のあった講義について、内容や資料を見直すなど必要な改善を常に図っている。また、指導者研究協議会では、ニーズ調査の結果を基に一部の開催回数を増やして受入人数の拡充を図った。</p> <p>ウ 集合とオンラインのベストミックスの検討 先述のとおり、当研究所では、コロナ禍を経て研修等の実施方法について、随時見直しを行ってきた。併せて、主務大臣による指摘事項に対応して、実施形態及びコンテンツの提供方法の選択肢が増えた現状を踏まえた、より効果的な研修の在り方についても検討・見直しを行ってきた。</p> <p style="text-align: center;">〔 <主務大臣指摘>（令和3～5年度実績評価時） 集合研修とオンライン研修とのベストミックス 〕</p> <p>具体的には、オンライン形式を取り入れた参加しやすさへの配慮、事前事後のオンデマンド配信を取り入れた情報提供の充実に加えて、集合・宿泊研修時の内容の充実も図ることで、カリキュラムにメリハリをつけ、より有意義な研修となるように</p>		
--	--	--	--

<p><評価の視点></p> <p>・主務大臣からの指摘事項等への対応を行ったか。</p>	<p>工夫した。</p> <p>特に集合・宿泊研修においては、ICT 活用実践演習室（あしたの教室）など、当研究所内の機器や設備を活用した実習等を交えた専門講義や研究協議のほか、久里浜特別支援学校をはじめとした近隣の関係機関等と連携した実地研修なども行う「ラボ型研修」と位置付け、来所による効果が高まるように内容の充実を図った。</p> <p>【他法人との連携による研修の実施<評価の視点>】</p> <p>○国立青少年教育振興機構、国立女性教育会館、教職員支援機構との連携について</p> <p>有識者からの意見を踏まえ、令和4年度に初めて教職員支援機構との共催の形で「共生社会を実現する教育研究セミナー」を実施した。また、令和5年度においては、国立女性教育会館も次年度計画検討会に加わった。</p> <p>本セミナーは、「令和の日本型学校教育の構築」を目指して、今後の特別支援教育の在り方を確認するとともに、全ての教師に求められる障害の特性等に関する理解と指導方法を工夫できる力を伸ばすことや、通常の学級における特別支援教育に関する基礎的な知識、合理的配慮に関する理解等を学ぶことで指導力の向上を図ることを目的とし、講義・演習・協議等を実施するものであり、令和7年度も実施予定である。</p> <p>また、「独立行政法人改革等に関する基本的な方針」（平成25年12月24日閣議決定）を踏まえ、当研究所、国立青少年教育振興機構、国立女性教育会館、教職員支援機構の4法人による間接業務等の共同実施に関する協議会において、研修事業における連携方策について検討を行っている。</p>		
---	---	--	--

	<p><有識者意見> (令和3年度実績評価時)</p> <p>国立青少年教育振興機構、国立女性教育会館、教職員支援機構との実効性のある連携。</p>		
<p>(2)各都道府県等が実施する教員の資質向上に関わる支援</p> <p><主な定量的指標></p> <ul style="list-style-type: none"> ・講義配信の自治体の団体受講登録について、中期目標期間終了までに都道府県の80%以上 ・講義配信の受講登録数中期目標期間終了までに8,000人以上 <p><その他の指標></p> <ul style="list-style-type: none"> ・講義コンテンツについての計画的な整備を図り、インターネットにより学校教育関係者等へ配信を行ったか。また、利用者のアンケート調査等を基に内容及び運用の改善を図ったか。 <p><評価の視点></p> <ul style="list-style-type: none"> ・主務大臣からの指摘事項等への対応を行ったか。 	<p>【講義配信の受講登録状況<定量的指標、その他の指標>】</p> <p>都道府県等の障害のある児童生徒等の教育に携わる教員の資質向上を図る取組を支援するため、インターネットによる講義配信「NISE 学びラボ」を運用している。</p> <p>現在、174 コンテンツを視聴可能とし、令和6年度までに、うち97コンテンツに対して内容の更新・理解度チェックテストの追加を随時行ってきている。</p> <p><カテゴリごとのコンテンツ数></p> <ul style="list-style-type: none"> ・特別支援教育全般：52 コンテンツ ・障害種別の専門性：94 コンテンツ ・通常の学級における各教科等の学びの困難さに応じた指導：28 コンテンツ <p>計174コンテンツ</p> <p>これらのコンテンツについては、上記のチェックリストの追加に加え、例えば「特別支援教育全般」のコンテンツについて「インクルーシブ教育システム関連」、「各学びの場における教育」、「役割と連携」等に細分類して示したり、受講者のニーズに合わせて活用いただけるよう、複数の講義コンテンツを職業や校種別等に応じてパッケージ化した研修プログラムとして提案したりするなど、利便性向上のために随時改善を図っている。</p> <p>また、コンテンツの利用実態把握のため、都道府県教育委員</p>	<p><根拠></p> <p>深刻な教員不足が続く一方で、特別支援教育の対象となる児童生徒数は伸び続け、通常の学級を含む全ての学びの場において特別支援教育に係る知識や対応が求められている。このような状況下では、学校現場におけるOJTは難しく、また、日々業務に追われる教師にとって研修の受講や自主的な勉強に割ける時間は限られている。さらに、これまでの各自の経験や専門に応じてそれぞれのニーズにもばらつきが生じている。</p> <p>こうした現状にあって、<u>自分の好きな時間に、自分の視聴したい講義を選んで学習することができるオンライン学習コンテンツ(NISE 学びラボ)の提供は、教師一人一人の学びを支える重要なツールとなっている。</u>加えて、教育委員会や学校の研修にも活用いただけることで、<u>研</u></p>	

会及び教育センター等の指導主事等を対象にアンケート調査及び情報交換会を実施し、収集した実践例を基に、オンデマンド型研修等を含めたハイブリッド型研修の効果的な企画・立案など、NISE 学びラボを活用した自治体の実情に応じた研修の在り方について広く共有を図ることで、登録数の拡充につなげた。

こうした取組の結果、機関登録及び個人登録いずれも、下記の通り目標値を達成している。

	機関登録	個人登録
令和3年度	44.7% 【55.9%】	11,012人【137.7%】
令和4年度	53.2% 【66.5%】	13,476人【168.5%】
令和5年度	72.3% 【90.4%】	18,239人【228.0%】
令和6年度	89.4% 【111.8%】	21,765人【272.1%】

※【】内の％は、数値目標（80％以上、8,000人以上）に対する目標達成率

さらに、コンテンツの質の向上及び作成・更新の負担軽減を図るため、現在、講義音声の自動音声化に着手したところである。

【教員育成指標と NISE 学びのアシスト＜評価の視点＞】

主務大臣の指摘を踏まえ、当研究所では、①教員育成指標に応じた学習コンテンツの整理及び充実、②各段階に求められる資質能力の自己評価ツールの開発、③活用事例を含めた「研修の手引き」の作成などを、総合的、有機的に行い、教師の学び

修の企画・立案の支援及び全国的な質の担保にもつながっている。

特に今期は、学習指導要領や国の有識者会議の報告の内容など、国の動向を踏まえた対応に加え、主務大臣の指摘や教育委員会等の利用者の声も踏まえ、動画時間の短縮化や理解度チェックリストの付加を進めたり、教員育成指標と関連付けたコンテンツの整理やパッケージ化した研修プログラムの提案を行うなど、改善・工夫を図ったことで、登録数において目標値を上回り、多くの自治体・個人に活用いただけることとなった。登録者（機関）数の増加に伴い、コンテンツの視聴回数も令和3年度から6年度の4年間で倍近くに伸びている状況にある。さらに、一部のコンテンツについて教職員支援機構の「教員研修プラットフォーム」への掲載が実現したことで、今後より多くの教師に当研究所のコンテンツを活用いただけるものと考えている。

以上のように、配信コンテンツについて、内容の改善・充実、提供方法の工夫、情報発信の強化と、様々な面から取組を進めたことにより、教育委員会等における研修等の教

<p><主な定量的指標></p> <p>・免許法認定通信教育及び免許法認定講習による単位取得者数中期目標期間終了までに4,000人以上</p>	<p>を支援する「NISE 学びのアシスト」の取組を進めている。</p> <p>〔主務大臣指摘〕（令和3年度実績評価時）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教員育成指標の内容等と研究所が開発している学習コンテンツの関連付けを整理し、それに沿って質の高い学習コンテンツを継続的・計画的に作成・提供すること。また、教師が自己の専門性の状況を確認できるツールの開発について検討を進めること ・活用事例を含めた研修の手引きを作成すること <p>また、更に教職員支援機構が運営する「教員研修プラットフォーム」での「NISE 学びラボ」の活用を図るため、文部科学省の教員講習開設事業費等補助金に申請し交付決定をいただいた。これにより「教員研修プラットフォーム」に3つの研修プログラム（計18コンテンツ）を掲載し、受講募集を行っている。</p> <p>【単位取得者数<定量的指標>】</p> <p>○免許法認定通信教育及び免許法認定講習</p> <p>特別支援学校の教師の免許保有率100%を目指す国の方針に基づき、本研究所において、特に、保有率の低い視覚障害者教育領域、聴覚障害者教育領域の免許を取得するための免許法認定通信教育を実施している。</p> <p>科目は「視覚障害児における教育課程及び指導法」、「聴覚障害児における教育課程及び指導法」、「視覚障害児における心理、生理及び病理」、「聴覚障害者における心理、生理及び病理」の計4科目である。単位認定試験は対面での試験を実施するが、受験者の利便性を向上するため、受験者がいる全ての都道府県に試験会場を設けて開催している。また、障害のある受験者に対しては以下のような配慮を行い、試験を実施している。</p>	<p>師の資質向上に関する取組や、教師一人一人の学びの支援に貢献した。</p> <p>特別支援教育における長年の課題の一つとなっている免許保有率の向上については、<u>大学や教育委員会の実施のみに任せては補えない視覚障害者領域、聴覚障害者領域について、免許法認定通信教育を実施したほか、特別支援教育専門研修の受講者を対象として免許法認定講習を実施した。</u>特に免許法認定講習については、限られた人員で教材や試験問題の作成、受験者に対する配慮事項の検討や会場設置に係る調整などを毎年度計画通り</p>	
---	--	---	--

	<p><視覚障害のある者への配慮の例></p> <ul style="list-style-type: none"> ・問題用紙へのチェックによる解答 ・ルーベの持参及び使用 ・試験時間の延長（1.3倍（弱視）1.5倍（盲）） ・テキスト形式の試験問題をUSBメモリに入れて出題 ・パソコン上で解答し、USBメモリに入れて提出 <p><聴覚障害のある者への配慮の例></p> <ul style="list-style-type: none"> ・試験室内の前列、通路側に座席を設ける ・注意事項等の説明をメモにより伝達する ・試験開始と試験終了の合図を、近くで手で指し示して行う <p>また、特別支援教育専門研修において免許法認定講習も実施している。両者を合わせた令和3年度から令和6年度（免許法認定通信教育は後期まで含む）の単位取得者数は以下のとおりであり、目標値を大きく上回って達成している。特に免許法認定通信教育については、放送大学と協力し、双方で開講している科目を周知する共通のチラシを作成して、受講者増につながるよう連携して広報に努めた。</p>	<p>に確実に遂行し、令和6年度末までに目標（4,000人以上）の2倍近い約7,000強の単位取得者を出す結果につながった。このことは、<u>特別支援教育に関するナショナルセンターとして、国が目指す免許保有率100%の達成に寄与するものである。</u></p> <p><課題と対応></p> <p>NISE 学びラボのコンテンツや免許法認定通信教育の教材について、学習指導要領改訂への対応など、遅滞なく最新の内容に更新を行っていく。</p>	
--	---	--	--

	単位取得者数		累計	達成率
	認定通信教育	認定講習		
令和3年度	1,271人	65人	1,336人	33.4%
令和4年度	1,700人	71人	3,107人	77.7%
令和5年度	2,257人	50人	5,414人	135.4%
令和6年度	1,935人	51人	7,400人	185.0%

4. その他参考情報

令和3年度：予算額と決算額の差が10%以上であるが、令和3年度の専門研修等が新型コロナウイルス感染症感染拡大防止の観点からオンライン実施としたことによる支出減及び免許法認定通信教育実施に係る費用が抑えられたことが要因である。

令和6年度：予算額と決算額の差が10%以上であるが、研修事業に従事する人員数の減少があったことが大きな要因である。

1-2-4-1 中期目標管理法 中期目標期間評価(見込評価) 項目別評定調書(国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する事項)

1. 当事務及び事業に関する基本情報			
I-3	総合的な情報収集・発信や広報の充実及び関係機関等との連携強化を通じた特別支援教育に関する幅広い関係者の理解の促進		
関連する政策・施策	施策目標2 確かな学力の向上、豊かな心と健やかな体の育成と信頼される学校づくり 政策目標2-8 一人一人のニーズに応じた特別支援教育の推進	当該事業実施に係る根拠(個別法条文など)	独立行政法人国立特別支援教育総合研究所法第12条第1項第1号
当該項目の重要度、困難度	【重要度：高】 特別支援教育に係る有用な情報等を、教育関係者はもとより、民間企業や各種団体等に対しても広く提供し普及を図ることは、国の特別支援教育政策を進めていく上で重要である。また、インクルーシブ教育システムの構築は、権利条約の理念が目指す共生社会の形成に向けて不可欠であり、特別支援教育推進のための基盤となることから、各地域におけるインクルーシブ教育システムの構築へ向けた取組を強力に推進する必要があることから、重要度は高い。	関連する政策評価・行政事業レビュー	令和7年度行政事業レビュー番号 予算事業ID 001546、001547

2. 主要な経年データ													
③ 主要なアウトプット(アウトカム)情報								④ 主要なインプット情報(財務情報及び人員に関する情報)					
指標等	達成目標	基準値 (前中期目標期間最終年度値等)	令和3年度	令和4年度	令和5年度	令和6年度	令和7年度		令和3年度	令和4年度	令和5年度	令和6年度	令和7年度
当研究所のホームページ訪問者数	年間75万以上	—	860,363	927,887	902,780	1,078,520		予算額(千円)	296,384	243,938	238,016	247,742	
発達障害推進センターWebサイト訪問者数	年間10万件以上	—	215,700件	323,595件	316,530件	400,656件		決算額(千円)	265,737	262,280	256,022	284,217	

動向把握、 情報発信し た国数	7か国以上	—	7か国	8か国	8か国	8か国		経常費用（千円）	267,909	263,738	264,838	294,499	
地域の課題 解決に向けた 取組の実施 件数	中期目標期 間中に30件 以上	—	13件	26件	42件	57件		経常利益（千円）	454	△349	2,792	0	
都道府県・ 市町村から の相談支援 についての 有意義度	80%以上	80%	100%	100%	100%	100%		行政サービス実施 コスト（千円）	—	—	—	—	
インクルー シブ教育シ ステム構築 支援データ ベース事例 のダウンロ ード件数	毎年2万5 千件	毎年2万5 千件	22,459件	25,102件	80,335件	118,917件		行政コスト（千円）	267,877	263,738	264,838	294,499	
日本人学校 への情報提 供回数	年15回程度	—	年15回	年15回	年17回	年17回		従事人員数	17	16	17	20	

3. 中期目標期間の業務に係る目標、計画、業務実績、中期目標期間評価に係る自己評価及び主務大臣による評価

中期目標、中期計画																		
主な評価指標等	法人の業務実績・自己評価		主務大臣による評価															
	業務実績	自己評価	(見込評価)															
<p>(1) 特別支援教育に関する情報発信</p> <p><主な定量的指標></p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究所のホームページの訪問者件数、毎年度、年間 75 万件以上 ・発達障害教育推進センターの Web サイトの訪問者数、年間 10 万件以上 	<p><主要な業務実績></p> <p>【各種ホームページの訪問者数<主な定量的指標>】</p> <p>研究所及び発達障害教育推進センター（以下、発達センター）のホームページの訪問者数は以下の通り。</p> <p>○研究所ホームページ訪問者件数【目標：年間 75 万件以上】</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>訪問者件数</th> <th>目標達成率</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>令和 3 年度</td> <td>860,363 件</td> <td>114.7%</td> </tr> <tr> <td>令和 4 年度</td> <td>927,887 件</td> <td>123.7%</td> </tr> <tr> <td>令和 5 年度</td> <td>902,780 件</td> <td>120.4%</td> </tr> <tr> <td>令和 6 年度</td> <td>1,078,520 件</td> <td>143.8%</td> </tr> </tbody> </table>		訪問者件数	目標達成率	令和 3 年度	860,363 件	114.7%	令和 4 年度	927,887 件	123.7%	令和 5 年度	902,780 件	120.4%	令和 6 年度	1,078,520 件	143.8%	<p><自己評価> A</p> <p>主な定量的指標、その他の指標において、いずれも所期の目標を上回る成果が得られたものと考え、A 評定とした。所期の目標・指標を十分に達成している具体的な根拠は以下のとおりである。</p> <p><根拠></p> <p>コロナ禍を経て、社会における ICT 環境の整備が加速的に進む中で、ユーザー目線の有用性の確保やアクセシビリティの向上がこれまで以上に求められる状況にある。また、通常の学級も含む全ての学びの場が特別支援教育の対象となる中、これまで特別支援教育にあまり関わってこられなかった教員にいかにも必要・有益な情報を届けるか、という点も研究所の重要なミッションの一つとなっている。この点、研究所としては、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ SNS を併用した最新の情報発信 ・活用したくなる魅力ある成果物や 	<p>評定</p> <p>A</p> <p><評定に至った理由></p> <p>全体として中期目標に定められた以上の業務の進捗が認められるため。</p> <p>定量的指標を着実に達成し、概ね定量的指標の 120% 以上を達成しており、特別支援教育に関する情報発信・普及に寄与した点は評価できる。</p> <p>他にも、研究所を知らない教員に対しても周知を図るため、NISE 学びラボ等の各種コンテンツについて、日本教育大学協会 学長・学部長等連絡協議会での事業説明・情報提供を行うとともに、日本私立大学連盟への情報提供を行い、連盟のメールマガジン、ホームページへの掲載など、広く周知を行ったこと、文部科学省及び公益財団法人海外子女教育振興財団、海外子女教育振専門相談員連絡協議会と連携し、日本人学校関係者（日本人学校校長及び特別支援教育コーディネーター等）に対して、現場で役立つ特別支援教育に関する情報発信や指導助言を行い、アンケートを実施し、現場のニーズを把握したこと、及び、受講者を限定しない形で「発達障害教育基礎セミナー」を実施したことなどは評価できる。</p>
	訪問者件数	目標達成率																
令和 3 年度	860,363 件	114.7%																
令和 4 年度	927,887 件	123.7%																
令和 5 年度	902,780 件	120.4%																
令和 6 年度	1,078,520 件	143.8%																

○発達センターWeb サイト訪問者数【目標：年間 10 万件以上】

	訪問者件数	目標達成率
令和 3 年度	215,700 件	215.7%
令和 4 年度	323,595 件	323.6%
令和 5 年度	316,530 件	316.5%
令和 6 年度	400,656 件	400.7%

研究所では、各ホームページや研究所が発信しているコンテンツを広く周知・普及するために、具体的に以下のような取組を行っており、その結果として、令和 6 年度まで全ての年度において目標値を達成することができた。特に、発達障害教育推進センターのホームページについては、令和 6 年度には 40 万件を超え、大幅に目標値を上回る実績となった。

ア ホームページの整備・充実

ホームページに関わる Web サイト運営要項を改訂し、所内の情報発信戦略会議（月 1 回）やホームページ確認作業（週 1 回）等で検討を重ねながら、情報コンテンツを計画的・体系的に整備した。また、令和 4 年度には、有識者を対象にホームページの有用度調査を対面並びにオンラインで実施し、そこで収集した意見も踏まえ、様々な利用者にとって有用でわかりやすいものとなるようにアクセシビリティやユニバーサルデザインへの配慮に留意したホームページに改善した。

改善内容の一つとして、分析の結果特に検索件数が多かったページ（「ここから始めよう、特別支援教育」「発達障害のある子供の指導・支援のヒント」「研究者情報」「特別支援教育専門研修」「サイトマップ」）について、トップページからワンクリックで飛べるタブを作成した。このことにより、閲覧数を安定的に伸ばすことができた。

コンテンツの作成・発信

- ・研究所主催事業や講師派遣の機会を活用した研究所の広報
- ・ホームページの有用度調査や幅広いステークホルダーを含む検討会議の場を通じた意見収集
- ・校長会等関係団体や研究協力校などとの日頃のやりとりを通じた意見収集

等、様々な取組を通じて情報収集・発信に努めており、結果として目標値を大きく上回る、研究所創設以来最高の訪問者数の獲得に至ったと考える。

特に、発達障害教育推進センターの Web サイトに関しては、文部科学省の調査結果（通常の学級で学習面又は行動面で著しい困難を示すとされた児童生徒数の割合が小・中学校で 8.8%）や主務大臣の指摘等を踏まえ、特に通常の学級に在籍する発達障害のある児童生徒の指導・支援を担当する教師に焦点を当て、内容の充実を図るとともに、検討会議を通じて、教育関係者、福祉関係者、保護者など幅広いステークホルダーから意見を収集し、ページ改善案の整理を進めた。

今後、研究所ホームページ及び発

<指摘事項、業務運営上の課題及び改善方策>

・定量的目標については、第 5 期中期目標期間中、全ての項目において目標を達成できており、評価できるが、特別支援教育に係る有益な情報や学びのコンテンツをあらゆる層の教員に活用してもらうためには、引き続き SNS を有効活用するなど様々な手段により、受講者を限定しない形での研修会の実施や教育団体への周知を行い、関係者及びそれ以外の人々に対する効果的な情報発信・理解啓発の在り方の工夫をする必要がある。

・次期中期目標期間においては、情報発信の強化を図る観点からも、戦略的な広報に取り組むこと。特に、プレス対応については文部科学省とも事前の情報共有を図りつつ、特別支援教育についての教員や保護者の理解促進が図られるような広報戦略を検討し、実施すること。特別支援教育の高い専門性を有する教員等に対する情報発信と、特別支援教育の知識や経験が十分に有していない教員等に対する情報発信や広報について、それぞれ、更なる強化を期待するとともに、高等学校の教員向けの情報発信についても、更なる強化を期待したい。

・引き続き、外部機関や民間企業との連携をさらに強化した上で、相互の強みを生かしたエビデンスベースの研究を進め、国の政策立案に寄与することはもとより、学校、民間企業、各種団体等、多方面からの理解・支援を得ることができるよう努めること。

・「インクル DB」については、改正障害者差別解消法が令和 6 年 4 月に施行され、私立学校も含めた全ての学校において合理的配慮の提供が義務化されたことを踏まえ、次期中期目標期間においては、合理的配慮の提供に関する学校現場の様々な事例を

<p><評価の視点></p> <p>・主務大臣からの指摘事項等への対応を行ったか。</p>	<p>さらに、令和6年度には、所内にホームページ改善ワーキンググループを立ち上げ、ホームページのリニューアルに向けて検討を重ねた。また、有識者に対するホームページの有用度調査を対面で実施し、収集した意見を仕様書等に反映させるなど準備を進めており、令和8年3月に、一層利便性の高い、国民に対してよりわかりやすいホームページにリニューアルする予定である。</p> <p>イ 発達障害教育に関する理解啓発活動</p> <p>発達センターのWebサイトについては、主務大臣指摘や有識者からの指摘等を踏まえ、特別支援教育の経験が十分ではない教員にも理解しやすいように特別支援教育の基礎基本に係る内容を追加したり、発達センター展示室において通常の学級の教室をイメージした展示を新設し、その様子をWebサイトを通じて発信したりするなど、可能なところから順次内容の充実を図った。また、令和6年度も前年度に続き外部有識者による「発達障害等の情報提供にかかる検討会議」を設け年5回開催し、通常の学級に在籍する発達障害の児童生徒を指導・支援する教職員はどのような情報を必要としているのかを明らかにするため、多様な立場からWebサイトの改善に係る意見を頂戴した。この検討会議は、令和4年度から3年間、教育関係者に留まらず、福祉や保護者の代表も委員に加えて検討を重ねており、その成果として、発達センターWebサイトについて、トップページに「通常の学級の指導・支援」を設定し、「個に応じた指導・支援」、「校内支援体制の整備」、「切れ目ない指導・支援」の三本柱で情報提供していくという具体案がまとまった。この検討に基づき、令和7年度にWebサイトをリニューアルする予定である。</p> <p>〔 <主務大臣指摘>（令和3年度実績評価時） 特別支援学校や特別支援学級に在籍する児童生徒のみならず、通常学級に在籍する児童生徒に対する教育や支援に関する情報発信を充実させること。〕</p>	<p>発達センターWebサイトについて、令和7年度にこれまでの検討を踏まえたリニューアルを予定しており、その周知と合わせて更なる訪問者の増につながると考える。</p> <p><課題と対応></p> <p>ホームページについては、アクセシビリティ及びユーザービリティの観点から不断の見直しを進めるとともに、生成AIの活用など、技術の進展に伴い変化するユーザーニーズに応えられるものとなるよう適宜見直しを行っていく。</p>	<p>収集し、学校現場が現に直面している困り感に応えることができる最新のコンテンツを提供できるよう、不断に更新が可能な体制を構築することが必要である。</p> <p>・日本人学校への相談支援については、各学校のニーズや活用状況を把握した上で、引き続き、日本人学校が直面する課題の解決に資する情報提供を行う体制を構築することが必要である。</p> <p><その他の事項></p> <p>【有識者からの意見】</p> <p>・ホームページ等への訪問者数について、第5期においては、とりわけ、発達障害教育推進センターのWebサイトの訪問者数の増加率が顕著であり、小学校等の通常学級の発達障害児支援に係るニーズが多いことが推測される。また、「インクルDB」の事例ダウンロード数においても、令和5年度以降、顕著に増加しており、高く評価される。第6期においては、小学校等の教員のニーズを把握して必要な情報を適切に発信する機会を増加させるとともに、とりわけ高等学校における通級による指導の充実や校内体制の整備に資する情報を提供し、高等学校にその活用を促す取組が求められる。</p> <p>・図書室外部利用について、第5期においては、ILL（文献複写）が年々増加していることは、オープンアクセスのジャーナルが年々増加してきているとはいえ、研究所が学術文献複写の提供という研究推進の重要な役割を担ってきていることは評価できる。第6期においても、引き続き、ILL（文献複写）を中心として、多くの研究者、実践家、大学院生等の研究推進の支援を行う必要がある。</p>
---	--	--	---

<p><その他の指標></p> <ul style="list-style-type: none"> ・関係機関との連携を推進し、研究所における情報収集・発信方策や広報の在り方と取組を強化する等を目的に作成する「広報戦略」を基本としつつ、戦略的・総合的に情報収集及び情報提供を行ったか。 ・当研究所の存在や活動内容等について、学校や、各種団体 	<p><有識者の指摘> (令和5年度実績評価時)</p> <p>これだけ有益な情報や学びのコンテンツを有する特総研について知らない教員が多く、あらゆる層の教員にどのように活用を促進するかは大きな課題である。</p> <p>統計的に見ても高等学校教員による認知度が低い。</p> <p>また、発達センターのWebサイトと相互リンクが貼られている国立障害者リハビリテーションセンター発達障害情報・支援センターと共同で運営している「発達障害ナビポータル」(令和3年開設)について、継続して充実と改善を図った。発信内容としては、文部科学省、厚生労働省、国立障害者リハビリテーションセンター発達情報・支援センター、発達センターの合同で開催している「発達障害支援の地域連携に係る全国合同会議」の収録映像の公開、発達障害のある本人やその家族向けの情報検索ツール「ココみて (KOKOMITE)」における医療機関情報の公開や、「発達障害に関する外国人保護者向けパンフレット」について「やさしい日本語」を含む25の言語による公開など、通常の学級に在籍する発達障害児の指導・支援の情報提供の強化を中心に多様なニーズに対応した内容の充実を図った。</p> <p>【戦略的・総合的な情報収集及び情報提供<その他の指標>】</p> <p>ア 情報の計画的収集</p> <p>研究所内の研究チーム・研究班の研究成果について毎月の班長会議等を通じて日常的に収集した。また、特別支援教育に関連する学術的な研究は、研究チーム・研究班の研究協力者である大学教員等から情報を収集し、さらには日本特殊教育学会や日本LD学会等より最新の情報を得た。教育実践に関わる内容は、毎年度当初、校長会・関係機関・関係団体事務局等に訪問並びに総会、研究協議会等に参加し、幅広い情報を計画的に収集した。</p> <p>関係団体等から収集した情報は、所内で共有するほか、各団体が主</p>	<p>研究所では、研究所の認知度向上及び、成果物やコンテンツの周知・活用の促進を図るため、あらゆる機会を捉えて積極的な広報に努めてきた。具体的には、以下のとおり。</p> <p>研究所の最新の研究成果や進捗状況について担当部署(情報・支援部)において把握・集約しておき、<u>校長会や関係機関・関係団体のニーズに合わせ、いつでも的確な情報発</u></p>	<p>・国際動向の把握・情報発信について、第5期においては、韓国やフランス等の諸外国と連携して研究交流を進めてきている。また、文部科学省の依頼により適宜各国の基本情報を提供しており、評価される。第6期においても、障害者権利条約に関連づけた諸外国の教育制度や施策の動向、インクルーシブ教育システムとの関係性などについて、系統的な研究が求められる。</p> <p>・発達障害のある本人やその家族向けの情報検索ツール「ココみて (KOKOMITE)」は、当事者および家族にとって有益な情報やリンクがあり、とても有益だと思う。なお、「特別支援教育リーフ Vol. 5 このように考えよう、合理的配慮 基礎編」や、NISEリーフレット「自閉症のある子どもの自立活動の指導について考えよう!」などは、障害児の家族など当事者が読んでもとても有益だと思う(具体的には、これら資料をみて、学校の先生に子供への対応について相談できる)。「ココみて (KOKOMITE)」HPでは、例えば「発達障害の子どもたちへの教育上の配慮」などとして、文部科学省及び研究所が推奨する配慮内容、教員向けの資料のリンクを作ることも良いと思う。</p> <p>・研究所の研究成果は、学校関係者以外にも、例えば、放課後等デイサービスの関係者などにも読んでいただきたい内容である。</p> <p>・研究所の認知度はこの数年上がってきている。それは、現場における特別支援教育を必要とする児童生徒の増加に伴い、各学校でその支援に苦慮しているという背景があると考えられる。特に、研究所のHPから入手することができるリーフレットは、要点が分かりやすくまとめられているため、校内研修の資料としている。</p>
---	--	--	---

<p>等、多方面に周知し、それら各方面からの理解・支援を得ることができるよう取り組んだか。</p> <p>・研究成果の普及やインターネットをはじめ広報効果の高い ICT ツールを活用した情報提供の量的充実を図るとともに、国と連携しながら、ガイドブック、リーフレット等わかりやすい形で情報提供を行い現場での活用を促進したか。</p> <p><評価の視点></p> <p>・主務大臣からの指摘事項等への対応を行ったか。</p>	<p>催する研究会や学校訪問等の際に、適宜情報提供を行い活用されるよう発信した。また、専門研修においてそれらの最新の情報を踏まえた講義を行うことにより、喫緊の課題に対応する方法を検討することができている。</p> <p>イ SNS 等を活用した研究成果等の情報提供・現場での活用促進</p> <p>研究所の研究成果をはじめ、特別支援教育に関連する学術的な内容から教育実践に関わる内容まで、校長会・関係機関・関係団体事務局等を通して発信し、幅広い情報提供を行った。また、各都道府県市町村の教職員等の研修にも出向き、研究所の説明時間を頂戴して情報発信活動を実施してきた。特に、令和6～7年度は関東圏にフォーカスを当て、教育センター等が主催する研修会に可能な限り出向き、研究所の研究成果や特別支援教育に関わる情報を積極的に発信したほか、各自治体の小・中・高等学校で特別支援教育に関わる研修会にて広報活動を実施した。そのほか、学会等における自主シンポジウムやポスター発表の際には、テーマに即したリーフ等研究所の成果物を持参して配布し、参加者に情報提供を行うなど、様々な機会を通じて積極的に情報提供を行うことにより、研究所のプレゼンスを向上させた。</p> <p>さらに、ホームページやメールマガジン（月1回）、LINE（月3回～4回）、X（月4回～5回）などの手段を通じて研究所の研究成果等の情報の発信・提供を充実し、学校現場等での活用を促進した。令和6年度からは、幼稚園等、小・中学校、高等学校及び特別支援学校の教員や教育委員会、保護者、関係団体等に対して、各団体が発出しているメールマガジンに当研究所の事業の案内等を掲載していただけるよう協力依頼を行っている。</p> <p>なお、Xについては、令和6年9月に開設した。登録者に直接情報を届けることができるメールマガジンやLINEについて、内容に応じた計画的な配信を行うことに加え、Xによる投稿後のホームページの閲覧数やフォロワー数のデータ分析を踏まえて、メールマガジンや</p>	<p><u>信ができるように日頃から準備をしていた。</u></p> <p>同時に、日本特殊教育学会や日本LD学会をはじめとする関連学会の大会参加によって得られる情報や論文発表等の情報をフォローし、研究所で共有したことを関係団体等の会議等を通して必要に応じて発信を行い、各団体等の活動に貢献した。また、自治体が実施する教職員の研修会にも可能な限り出向き、情報発信に努めた（令和6年度：13自治体、令和7年度：10以上の自治体の研修に参加予定）。対面で、直接小・中学校・高等学校・義務教育学校・中等教育学校の教員に研究所コンテンツや成果物を具体的に紹介することにより、活用につながった。</p> <p>このように、<u>様々な機会を捉えて、情報収集だけでなく積極的な情報発信に取り組んだことで、研究所のプレゼンスの向上につながる一定の成果があった</u>と考える。</p> <p>さらに、令和6年9月から開設したXの効果は大きく、Xの投稿後に研究所リーフレット等のダウンロード数について数百単位の飛躍的な増加が見られ、高い効果があることが確認できた。また、投稿後にフ</p>	<p>・全体として目標値を超えていることを評価する。</p> <p>・コロナ禍を経て、GIGA スクール構想の取組が進むとともに、社会全体の ICT 環境の整備が進む中で、情報提供や広報について、利用者視点で整備してきたこと、それによるアクセシビリティの向上の成果がみられる。</p> <p>・通常学級においても特別支援教育の必要性が増す中、多くの教員にとって特別支援教育に関する情報提供ニーズが高まっていることから、幅広い教員に有益な情報を届ける多元的な取組が進捗している点を評価する。</p> <p>・今後のホームページの展開において、生成 AI の活用を含めて更なるユーザービリティの向上を目指す方向性に期待する。</p> <p>・自治体が実施する教職員の研修会に出向き、情報発信に努めるとともに、対面で、直接小・中学校・高等学校・義務教育学校・中等教育学校の教員に研究所コンテンツや成果物を具体的に紹介することにより、活用につながった取組は重要であり、評価する。</p> <p>・この4年間における各行事の延べ参加者数は、研究所公開（オンライン含む）約8,600名、研究所セミナー（オンライン含む）約4,000名、推進セミナー約2,700名、発達障害基礎セミナー（R6から）約3,000名と報告されている。このことは研究所の研究成果の還元とともに、教育関係者を含む幅広い国民への理解につながることを期待する。</p> <p>・情報発信については、高い課題意識をもって取り組んでおり、</p>
---	---	--	---

	<p>LINEでの投稿内容を検討・改善するなど、より効果的な情報発信となるよう取り組んだ。令和6年度末時点のメールマガジンの登録件数は9,900件程度（令和5年度9,800件程度）、LINEのターゲットリーチ件数は5,200件程度（令和5年度4,800件程度）であり、いずれも前年度から増加した。また、Xのフォロワー数はアカウント開設から約7カ月の令和6年度末時点で1,600程度となった。</p> <p>ウ 研究成果の公表・普及</p> <p>研究成果については、毎年6月に研究成果報告書を公表したほか、サマリー集やガイドブック、リーフレット等わかりやすく、手に取っていただきやすい形で情報提供を行った。また、研究所における研究活動等の諸活動に関する情報や特別支援教育に関する情報について、特総研ジャーナルと、英語版のNISE Bulletinを発行した。さらには、令和5年度よりNISE研究レポートを作成し、科研費等の外部資金研究も含む研究所で取り組んでいる全ての研究の概要や成果を総覧いただけるようにした。このほか、所内から未発表論文を募集して審査の上編纂する研究紀要についても、毎年3月に刊行した。これらは全てホームページで公開するとともに、メールマガジン・LINE・Xなどを活用して、研究所の研究成果や特別支援教育に係る最新の情報等の提供に努めた。</p> <p>また、特別支援教育推進セミナーや全国特別支援教育センター研究協議会、専門研修等の研究所が実施する事業や、関係学会の機会を活用し、研究成果の発表や参加者との意見交換を通じて、成果の普及や活用の促進を図った。</p> <p>なお、令和5年度の主務大臣指摘を踏まえ、効果的な成果物と広報資料の作成力の向上を図るため、専門家を招聘し、所内にてプレゼンテーション資料作成の講習やCanva活用のための講習を合わせて3回実施し、職員の広報物作成のスキルの向上を図るとともに、リーフレット等のデザインの強化及び内容の充実を図った。</p>	<p>フォロワー数が著しく増える傾向があることから、<u>ステークホルダーへの周知だけではなく、これまで繋がり</u>のなかった層を含め広く国民一般に対して届いていることが推察され、<u>共生社会の実現に向けた理解啓発等、広報活動の広がりが大きい</u>に期待できる。</p> <p>研究成果の公表・普及に関しては、<u>主務大臣指摘を踏まえて、効果的な成果物と広報資料の作成力向上のための所内講習を行った</u>。その結果、Canvaの活用によりチラシ作成等の作業時間が短縮されただけでなく、<u>研究成果物や広報資料のデザイン性や内容の質が向上した</u>。このように、魅力的なチラシやコンテンツの配信・配布により、ユーザーの目に留まったり、中身を読んでもみようと思っただけのようになったと推察される。なお、こうした取組は、<u>教師だけではなく広く国民一般への情報発信の強化にもつながっており、それが結果としてホームページ閲覧数の大幅な増加に繋がったと推察される</u>。</p>	<p>実績・達成率も高く、努力の跡がうかがえる。</p> <p>通常の学級における取組への支援については、学校現場において大きな課題を抱えている内容であり、そこに力をいれていることも評価できる。しかしながら、研究所からの発信や情報が隔々まで届いている実感は乏しい。都道府県での研修等を通じて更なる広報を期待したい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・採用後10年以内に特別支援教育を複数年経験するよう文部科学省が政策を推進している中で、研究所が研修や情報提供を行うなど上手く連携することを期待する。 ・特別支援教育のナショナルセンターとして、情報発信に努めているが、さらに広く周知いただくような取組を期待する。併せて、小・中学校教員（特に中学校教員）の専門性を高めるために、まず各都道府県の核になるような教員を研究所の研修等で育っていただきたい。 ・各都道府県の教育センターとの密な連携により、研究所の研究職員に現場の状況を理解し、課題等を把握していただくことで、現場の実情を踏まえながら、研究活動や研修内容により広がりを持たせていただくことができるのではないかと考える。 ・近年、特別支援教育に対する学校現場での理解が高まっており、障害のある子供たちが過ごしやすい環境作りが着実に進んでいると実感する機会が増えたため、研究所の成果が反映されていると感じた。
--	---	---	--

<p><その他の指標></p> <ul style="list-style-type: none"> ・国内外の大学図書館等と連携し、研究所の研究成果や研究所が保有する学術文献に関する情報を特別支援教育の研究者（大学教員、大学院生等）に積極的に提供して、特別支援教育に関する研究の振興と質の向上に貢献したか。 	<p><主務大臣指摘>（令和5年度実績評価時）</p> <p>研究所の成果物であるリーフレット等をより広く普及させるため、読み手のニーズを的確に把握した上で、レイアウト等の更なる工夫を期待する。</p> <p>エ 図書室の整備</p> <p>図書室が内閣総理大臣の指定を受けた歴史資料等保有施設であることから、公文書管理法に基づいて当研究所が保有する学術文献の目録（蔵書目録）を作成し、一般公開している。</p> <p>特別支援教育に関連する様々な学術文献へのアクセスが容易になるよう、インターネット上の情報資源や情報検索ツールへの入り口となるリンク集をホームページに掲載し、一般の利用に供している。</p> <p>国内外の大学図書館等と連携し、研究所の研究成果や研究所が保有する学術文献に関する情報を特別支援教育の研究者（大学教員、大学院生等）に積極的に提供して、特別支援教育に関する研究の振興と質の向上に貢献している。具体的には、①図書室利用の受入、②大学図書館等と連携した郵送による図書貸出（以下、ILL 図書貸出）及び論文等の複写（以下、ILL 文献複写）というサービス形態により、研究成果や学術文献の提供を行っている。令和3年度から令和6年度の実績は、図書室利用の受入135名、ILL 図書貸出163冊、ILL 文献複写643件であった。各年度の実績は下表のとおり。</p>	<p>研究所の研究成果や研究所が保有する学術文献に関する情報を特別支援教育に関する研究者等に積極的に提供し、特別支援教育の研究の振興と質の向上に貢献した。</p> <p>研究所の蔵書目録や研究成果リポジトリは我が国最大の学術情報検索基盤である「CiNii」とデータ連携しており、国内外の研究者が容易かつ即座に研究所の研究成果や研究所が保有する学術文献に関する情報を得ることができる。</p> <p>国立情報学研究所の NACSIS-ILL システムを利用したサービスの実績は1,600を超える学術機関等の中で常に<u>上位 1/3 以上の位置を占めている。さらに、研究所の蔵書規模（約 87,000 冊）を加味した場合は、全国の国立教育系単科大学を上回る貢献度を示している。</u></p>	
---	--	---	--

【図書室外部利用実績】

	来室利用者数（延べ）	ILL・図書貸出件数（ILL以外含む）	ILL・文献複写件数（ILL以外含む）
令和3年度	31人	30件	165件
令和4年度	38人	55件	139件
令和5年度	32人	41件	156件
令和6年度	34人	37件	183件
合計	135人	163件	643件

ILL図書貸出及びILL文献複写を実施する国内基盤として国立情報学研究所が「NACSIS-ILLシステム」を運営しており、国公立大学図書館、大学共同利用機関法人、研究開発法人、独立行政法人その他1,600を超える学術機関等がこれに参加している。同システムを利用した研究所の令和6年度ILL図書貸出及びILL文献複写実績を国立教育系単科大学と比較するとILL図書貸出第12位、ILL文献複写第9位であった。各機関の蔵書規模を加味した場合は、ILL図書貸出第7位、ILL文献複写第1位であった。

【教育委員会・学校・教員・国民への幅広い理解啓発活動<その他指標>】

ア 研究所セミナーの充実並びに研究所公開等

研究所の取組について広く知っていただく機会として、毎年、10～11月に研究所公開を、2～3月に研究所セミナーを開催している。研究所公開は、研究所の認知度向上及びインクルーシブ教育システムや障害に関する理解啓発を目的として研究所で実施しており、隣接する筑波大学附属久里浜特別支援学校と連携し、学校公開と同日開催で行った。研究所内の見学ツアーや研究職員による講話、ICT機器の体験、障害者スポーツ体験や地域の福祉作業所による菓子パン販売など、子

<その他の指標>

・教育委員会・学校・教員・国民への幅広い理解啓発活動を充実するための取組みを行ったか。

幅広い理解啓発として、ホームページやSNS等の発信のほか、

- ・研究所の認知向上及びインクルーシブ教育システムや障害に関する理解啓発のための「研究所公開」
- ・研究所の研究成果を普及するための「研究所セミナー」
- ・自治体と連携して、地域における特別支援教育の理解啓発に取り組む「推進セミナー」

供から大人まで広く関心を持っていただけるような企画を多数準備し、理解啓発の機会とした。

一方研究所セミナーは、1年間の研究成果を報告する場として東京で開催し、研究テーマに分かれた分科会やポスターセッションの時間を設けるなど、研究成果の普及及び特別支援教育に関する教育現場等関係機関との情報共有の機会となった。

それぞれの参加者に実施したアンケートの結果は以下のとおりであり、高い満足度となっている。

○研究所公開

	令和3 年度	令和4 年度	令和5 年度	令和6 年度
満足度	88.6%	96.7%	96.6%	95.1%

※「非常に満足した」「やや満足した」の合計
※令和3年度はオンライン開催

○研究所セミナー

	令和3 年度	令和4 年度	令和5 年度	令和6 年度
有意義度	98.0%	97.9%	99.2%	97.9%

※「意義があった」「やや意義があった」の合計
※令和3年度はオンライン（一部オンデマンド）開催

イ 教育委員会・教育センター等と連携したセミナー

地域における特別支援教育の理解啓発を図るため、特別支援教育推進セミナーを令和3年度以降、毎年度3回（3地域ブロックで）オンラインで開催した。令和6年度より、有識者の意見を踏まえ、ブロック外からの参加も可能とし、ブロック外の教育関係者等へも積極的に広報を行ったことで、ブロックを超えた参加が増加した。令和7年度も3回開催予定である。

・発達障害の理解啓発のための「発達障害教育基礎セミナー」を開催した。それぞれ、目的と対象に照らしてプログラムを工夫し、幅広い理解啓発に努めた。

特に発達障害教育基礎セミナーについては、従前、指導者養成を目的として発達障害教育実践セミナーを開催していたところ、通常の学級を指導する教員に向けた情報発信をさらに検討すべき、との有識者の意見を受け、令和6年度に受講者を限定しない形で新たに実施したものである。

この4年間における各行事の延べ参加者数は、研究所公開（オンライン含む）約8,600名、研究所セミナー（オンライン含む）約4,000名、推進セミナー約2,700名、発達障害基礎セミナー（令和6年度から）約3,000名と多くの方に参加いただいております。研究所の研究成果を着実に還元していくことに加え、教育関係者にとどまらず、広く国民一般の理解啓発にも貢献できたと考える。

〈有識者からの意見〉（令和4年度実績評価時）
 推進セミナーは、現在、管理職対象に全国3ブロックの開催
 であるが、今後はブロックを5ブロック程度にして開催する
 とより学校現場に研究内容が周知されると考える。

特別支援教育推進セミナーの参加者数及び参加者アンケートによる満足度は以下の通り。令和6年度までの合計参加者数は2,686名であり、今期中に3,000名を超える関係者に参加いただける予定である。また、参加者の満足度は全ての年度で95%以上となっており、参加者にとって有意義な機会の提供となった。

	令和3年度	令和4年度	令和5年度	令和6年度
①	北海道・東北	関東甲信越	北海道・東北	関東甲信越
	319名	217名	130名	302名
	92.4%	96.0%	99%	98.9%
②	中国	東海北陸	中国・四国	東海北陸
	293名	119名	170名	192名
	99.0%	95.7%	99%	100%
③	九州	近畿	九州	近畿
	228名	144名	235名	337名
	95.3%	93.6%	97%	100%

※上段：開催ブロック、中段：参加者数、下段：満足度
 ※満足度については、「大変有意義（満足）であった」「有意義（やや満足）であった」と回答した方の合計

ウ 発達障害教育に関する理解啓発活動
 有識者からの通常の学級を指導する教員に向けた情報発信をさらに検討すべきとの指摘を踏まえて、令和6年度に、通常の学級の指導

にあたる教員を含めた、受講者を限定しない発達障害教育基礎セミナーを開催した。発達センターが令和4年度より3年間の計画で取り組んできた発達障害のある児童生徒に関わる有識者、学校関係者等による「発達障害教育の情報提供にかかる検討会議」の成果を広く発信するために、多くの学校で課題となっている通常の学級に在籍する児童生徒に対する指導・支援について、研修の機会を提供することを目的として実施した。

当日のライブ配信（Zoom ウェビナー）と事後のオンデマンド配信（YouTube）で、できる限り多くの教育関係者が受講できるようにし、ライブ配信の申込者は456名、オンデマンド配信の申込者は2,545名であり、大変盛況であった。受講後のアンケートでは、アンケート回答201名のうち、「有意義であった」が193名（96.0%）、「どちらかといえば有意義であった」が8名（4.0%）の回答となっており、肯定的な評価を得た。また、特別支援教育を担当する教員（特別支援学校・特別支援学級・通級指導教室）が104名で、それ以外（管理職や通常の学級の担任等）が97名であり、高等学校の教員は14名であった。

さらに、通常の学級を指導する教員に発達障害教育の情報を届けるために、校内研修等の研修の機会に活用できる研修コンテンツを制作し、広く活用してもらうことが必要との認識から、令和7年度は団体申込ができるように改善して幅広い層の教員の研修の機会を提供する計画である。

このほか、NISE学びラボ等の各種コンテンツについて、令和5年度から日本教育大学協会学長・学部長等連絡協議会での事業説明・情報提供を行うとともに、令和6年度には新たに日本私立大学連盟への情報提供を行い、連盟のメールマガジン、ホームページに掲載いただき、広く周知を行った。令和7年度はさらに日本私立大学協会及び日本私立短期大学協会にも情報提供を行う予定としている。

	<p>(有識者の指摘) (令和5年度実績評価時)</p> <p>これだけ有益な情報や学びのコンテンツを有する特総研について知らない教員が多く、あらゆる層の教員にどのように活用を促進するかは大きな課題である。</p> <p>統計的に見ても高等学校教員による認知度が低い。</p> <p>エ 特別支援教育の理解啓発・普及を目的としたリーフレットの作成と発信</p> <p>今期においては、全所的な協力を得て、令和4年度8月より、小・中・高等学校等において経験の少ない教員に向け、「特別支援教育リーフ」を作成、発行した。</p> <p>特別支援教育リーフについては、校長会・関係団体・関係機関より収集した情報内容を踏まえ、特別支援教育に関する理解・啓発に関する基礎的な内容や教育現場に必要な実践に関わる内容を整理し、コンパクトにまとめたリーフレットとしており、「ここからはじめてみよう、特別支援学級」「このように考えよう、合理的配慮」など、現在25種類刊行している。令和7年度末までに35種類作成・発行する予定である。</p> <p>また、主務大臣の指摘を踏まえ、パラリンピックやデフリンピックを題材とした児童生徒や教職員の障害理解に資する内容の特別支援教育リーフも日本ろうあ連盟にも協力いただき、令和7年6月に発行する予定である。</p> <p><主務大臣指摘> (令和5年度実績評価時)</p> <p>パラリンピックやデフリンピックを契機として、これらを題材とし、児童生徒や教職員の障害理解に資する取組を期待する。</p>	<p>理解啓発の手段として、上述の行事に加え、コンテンツの作成・発信の取組も行った。分量が少なく、かつ、専門用語を用いない平易な言葉でまとめられた特別支援教育リーフは、都道府県市町村で教育委員会・教育センターの研修、特別支援学校のセンター的機能における小・中・高等学校への巡回相談の場等で大いに活用されており、小・中・高等学校で初めて特別支援教育に携わる教員への支援ツールとなっている。</p> <p>このリーフについては、有識者より、「特別支援教育について、大変分かりやすく整理してある。…異なる学校段階の<u>教師や保護者にも理解しやすい形での情報発信はとても重要な</u>ので、これからも発信をお願いしたい。」といった評価もいただいているところ。</p>	
--	--	--	--

	<p>オ 支援機器等教材に関する理解啓発活動</p> <p>i ライブラリー（教育支援機器等展示室）や発達障害教育推進センター展示室、あしたの教室（ICT 活用実践演習室）を計画的に整備し、学校、大学、海外等からの見学者も受け入れてきた。</p> <p>i ライブラリーに音声ペン等を新たに展示し、参観者に広く情報提供を行った。</p> <p>また、令和5年12月には学校で活用可能な支援機器を紹介する「特別支援教育ポータルサイト」をリニューアルし、全国の教育委員会・教育センターから収集した特別支援教育に関する最新の教材・教具情報をポータルサイトに入れ込み、使い方の動画も視聴できるようにした。さらに都道府県の教育センター等と調整し、各センターの特別支援教育に関する教材ポータルサイトに紹介されている教材・支援機器についても、研究所の特別支援教育教材ポータルサイトで視聴できるようにした。</p>	<p>なお、<u>自治体からは、研修資料として活用することで、研修資料作成の負担減にもなる</u>といった声もいただいております、<u>特別支援教育の知見の提供と自治体の働き方改革に貢献している。</u></p> <p>i ライブラリー等、実際の機器を展示し、見学者に触って体験いただくことで、一般の方には障害特性への気づきにつなげていただいたり、教師には、支援機器を知ることにとどまらず、指導における活用場面を具体的にイメージしてもらいやすくなるなどの効果があったと考える。</p> <p>また、学校で活用可能な支援機器の情報や活用事例を提供する「特別支援教育ポータルサイト」をリニューアルし、機器の使い方の動画も視聴できるようにすることで、機器の特長などがわかりやすくなるようにした。このサイトでは、支援機器と、それを活用した実践事例を合わせて紹介しており、<u>令和5年度に316件、令和6年度に220件（実践事例204件、支援機器教材16件）を新たに追加した。令和7年度も、</u></p>	
--	---	---	--

		<p><u>最新の情報を200件以上追加していく予定</u>である。このようなポータルサイトの改善・充実も、ホームページのアクセス数の増加に繋がっているものと考えており、<u>支援機器等教材の理解啓発に貢献した。</u></p>	
<p>(2) インクルーシブ教育システム構築の国際的動向の把握と海外の研究機関との研究交流の推進</p> <p><主な定量的指標></p> <ul style="list-style-type: none"> ・中期目標終了までに7か国以上の諸外国の動向把握、情報発信を行う。 	<p><主要な業務実績></p> <p>【国際動向の把握・情報発信<定量的指標>】</p> <p>令和3年度は7か国（アメリカ、イギリス、オーストラリア、スウェーデン、ドイツ、フィンランド、韓国）、令和4年度から令和6年度は、フランスを追加した8か国について国別調査を実施し、インクルーシブ教育システムの構築に係る最新動向について情報収集を行った。</p> <p>把握した海外情報については、特総研ジャーナルに「諸外国におけるインクルーシブ教育システムに関する動向」として報告し、当研究所のホームページに掲載した。また、当研究所における特別支援教育専門研修の各期において、「諸外国における障害のある子供の教育」として、障害者の権利に関する条約、諸外国のインクルーシブ教育の動向と状況などについて、最新の調査を踏まえた講義を行った。さらに、文部科学省初等中等教育局特別支援教育課等に情報提供した。特別支援教育のナショナルセンターとしてのミッション及び有識者の意見も踏まえ、今後も国の特別支援教育に係る施策の立案等に資する情報収集や資料作成に努めていく。</p>	<p><根拠></p> <p>動向把握及び情報発信を行った国数については、<u>令和3年度は7か国（達成度 100%）令和4年度から令和6年度は8か国実施（達成度 114.3%）</u>であり、令和6年度までの全ての年度で目標値を達成した。</p> <p>国別調査で得られた情報は、研究所のホームページ等を通じて発信するとともに、当研究所の特別支援教育専門研修における講義の中で紹介している。専門研修の研修員は、各地域において特別支援教育の推進を担うリーダー的役割を果たすことが期待されており、今後彼らがその役割を果たしていく際に、障害者権利条約を踏まえた日本の取</p>	

<p><その他の指標></p> <ul style="list-style-type: none"> ・海外の特別支援教育の研究機関との交流を図り、研究の充実を図るとともに、国際的なセミナーやシンポジウム等を開催し、広く情報の普及を図ったか。 	<p><有識者の意見> (令和5年度実績評価時)</p> <p>本研究には、インクルーシブ教育システム並びに特別支援教育に係る諸外国の動向に係る情報を収集し、分析するなど、重要な役割を担っている。今後も国の特別支援教育に係る施策の立案等に資する情報収集、資料作成に励んでほしい。</p> <p>【海外研究機関との交流及び国際的なシンポジウムの実施<その他の指標>】</p> <p>ア 韓国国立特殊教育院との研究交流</p> <p>韓国国立特殊教育院とは、研究協力及び交流に関する覚書に基づき、令和3年度以降、毎年「日韓特別支援教育協議会」を実施（令和3年度：オンライン、令和4年度：当研究所、令和5年度：韓国国立特殊教育院、令和6年度：当研究所で開催）し、研究交流を深めている。各年度の協議会のテーマは以下の通りである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・令和3年度：「両国のインクルーシブ教育システムの現状と課題」 ・令和4年度：「日韓における教育課程に係る政策」 ・令和5年度：「通常の学級における多様な教育的ニーズのある子供の教科指導上の配慮」及び「デジタル教育に向けた韓国の旅程」 ・令和6年度：「共生社会の実現に向けた障害理解教育の取組」 <p>また、韓国国立特殊教育院が韓国国内の特別支援学校等に向けて発行している季刊誌「現場特殊教育」に毎年2、3回寄稿し、日本の特別支援教育に関する情報を発信した。</p> <p>さらに、令和3年度から令和5年度まで、毎年、韓国国立特殊教育院が主催する国際セミナーに当研究所の研究職員を派遣し、日本の特別支援教育について発信するとともに、韓国やアメリカ、フランス、ユネスコ等の研究者と交流した。</p>	<p>組・考え方や諸外国の取組状況を理解できていることの意義は大きい。</p> <p>また、<u>文部科学省初等中等教育局特別支援教育課の依頼により適宜各国の基本情報を提供しており、国の政策に寄与した。</u></p> <p><根拠></p> <p>韓国国立特殊教育院とは、令和4年度以来毎年集合型で協議会を開催し、両国の特別支援教育やインクルーシブ教育システムについて情報交換を行うとともに、職員同士の交流を深めてきた。また、フランス国立インクルーシブ教育高等研究所とも連携協定の再締結が実現したことで今後具体的な交流を行っていくこととしており、韓国国立特殊教育院との交流も含め、<u>インクルーシブ教育システムの最新情報や障害者権利条約の国連審査に向けた情報交換する基盤作りができた。</u></p> <p>海外の特別支援教育関係者の受入れについては、令和3年度と令和4年度はコロナ禍の影響があり少なかったものの、<u>令和5年度以降は多くの来訪者があり、特別支援教育に関する国際的な交流を広く行うことができた。</u>来訪者に、日本の特</p>	
--	--	---	--

イ フランス国立インクルーシブ教育高等研究所との研究交流
フランス国立インクルーシブ教育高等研究所とは平成 27 年 3 月に研究協力や交流に関する協定を締結していたが、10 年を経過したことから、令和 7 年 3 月に再締結を行った。これを契機に、今後、研究交流を一層進めていく基盤を築いた。

ウ 海外の特別支援教育関係者の受け入れ
海外からの視察や研修を以下のように受け入れた。令和 3 年度と令和 4 年度はコロナ禍の影響があり少なかったものの、令和 5 年度以降は多くの来訪者があり、特別支援教育に関する国際的な交流を広く行うことができた。

年度	国や地域の数	人数
令和 3 年度	1 か国	1
令和 4 年度	0	0
令和 5 年度	32 の国や地域	123
令和 6 年度	18 か国	27

(計) 151

エ 国際的なシンポジウム等の実施、情報の普及
令和 5 年度及び令和 6 年度に JICA からの依頼で実施したアジア・アフリカの国々（令和 5 年度：17 か国、令和 6 年度 14 か国）の訪問対応では、当研究所職員が日本の特別支援教育について情報提供するとともに、参加者全員から自国の特別支援教育やインクルーシブ教育システム構築の現状と課題について資料提出と報告を依頼するなど、シンポジウム形式で話題提供と協議を実施した。

令和 5 年度（令和 6 年 3 月）広島国際会議場において、広島大学と

別支援教育の現状や当研究所の事業内容等について説明することによって、日本の特別支援教育や特別支援教育に関する研究について海外に発信するとともに、来訪者から、それぞれの国の特別支援教育の現状と課題について情報収集することができた。

海外から訪問があった際、来訪者にも情報提供を求めて質疑応答を行うなど、シンポジウム形式での協議を試行したほか、主務大臣指摘を踏まえ、広島大学と共催で一般の方も参加可能な国際的なシンポジウムを実施したり、日韓特別支援協議会の様子を両国の教育関係者にオンライン配信したりするなど、段階的ではあるが、諸外国の状況等について、広く周知できるよう取り組んだ。

<課題と対応>

- ・次の国連審査に向けて、文部科学省と連携しながら必要な情報整理・分析、資料作成等に対応する。
- ・国別調査結果や韓国国立特殊教育

<評価の視点>

- ・主務大臣からの指摘事項への対応を行ったか。

	<p>当研究所の共催により、米国、フィンランド、ユネスコの研究者等の参加を得て「広島大学・国立特別支援教育総合研究所共同シンポジウム ダイバーシティ&インクルージョンから築くウェルビーイングの未来～人間の幸福と持続可能な成長を実現できる共生社会の形成に向けて～」を実施した。</p> <p>なお、諸外国の動向等の情報については、主務大臣指摘を踏まえ、上記広島大学との共同シンポジウムについて、一般の方も対象として広く周知したり、令和6年度の韓国国立特殊教育院と当研究所との話題提供と協議の様様をオンラインで日本及び韓国の特別支援教育関係者に配信するなど、広く一般に周知できるよう取り組んだ。さらに、令和7年度には、研究所主催の国際シンポジウムを開催し、これまで収集してきた国際動向について、広く一般の皆様にも周知する計画である。</p> <p>〔＜主務大臣指摘＞（令和5年度実績評価時）〕</p> <p>特別支援教育に係る諸外国の動向に係る情報収集について、引き続きインクルーシブ教育システム構築の動向に関する情報収集に努めるとともに、国立特別支援教育総合研究所ジャーナルへの掲載や専門研修での講義内容への反映等に留まることなく、広く一般に周知するためのより効果的な発信及び活用方法を検討する必要がある。</p>	<p>院やフランス国立インクルーシブ教育高等研究所との交流の成果を、インクルーシブ教育システム構築等の研究や事業に活用していく。</p>	
--	--	--	--

<p>(3) 自治体や学校が直面する課題の解決に関する支援や情報発信</p> <p><主な定量的指標></p> <ul style="list-style-type: none"> 地域の課題解決に向けた取組の実施件数中期目標期間中に30件以上 	<p><主要な業務実績></p> <p>【地域支援事業実施件数<定量的指標、その他の指標、評価の視点>】</p> <p>ア 地域支援事業の実施</p> <table border="1" data-bbox="490 387 1126 584"> <thead> <tr> <th>令和3年度</th> <th>令和4年度</th> <th>令和5年度</th> <th>令和6年度</th> <th>令和7年度</th> <th>合計</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>13件</td> <td>13件</td> <td>16件</td> <td>15件</td> <td>6件 (実施中)</td> <td>63件 【210%】</td> </tr> </tbody> </table> <p>※【 】内の%は、「数値目標：中期目標期間中に30件以上」の目標達成率</p> <p>地域支援事業は令和3年度から令和6年度までの4年間に57件実施し、この4年間に参画した自治体は37であった。令和7年度には6件実施し、新たに参画する自治体は2である。</p> <p>この結果、中期目標期間中の実施件数は63、参画自治体は39となる見込みであり、目標値を達成した。</p>	令和3年度	令和4年度	令和5年度	令和6年度	令和7年度	合計	13件	13件	16件	15件	6件 (実施中)	63件 【210%】	<p><根拠></p> <p><u>地域支援事業については、中期目標期間中に30件以上としているところ、令和6年度までの4年間で57件(達成度190%)、令和7年度までの5年間で63件実施(達成度210%)</u></p> <p>となり、目標を大きく上回ることができた。</p> <p>これは、国連の勧告を受け、各自治体のインクルーシブ教育システム構築への関心が高まったこととともに、本研究所役職員が様々な機会を捉えて本事業の意義を伝え続けてきた結果であると考えられる。</p>	
令和3年度	令和4年度	令和5年度	令和6年度	令和7年度	合計										
13件	13件	16件	15件	6件 (実施中)	63件 【210%】										

(参画自治体の内訳)

	件数	参画自治体
令和3年度	13	札幌市、神戸市、北海道芽室町、岩手県釜石市、栃木県鹿沼市、神奈川県相模原市、神奈川県葉山町、神奈川県横須賀市、長野県須坂市、静岡県袋井市、愛知県田原市、大阪府箕面市、福岡県筑前町
令和4年度	13	<u>長野県</u> 、札幌市、岩手県釜石市、栃木県鹿沼市、 <u>栃木県さくら市</u> 、 <u>栃木県下野市</u> 、 <u>神奈川県厚木市</u> 、 <u>神奈川県葉山町</u> 、 <u>長野県須坂市</u> 、 <u>長野県飯田市</u> 、 <u>愛知県犬山市</u> 、大阪府箕面市、 <u>鹿児島県鹿屋市</u>
令和5年度	16	<u>栃木県</u> 、 <u>山梨県</u> 、 <u>広島県</u> 、 <u>宮崎県</u> 、 <u>沖縄県</u> 、 <u>名古屋市</u> 、 <u>岩手県一戸町</u> 、 <u>岩手県宮古市</u> 、 <u>栃木県下野市</u> 、 <u>埼玉県鴻巣市</u> 、 <u>埼玉県吉川市</u> 、 <u>東京都豊島区</u> 、 <u>長野県飯田市</u> 、 <u>愛知県犬山市</u> 、 <u>鹿児島県阿久根市</u> 、 <u>鹿児島県枕崎市</u>
令和6年度	15	<u>青森県</u> 、 <u>栃木県</u> 、 <u>山梨県</u> 、 <u>広島県</u> 、 <u>宮崎県</u> 、 <u>沖縄県</u> 、 <u>名古屋市</u> 、 <u>北海道赤平市</u> 、 <u>岩手県一戸町</u> 、 <u>岩手県宮古市</u> 、 <u>東京都豊島区</u> 、 <u>神奈川県秦野市</u> 、 <u>鳥取県鳥取市</u> 、 <u>鹿児島県阿久根市</u> 、 <u>鹿児島県枕崎市</u>
令和7年度	6	青森県、 <u>宮城県</u> 、北海道赤平市、神奈川県秦野市、鳥取県鳥取市、福岡県宗像市、

※下線は、その年度に新規参画した自治体。

<主な定量的指標>

・地域実践事業に参画した都道

イ 地域実践事業に参画した都道府県・市町村の事業に関する有意義

令和6年度までの4年間に地域支援事業に参画したすべての自治

<p>府県・市町村の事業に関する 有意義度 80%以上</p> <p><その他の指標></p> <ul style="list-style-type: none"> 我が国のインクルーシブ教育システムの構築に向けた都道府県等への支援を行ったか。 インクルーシブ教育システム構築に向けて都道府県・市町村・学校が直面する課題の解決に資する情報発信の充実を図ったか。 支援データベースの充実を図るとともに、閲覧者の利便性をより向上させたデータベースとしたか。 	<p>度 地域支援事業に参画した自治体に対して、毎年度の事業終了時にアンケートを実施したところ、すべての自治体から本事業について「有意義」であったと回答があり、有意義度は毎年度 100%であった。</p> <p>ウ 地域支援事業の成果の公表や還元 令和3年度以降、毎年、地域支援事業の成果についてとりまとめた「地域支援事業報告書 地域におけるインクルーシブ教育システムの推進」を作成し、全国の都道府県・市区町村教育委員会に送付するとともに当研究所のホームページに掲載して、本事業の成果の普及及び還元を行った。 令和6年度地域支援事業については、令和7年2月実施の「地域支援事業報告会」を都道府県・市区町村教育委員会にオンラインで開催したところ、約90の自治体の参加を得て、成果を共有することができた。 令和5年度特別支援教育推進セミナーでは、岩手県釜石市が地域支援事業の成果を岩手県内及び全国に公表し還元した。また、令和6年度特別支援教育推進セミナーでは、山梨県が地域支援事業の成果を山梨県内及び全国に公表し還元した。</p> <p>エ 全国特別支援教育センター協議会の会員による共同研究 神奈川県教育委員会、岩手県総合教育センター、神奈川県立総合教育センター及び山梨県総合教育センターと当研究所の共同により、高等学校に在籍する知的障害のある生徒や学業・生活上の困難を抱える生徒に対する指導・支援の現状と課題に関する調査を実施し、自治体における先進的な取組事例や支援方法の情報を収集することができた。調査結果については、令和7年度にとりまとめる予定である。</p>	<p><u>体から、有意義であったとの回答を得ることができ（達成度 125%）、目標を大きく上回る成果を得ることができた。</u></p> <p>これは、参画自治体に担当研究員を置き、連携を密にして取り組んだことや、参画自治体の担当者が研究所に来所して進捗状況の確認や事業展開の相談をする推進プログラム等を実施した結果、参画自治体間の協力関係が生まれたことによるものと考えられる。</p> <p><u>各年度の地域支援事業の成果については報告書としてとりまとめ、全国の都道府県・市区町村教育委員会に送付するとともに当研究所のホームページに掲載することで、本事業の成果を広く普及し、還元することができた。</u></p> <p>また、<u>特別支援教育推進セミナーにおいて、地域支援事業に参画した自治体が成果を公表し、還元することができた。</u></p>	
---	--	---	--

<p><主な定量的指標></p> <ul style="list-style-type: none"> ・インクルーシブ教育システム構築データベース事例のダウンロード件数、毎年2万5千件 	<p>【インクルーシブ教育システムの構築に向けた情報発信<定量的指標>】</p> <p>ア インクル DB の事例ダウンロード数</p> <p>各年度におけるインクル DB の事例ダウンロード数は、以下のとおりであり、令和4年度以降、目標値を達成している。</p> <table border="1" data-bbox="548 335 996 582"> <thead> <tr> <th></th> <th>DL 数</th> <th>達成率</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>令和3年度</td> <td>22,459</td> <td>89.8%</td> </tr> <tr> <td>令和4年度</td> <td>25,102</td> <td>100.4%</td> </tr> <tr> <td>令和5年度</td> <td>80,335</td> <td>321.3%</td> </tr> <tr> <td>令和6年度</td> <td>118,917</td> <td>475.7%</td> </tr> </tbody> </table> <p>※目標「毎年 25,000 件」に対する達成率</p>		DL 数	達成率	令和3年度	22,459	89.8%	令和4年度	25,102	100.4%	令和5年度	80,335	321.3%	令和6年度	118,917	475.7%	<p>インクル DB の事例ダウンロード数は、年々増加してきており、特に令和5年度以降に大幅に増加し、<u>目標を大きく上回ることができた。</u></p> <p><u>主務大臣の指摘を踏まえ、幼稚園、小・中学校、高等学校等の関係者にもインクル DB 活用の周知を図るため、</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・DB 紹介のチラシの更新 ・DB の活用方法等を紹介する「インクル DB セミナー」の開催 ・教育委員会の研修事例や医療的ケア児の事例集を掲載した。 	<p>等、<u>様々取り組みながら周知を行った。</u>特にインクル DB セミナーについては、実際に DB の画面を見ながら操作方法を確認したり、教育委員会等で、DB を活用した研修の実施例を紹介したりし、すぐに現場で実践いただける内容としたことで、反響も大きく、<u>令和5年度以降のダウンロード数の飛躍的な増加につながったものと考えている。</u></p> <p>実際に支援を必要とする児童生徒と向き合っている現場の教師は、必ずしも近くに相談相手がいない状況で、このような時にどうすればよいのか、具体的な対応につながるヒントを求めており、閲覧数ではな</p>
	DL 数	達成率																
令和3年度	22,459	89.8%																
令和4年度	25,102	100.4%																
令和5年度	80,335	321.3%																
令和6年度	118,917	475.7%																
<p><評価の視点></p> <ul style="list-style-type: none"> ・主務大臣からの指摘事項等への対応を行ったか。 	<p>イ インクル DB の充実と閲覧者の利便性向上の取組</p> <p>インクル DB の合理的配慮事例については令和2年度から引き続き590 事例を掲載している。</p> <p>主務大臣の指摘を踏まえ、幼稚園、小・中学校、高等学校等の関係者にもインクル DB 活用の周知を図るため、DB 紹介のチラシを更新したほか、令和4年度から毎年、「インクル DB セミナー」をオンラインで実施した。セミナーの主な内容は、インクル DB の操作方法等に関する説明と、インクル DB を活用した研修例の報告であり、毎回1,000 名を超える参加を得た。さらに、令和5年度には、香川大学との連携で「医療的ケア児の保育・幼児教育実践事例集」を掲載したり、令和5年度と令和6年度にはインクル DB を活用した教育委員会の研修事例を掲載したりしてコンテンツの充実を図った。</p> <p>また、令和4年度にサーバーを更新したことにあわせ、令和5年6月にインクル DB のシステムを更新し、事例のダウンロードを容易にしたり、反応速度をより速くしたりするなど、閲覧者の利便性の向上につながる改善を図った。</p>	<p>等、<u>様々取り組みながら周知を行った。</u>特にインクル DB セミナーについては、実際に DB の画面を見ながら操作方法を確認したり、教育委員会等で、DB を活用した研修の実施例を紹介したりし、すぐに現場で実践いただける内容としたことで、反響も大きく、<u>令和5年度以降のダウンロード数の飛躍的な増加につながったものと考えている。</u></p> <p>実際に支援を必要とする児童生徒と向き合っている現場の教師は、必ずしも近くに相談相手がいない状況で、このような時にどうすればよいのか、具体的な対応につながるヒントを求めており、閲覧数ではな</p>	<p>等、<u>様々取り組みながら周知を行った。</u>特にインクル DB セミナーについては、実際に DB の画面を見ながら操作方法を確認したり、教育委員会等で、DB を活用した研修の実施例を紹介したりし、すぐに現場で実践いただける内容としたことで、反響も大きく、<u>令和5年度以降のダウンロード数の飛躍的な増加につながったものと考えている。</u></p> <p>実際に支援を必要とする児童生徒と向き合っている現場の教師は、必ずしも近くに相談相手がいない状況で、このような時にどうすればよいのか、具体的な対応につながるヒントを求めており、閲覧数ではな</p>															

こうした取組の結果、特に令和5年度以降の事例のダウンロード件数の飛躍的な伸び率につながった。

〔主務大臣指摘〕（令和5年度実績評価時）
 「インクルーシブ教育システム構築支援データベースによる情報提供」は先駆的で利用度はそのダウンロード数の増加に表れているところであり、更なるPRと内容の質の向上に努めていただきたい。

<主な定量的指標>

- ・日本人学校への情報提供回数、年15回程度

【日本人学校への情報提供<定量的指標>】

ア 日本人学校への情報提供の実績

日本人学校を含む在外教育施設に対して、研究所の研究成果や動画コンテンツに関するリーフレット等の特別支援教育に関わる情報提供を行った。具体的実績は以下のとおりであり、令和6年度までの各年度において目標値を達成している。

○在外教育施設への情報提供の回数

	令和3年度	令和4年度	令和5年度	令和6年度
回数	15回	15回	17回	17回

また、日本人学校等の教員及び関係者から紹介された保護者に対しても相談対応を実施し、支援を行った。

○保護者に対する相談対応件数

	令和3年度	令和4年度	令和5年度	令和6年度
件数	17件	21件	10件	8件

イ ニーズに応じた対応

くダウンロード数がこれだけ伸びている数値を見ても、インクルDBがこのような教師の困りに対する一助となり、支援を必要とする児童生徒の指導・支援の充実に貢献できたものと考える。

日本人学校に対する情報提供の回数は、令和6年度まで全ての年度で目標値を達成している。

また、指標にはないものの、日本人学校の教員等を通じて保護者の相談にも対応しており、海外で不安を抱えている教師や保護者を支援することができた。

主務大臣の指摘も踏まえ、日本人学校等の支援については、文部科学省担当部署や海外子女教育振興財団との連携を密に取り、ニーズに応じた情報提供や支援となるようにした。また、現地訪問にも同行し、直接学校の相談対応や、指導・助言も行った。教育委員会のような存在もなく、孤立しがちな日本人学校に対して、研究所の知見を生かし、個別の指導計画の作成方法や自立活動について支援を行えたことで、現

	<p>情報提供等の支援に際しては、主務大臣の指摘を踏まえ、文部科学省初等中等教育局特別支援教育課、同総合教育政策局国際教育課及び公益財団法人海外子女教育振興財団が実施している日本人学校に係る調査及び研修会等から日本人学校内の特別支援教育に関する教育的ニーズを把握し、そのニーズに沿うように、研究所の研究成果やコンテンツを精選して紹介したり、インクル DB を活用した助言を行うなど、具体的な活用事例も示しながら情報提供を行うようにした。</p> <p>（主務大臣指摘）（令和5年度実績評価時）</p> <p>日本人学校への相談支援が、研究所の取組に関する一般的な内容の周知に留まっており、各日本人学校でのニーズや活用状況を把握した上で、日本人学校が直面する課題の解決に資する情報提供を行うことが必要である。</p> <p>また、令和3年度より、国際教育課の委託を受けて海外子女教育振興財団が実施している日本人学校に対する遠隔コンサルテーションにオブザーバーとして参画した。令和3年度には北京日本人学校とハノイ日本人学校が、令和5年度にはソウル日本人学校、ホーチミン日本人学校、クアラルンプール日本人学校が、令和6年度にはグアム日本人学校が対象校となり、筑波大学附属大塚特別支援学校、埼玉大学教育学部附属特別支援学校、横浜市立日野中央高等特別支援学校、筑波大学附属久里浜特別支援学校が遠隔支援コンサルテーションを実施した。研究所は定期的に遠隔支援コンサルテーションに参加し、助言を行った。さらに、ホーチミン日本人学校、クアラルンプール日本人学校、グアム日本人学校の3校に研究職員が現地訪問し、各日本人学校の教育的ニーズの聞き取り、授業観察、相談ケースへの助言に加えて、個別の指導計画の作成の仕方、自立活動の考え方などの専門的知見の共有を目的とする学習会などを実施した。なお、本事業に関しては、令和6年度に、海外子女教育振興財団と連携し、上海日本人学校の校長及び当該校の支援に関わる国内の福祉機関からの相談に対</p>	<p><u>地の教師や保護者の気持ちの上での安心や、児童生徒に対する指導・支援の充実に貢献することができた。</u></p>	
--	---	--	--

<p><その他の指標></p> <p>・校長会、教育委員会、教育センター等関係団体と連携した学校への情報提供を充実し、効率的・効果的な特別支援教育に関する情報の普及を図ったか。</p>	<p>応しており、複数回にわたるオンライン会議を重ねた結果、令和7年度から上海日本人学校が遠隔コンサルテーションの対象校となることに決定した。</p> <p>このほか、日本人学校の校長や特別支援教育コーディネーター、在外教育施設に赴任する教員（管理職等）等、職層に応じた研修への講師派遣などを行うとともに、海外子女教育専門相談員連絡協議会（会長は外務省大臣官房人事課子女教育相談室長）との連携による情報収集なども含めて、継続的にそれぞれの日本人学校での教育的ニーズの把握に努めた。</p> <p>【関係団体との連携による学校支援<その他の指標>】</p> <p>ア 関係団体等との連携</p> <p>毎年度当初に校長会・関係機関・関係団体事務局等を訪問して、主催する総会及び研究協議会等の年間計画を把握し、戦略的に特別支援教育に関する情報及び研究所の研究成果、研究所が開催するセミナー等の情報提供を行った。また、年間を通し、校長会・関係機関・関係団体事務局が開催する研修会等で教育現場のニーズを把握すると共に、ニーズに応じて、特別支援教育リーフや終了課題の研究リーフレット等を適切に情報提供した。</p> <p>イ 大学等の公開講座等への講師派遣</p> <p>都道府県等教育委員会や特別支援教育センターなどが実施する教員の専門性向上を目的とした研修会および大学の公開講座等への講師（インターネットを介して行うものも含む）を関係団体の要請に基づき派遣した。また、大学等における非常勤講師として職員の派遣を行った。</p>	<p>校長会等の関係団体とは、定期的に事務局を訪問するなど丁寧な関係構築を行っている。各団体が主催する総会、研究協議会等の年間活動計画に関する情報を正確に把握することで、研究所の指導資料や研究成果物、研修プログラムといったコンテンツについて、例えば、全国国公立幼稚園・こども園長会総会において、総会の話題として挙げられている感情のコントロールが難しいお子さんへの対応のヒントをまとめた特別支援教育リーフを提供・周知するなど、時機をとらえて効果的に提供することができた。これにより、校長会等関係団体の円滑な運営に貢献するとともに、団体を構成する所属会員の専門性向上に寄与することができた。</p>	
--	--	---	--

○講師派遣の実績

	令和3 年度	令和4 年度	令和5 年度	令和6 年度
派遣人数 (延べ数)	382名	316名	319名	376名

○非常勤講師としての職員派遣の実績

	令和3 年度	令和4 年度	令和5 年度	令和6 年度
大学数	29 大学	28 大学	25 大学	20 大学
件数	46 件	32 件	34 件	23 件

このほか、大学からの依頼による研究協議・シンポジウムでの発表や、大学のセミナーにおける特別支援教育の最新の動向・モデル事業の紹介、独立行政法人教職員支援機構の教職員中央研修への講師派遣1件、独立行政法人日本学生支援機構への講師派遣1件を実施した。

ウ 能登半島地震の被災地への支援

令和6年1月の能登半島地震の発生を受け、研究所では、被災地のニーズも踏まえながら可能な支援を行った。具体的には、当研究所ホームページの「災害時における障害のある子どもへの支援」に関するページについて、能登半島地震に対応させた更新を行ったほか、特別支援学校において、被災によって使えなくなっている教材があることを把握した上で、教科指導や自立活動で活用可能な教材を送付したり、小・中学校等を対象として発達障害のある児童生徒の支援ツール・教材を教育委員会を通じて提供した。また、当研究所や石川県教育委員会のホームページ等で紹介している、災害時における特別支援教育や発達障害児・者支援に関する指導者及び支援者向けコンテンツの情

被災時の支援に際しては、研究職員が現地へ足を運び、現状を踏まえ直接地元の方と支援内容について調整したり、教育事務局を経由して教材を届けるようにするなど、学校等の負担にならないよう配慮しながら対応した。

また、主務大臣の指摘を受け、被災地と継続的な関わりを持った。被災地の学校長や教育委員会からのヒアリングを通して、今後同様の支

<評価の視点>

・主務大臣からの指摘事項等への対応を行ったか。

	<p>報をまとめたチラシを作成し、同じく教育委員会を通じて配布を行った。</p> <p>こうした被災地への支援については、主務大臣の指摘を踏まえ、全国特別支援学校長会・石川県教育委員会を通し、継続的に被災地の状況を把握した。被災地の特別支援学校の学校長並びに教育委員会と意見交換をし、実際、被災の際に研究所から送付した教材等が有効であったのか、どんな支援が特に助かったかについて情報収集した。さらに、令和6年度当初に開設した小中学校の学校現場の教職員と教育委員会の職員を対象にしたオンラインの相談窓口を継続し、その後に発生した豪雨災害への対応を含め、現地のニーズに応える支援を行った。</p> <p>また、同様の被災があった場合の学校の教育活動においてどのような工夫が必要であるかの知見も収集した。例えば、図工で絵を描く際、パレットに紙を敷いた上で絵具を出せば、洗う時の水の節約になる等の工夫である。それから小中学校向けに提供したインターネットを介さない携帯型電子学習機器の教材が、有効に活用されていた。</p> <p>今後も継続して、校長会、教育委員会と連携しながら、被災地の情報収集並びにニーズに応える支援を行うこととする。</p> <p>＜主務大臣指摘＞（令和5年度実績評価時）</p> <p>能登半島地震の被災地への支援について、同様の事態が生じた際により効果的な支援を行うために、支援がどのような形で役立ったか、被災地の需要を反映した効果的なものであったかについてのフォローアップの実施が必要である</p>	<p>援が必要となる場合には、研究所としてどのような対応が必要であるかが明確になり、また、被災時にどのような教材・教具の工夫が必要であるかのノウハウの蓄積につながった。いつ発生するか分からない災害時の学校の対応に関する情報は、特別支援教育に限らず有益なものとなるため、<u>今後、情報を整理してホームページで公開することで、今回得た知見を広く他地域や学校に還元していく予定である。</u></p>	
--	--	--	--

<p>4. その他参考情報</p>
<p>令和3年度：予算額と決算額の差が10%以上であるが、令和3年度予定していた事業の一部を令和4年度に延期したことが要因である。</p> <p>令和6年度：予算額と決算額の差が10%以上であるが、情報普及に従事する人員数の増加があったことが大きな要因である。</p>

1. 当事務及び事業に関する基本情報			
II-1	業務運営の効率化に関する事項		
当該項目の重要度、困難度	—	関連する研究開発評価、政策評価・行政事業レビュー	令和7年度行政事業レビュー番号 予算事業 ID 001546、001547

2. 主要な経年データ									
評価対象となる指標	達成目標	基準値 (前中期目標期間最 終年度値等)	令和3年度	令和4年度	令和5年度	令和6年度	令和7年度	(参考情報) 当該年度までの累積値等、必要な 情報	
中期目標期間中、退職手当、特殊要因経費を除き、毎事業年度につき、対前年度比一般管理費1%以上の業務の効率化	対前年度比 △1%以上	—	△1.6%	△5.3%	△1.4%	△1.6%		効率化の算定対象が異なるため、 基準値を「-」としている。	
中期目標期間中、退職手当、特殊要因経費を除き、毎事業年度につき、対前年度比業務経費1%以上の業務の効率化	対前年度比 △1%以上	—	△1.2%	9.3%	△1.3%	△1.1%			

3. 中期目標期間の業務に係る目標、計画、業務実績、中期目標期間評価に係る自己評価及び主務大臣による評価

中期目標・中期計画			
主な評価指標等	法人の業務実績・自己評価		主務大臣による評価
	業務実績	自己評価	(見込評価)
<p>1. 業務改善及び業務の電子化の取組</p> <p><主な定量的指標></p> <ul style="list-style-type: none"> 退職手当、特殊要因経費を除き、対前年度比で一般管理費1%以上、業務経費1%以上の業務の効率化 <p><その他の指標></p> <ul style="list-style-type: none"> 事業の重点化、管理部門の簡素化等の取組により業務運営コストの縮減を図ったか。 	<p><主要な業務実績></p> <p>【効率化による経費縮減<定量的指標、その他の指標、評価の視点>】</p> <p>ア 管理経費1%以上、業務経費1%以上の業務の効率化</p> <p>予算管理の徹底を図るため、「研究活動」、「研修事業」、「情報普及活動」の業務ごと及び「一般管理費」に予算及び支出実績を管理する体制を構築し、四半期ごとに予算執行状況を把握するとともに、第3四半期に予算執行状況を踏まえたうえで、予算の有効活用を図るため補正予算の編成を行った。</p> <p>また、中期計画、年度計画に即した適切な執行に努めるとともに、所内に予算管理や経費削減等について通知し、周知を図り、業務運営コストの削減に努めた。これらの取り組みを通して、管理経費3%以上、業務経費1%以上の業務の効率化を図っている。</p>	<p><自己評価> A</p> <p>主な定量的指標、その他の指標において、いずれも所期の目標を上回る成果が得られたものと考え、A評価とした。所期の目標・指標を十分に達成している具体的な根拠は以下のとおりである。</p> <p><根拠></p> <p>予算編成方針に基づき予算の重点配分や補正予算の編成等を行うとともに、契約の見直しによる固定的経費の削減を行った。また、職員に対する予算状況の説明等の取組により、業務運営コストの縮減を図った。</p> <p>退職手当、特殊要因等控除後の効率化について、適宜予算管理体制の確立、運用を整備し、新型コロナ禍以前の活動強度への再開やウクライナ情勢による物価高騰のような要因を除き、目標達成に資する業務運営を図ってきた。</p>	<p>評価</p> <p>A</p> <p><評価に至った理由></p> <p>全体として中期目標に定められた以上の業務の進捗が認められるため。</p> <p>定量的指標を着実に達成し、概ね定量的指標の120%以上を達成しており、業務の効率化につながっていると認められる。</p> <p>他にも、契約の見直しによる固定的経費の削減、職員に対する予算状況の説明等による業務運営コストの縮減、退職手当・特殊要因等控除後の効率化等の予算管理体制の運用、ペーパーレス化の推進などにより、一定の業務効率化が図られたこと、及び、電子決裁の推進については、複数業者からヒアリングを行い、研究所の規模感に合ったシステムを選択し、費用対効果が見込めるシステムを導入したことなどは評価できる。</p> <p><指摘事項、業務運営上の課題及び改善方策></p> <ul style="list-style-type: none"> 業務運営の効率化、業務負担軽減の観点から、更なるDXを推進する必要がある。 <p><その他の事項></p> <p>【有識者からの意見】</p> <ul style="list-style-type: none"> 間接業務等の共同実施について、第5期においては、独立行政法人教職員支援機構(他3法人)における「物品の共同調達」、「間接事務の共同実施」、「職員研修の共同実施」などが一定なされており、その有効性が検証されている。第6期においても、

<p><その他の指標></p> <ul style="list-style-type: none"> ・業務の実施に当たっては、電子決裁の推進や、研修の案内や申し込みのオンライン利用の推進など、電子化できる業務の洗い出し及び取組の検討を行い、業務の効率化につなげたか。 <p><評価の視点></p> <ul style="list-style-type: none"> ・主務大臣からの指摘事項等への対応を行ったか。 	<p>イ 事業の効率化・運営化の取組</p> <p>中期目標に基づく中期計画及び年度計画等に定める業務を推進するため「予算編成方針」を策定し、当該方針に基づき予算編成を行い、事業の効率化・重点化を図った。</p> <p>また、「独立行政法人における調達等合理化の取組の推進について」(平成27年5月25日総務大臣決定)に基づき、毎年度研究所の調達等合理化計画を策定・公表し自己評価する取組を実施、調達等の合理化を推進し、業務運営の効率化を図った。</p> <p>ウ 業務の効率化及び電子化の取組等</p> <p>コロナ禍を経て、テレワーク勤務時でも決裁業務が滞らないようメールによる決裁を可能としたり各種手続きにおける押印の廃止などを進めることに加え、人的資源に限られる中、セミナー等の申込やアンケートの実施にアプリケーションを積極的に導入し、業務の柔軟な見直しによる業務の効率化・コスト削減を進めてきた。さらに、業務の効率化やペーパーレス化を一層進めるため、電子決裁システムの導入について検討し、令和6年度までに、複数業者からのヒアリングや使用感の確認を踏まえて検証し、導入によって生じるランニングコストと削減が見込まれる人件費、消耗品費等を比較検討した結果、導入することに決定した。併せて、紙媒体で管理している出勤簿等についてもシステム導入による電子化を図ることに決めた。いれも令和7年度内に本格導入する予定で準備を進めている。</p>	<p>当研究所は小規模な組織であるため、費用対効果の観点から必ずしもシステムの導入が必要ではない場合もあるが、人的コストを含め費用対効果を意識し、業務負担の軽減が見込めるアプリケーションの導入等を積極的に行うことで、有限である人的資源から最大限の成果を生み出すことにつなげた。特に、電子決裁の推進については、複数業者からヒアリングを行い使用感の検証も行ったことで、研究所の規模感にあったシステムを選択し、費用対効果が見込めるシステム導入の実現に至った。システム導入により業務の整理合理化が行えたことで、<u>研究所のミッションを着実に遂行するための適切な人的資源の配分につな</u>がった。加えて、ペーパーレス化による消耗品費の削減にもなった。</p>	<p>引き続き、可能な共同実施について検討し、効率的な予算運用に努める必要がある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・職員の給与水準の適正化については、第5期においては、事務・技術系職員、研究職員とも、適切な給与水準にすべく、対応が図られていることは評価すべきである。第6期においては、人事給与マネジメント改革の導入を検討して、中長期的に目指すべき理想の年代構成を検討する必要がある。また、もし未実施であるならば、業務実績評価に基づく「成果主義」を一定導入するなどの検討も必要と思われる。 ・経費については、その果たす役割から推察し妥当と考える。 ・契約の見直しによる固定的経費の削減、職員に対する予算状況の説明等による業務運営コストの縮減、退職手当・特殊要因等控除後の効率化等の予算管理体制の運用、ペーパーレス化の推進などにより、一定の業務効率化が図られていることを評価する。 ・今後は、従来の取組を検証しつつ、DX化の推進等により、更なる適正な業務の効率化、ガバナンス・コンプライアンスの徹底を期待する。
--	--	--	---

	<p><主務大臣指摘> (令和5年度実績評価時)</p> <p>電子決裁システムについて検討を進めているが、予算状況を考慮し、導入するメリットと将来的な費用負担等のデメリットを踏まえた上で導入の可否について検討し、決定する必要がある。</p>	<p><課題と対応></p> <p>今後、DX推進の観点から、業務の管理・運営に係る各システムの見直しを行うなど、生成AIなどの技術の進展も踏まえた更なる業務効率化を図っていくことが課題。</p>	
<p>2. 予算執行の効率化</p> <p><その他の指標></p> <p>・業務達成基準による収益化の原則に基づいた管理体制のもと、予算執行の効率化を進めたか。</p>	<p><主要な業務実績></p> <p>【予算執行の効率化について<その他の指標>】</p> <p>中期計画、年度計画に即した適切かつ効率的な執行と予算管理の徹底を図るため、四半期ごとの予算執行状況を把握するとともに、「予算の早期執行及び財務会計システムの運用について」を所内に通知して、予算の有効活用、早期執行等についての周知を徹底した。把握した予算の執行状況を踏まえて補正予算の編成を行い、効率的な予算執行に努めた。</p>	<p><根拠></p> <p>業務達成基準による収益化の原則に基づき、四半期ごとに予算執行状況を把握し、執行状況を踏まえた補正予算編成を行うことで、予算執行の効率化を図った。</p>	
<p>3. 間接業務等の共同実施</p> <p><その他の指標></p> <p>・効果的・効率的な業務運営のために間接業務等を共同で実施し、その取組を推進したか。</p>	<p><主要な業務実績></p> <p>【間接業務等の共同実施について<その他の指標>】</p> <p>「独立行政法人改革等に関する基本的な方針」(平成25年12月24日閣議決定)を踏まえ、当研究所、独立行政法人国立青少年教育振興機構、独立行政法人国立女性教育会館及び独立行政法人教職員支援機構の4法人で、「物品の共同調達」、「間接事務の共同実施」、「職員研修の共同実施」について費用対効果及び効率化等の検証を行いつつ、鋭意取組を推進してきておあり、今期においては、以下の取組を実施した。</p> <p>ア 物品の共同調達(6品目)</p>	<p><根拠></p> <p>職員研修については、4法人が共同で職員研修を実施することにより、単独実施では困難な研修や業務の効率化、経費の削減を図ることができた。</p>	

	<ul style="list-style-type: none"> ・ 蛍光灯【令和3～4年度】 ・ 事務用品（ドッチファイル等）【令和3年度～】 ・ 電気供給の調達に係る入札手続き【令和3年度～】 ・ 電子書籍【令和3年度～】 ・ 古紙溶解【令和3年度～】 ・ 非常食【令和3年度～】 <p>イ 間接事務の共同実施（4業務）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 予定価格作成に係る積算【令和3年度～】 ・ 会計事務等の内部監査【令和3年度～】 ・ 宿泊研修施設利用者の相互受入【令和3年度～】 ・ 国立大学法人等職員採用合同説明会の共同運営及び採用広報の相互協力【令和3年度～】 <p>ウ 職員研修の実施（6種）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 新規採用職員研修【令和3年度～】 ・ 独立行政法人制度（法律、評価、会計等）研修【令和4、6年度】 ・ 人事制度（労働法、ハラスメント防止、安全衛生管理）研修【令和3、5、7年度】 ・ 階層別研修【令和3、5、7年度】 ・ 専門研修／ダイバーシティ推進研修【令和4、6年度】 ・ 各法人主催の研修会やセミナーへの受講機会の相互提供【令和3年度～】 		
<p>4. 給与水準の適正化</p> <p><その他の指標></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 給与水準の適正化を図ったか。 	<p><主要な業務実績></p> <p>【給与水準の適正化について<その他の指標>】</p> <p>役職員の給与規程は、国家公務員を対象とした「一般職の職員の給与に関する法律（昭和25年法律第95号）」</p>	<p><根拠></p> <p>役職員の給与は、「一般職の職員の給与に関する法律」に準拠し、国家公務員の給与水準</p>	

	<p>に準拠している。また、役職員の給与水準については、主務大臣より「給与水準の比較指標では国家公務員の水準未満となっていること等から給与水準は適正であると考える。引き続き適正な給与水準の維持に努めていただきたい。」との検証結果を得ており、毎年度、当研究所ウェブサイトで公表している。</p> <p>総人件費については、対前年度比で令和4年度9.3%減、令和5年度5.2%減となっており、主な要因は退職者不補充等による職員数の減少や退職手当の支給額の減少による。令和6年度は対前年比9.5%の増となったが、改正給与法に準拠した給与規程の改正等による給与支給額の増加、職員数の増加及び退職手当支給額の増加等によるものである。</p> <p>○国家公務員と比較した給与水準（国家公務員を100とした場合、年齢勘案）</p> <table border="1" data-bbox="524 820 1057 1082"> <thead> <tr> <th></th> <th>事務・技術職員 (行政職(一))</th> <th>研究職員 (研究職)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>令和3年度</td> <td>90.1</td> <td>88.1</td> </tr> <tr> <td>令和4年度</td> <td>85.9</td> <td>88.4</td> </tr> <tr> <td>令和5年度</td> <td>88.6</td> <td>85.6</td> </tr> <tr> <td>令和6年度</td> <td>84.7</td> <td>87.3</td> </tr> </tbody> </table>		事務・技術職員 (行政職(一))	研究職員 (研究職)	令和3年度	90.1	88.1	令和4年度	85.9	88.4	令和5年度	88.6	85.6	令和6年度	84.7	87.3	<p>未満となっており、主務大臣より「当該法人は、国家公務員の給与及び他の独立行政法人の給与等を総合的に勘案したうえで、職員の給与水準を設定しており、法人における給与水準の妥当性の検証結果から、適切な対応が執られていると考える。引き続き、適切な給与水準の設定に努めていただきたい。」との検証結果を得ることができた。</p>	
	事務・技術職員 (行政職(一))	研究職員 (研究職)																
令和3年度	90.1	88.1																
令和4年度	85.9	88.4																
令和5年度	88.6	85.6																
令和6年度	84.7	87.3																

4. その他参考情報
特になし。

1. 当事務及び事業に関する基本情報			
III-1	財務内容の改善に関する事項		
当該項目の重要度、困難度	—	関連する研究開発評価、政策評価・行政事業レビュー	令和7年度行政事業レビュー番号 予算事業 ID 001546、001547

2. 主要な経年データ									
	評価対象となる指標	達成目標	基準値 (前中期目標期間最 終年度値等)	令和3年度	令和4年度	令和5年度	令和6年度	令和7年度	(参考情報) 当該年度までの累積値等、必要な 情報

3. 中期目標期間の業務に係る目標、計画、業務実績、中期目標期間評価に係る自己評価及び主務大臣による評価				
中期目標・中期計画				
主な評価指標等	法人の業務実績・自己評価		主務大臣による評価	
	業務実績	自己評価	(見込評価)	
<p>1. 自己収入の確保</p> <p><その他の指標></p> <ul style="list-style-type: none"> 積極的に競争的資金等の外部資金導入を図ったか。また、受益者負担の適正化や他の独立行政法人の状況を踏まえながら、自己収入の確保を図ったか。 <p><評価の視点></p> <ul style="list-style-type: none"> 主務大臣からの指摘事項等への対応を行ったか。 	<p><主要な業務実績></p> <p>【外部資金の獲得】</p> <p>研究所では、主務大臣の指摘も踏まえ、外部資金等の獲得に努めてきた。具体的には、競争的資金の獲得に向けた取組として、国立大学教員として長年勤務経験がありかつ豊富な研究業績を有する国立大学名誉教授を参与として招聘し、競争的資金への申請を予定している研究職員に対して、同参与による研究内容や申請内容に関する個別懇談等を開催した。また、「外部競争的資金への申請に向けた準備に資する経費」を設け、研究職員の外部資金獲得を支援したほか、研究力の向上に向けた取組として、同参与や他大学等の各分野に詳しい教授等を講師として招聘し、毎年1～2回所内セミナーを開催することで、研究職員の専門性、研究力の向上、人材の育成に寄与するとともに、研究職員の研究活動の活性化を図った。</p>	<p><自己評価> B</p> <p>その他の指標において所期の目標を達成しているものと考えことから、B評価とした。所期の目標を達成している具体的な根拠は以下のとおりである。</p> <p><根拠></p> <p>令和5年度事業評価時の<u>主務大臣指摘事項(左記)を受けて、令和6年度には、新たに株式会社デジリハと受託契約を結び肢体不自由のある子供の身体性の向上に資するデジタルツールの活用に関する受託研究を開始したところである。</u></p> <p>また、科研費については、新型コロナウイルスの影響がありつつも、参与との懇談機会の確保や研究力向上のための所内セミナーの開催等の取組により、<u>一定の実施件数を維持することができた。</u>特に、参与からの指導助言を得ながら、<u>個人研究だけではなく研究班としての申請・獲得に至った点は、今後の自己収入の拡大にもつながる大きな成果であった。</u></p>	<p>評価</p> <p>B</p>	<p><評価に至った理由></p> <p>中期目標に定められたとおり、概ね着実に業務が実施されたと認められるため。</p> <p><指摘事項、業務運営上の課題及び改善方策></p> <ul style="list-style-type: none"> 受託事業による外部資金及び科研費等の獲得による自己収入の拡大を図るため、引き続き、積極的な取組が必要である。 <p><その他の事項></p> <p>【有識者からの意見】</p> <ul style="list-style-type: none"> 保有財産については現状保有が適切であるということであるが、社会経済情勢の変化等に対応しつつ、安定した法人運営に取り組むため、遊休財産の保有の有無について定期的な確認が必要と思われる。

＜主務大臣指摘＞（令和5年度実績評価時）

受託事業による外部資金及び科研費等の獲得による自己収入の拡大を図るため、今後さらなる積極的な取組が必要である。

こうした取組の結果、以下のような研究費の獲得につながった。

（ア） 科研費以外の外部資金研究

ファーストリテイリング財団からの受託研究をはじめ、第5期期間中に8件（令和6年度時点）を実施した。

民間による研究助成の獲得の他、少額であるが厚生労働科学研究費補助金等も獲得している。

資金名	金額	研究課題名
ファーストリテイリング財団（令和元～6年度）	5,000 千円 （毎年）	盲ろう幼児児童生徒の支援体制整備に関わる研究
ソフトバンク株式会社（令和2～3年度）	220 千円 （令和3年度）	魔法のプロジェクトを通じた特別支援教育のICT活用研究
海外子女教育振興財団（令和3年度）	3,253 千円	在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業（AG5）
国立病院機構東京国際医療センター（令和2～4年度）	150 千円（令和3年度） 100 千円（令和4年度）	先天性および若年性の視覚聴覚二重障害の難病に対する医療および移行期医療支援に関する研究
国立病院機構東京国際医療センター（令和2～4年度）	140 千円（令和3年度） 100 千円（令和4年度）	先天性および若年発症の聴覚・視覚重複障害者の実態解明と社会的支援の確立（分担研究開発課題名：実態解明と社会的支援方法の確立）

・研究所の研究が学校での特別支援教育だけでなく、医療での支援や社会福祉にも貢献しており、独立行政法人としての役割を果たしていると考えます。

・令和6年度には、新たに株式会社デジリハと受託契約を結び肢体不自由のある子供の身体性の向上に資するデジタルツールの活用に関する受託研究を開始して自己収入の拡大の兆しが見えるとともに、科研費についても、参与との懇談機会の確保や研究力向上のための所内セミナーの開催等の取組により、一定の実施件数を維持することができた点は評価できる。

・ファーストリテイリング財団からの受託研究をはじめ、第5期期間中に8件を実施していることを評価し、受託の継続に向けた取組を期待する。

・所在地である横須賀市と協定を結び、災害時に救援物資集積拠点並びに地域医療救護所として活用できる体制を構築した点を適切な地域貢献として評価する。

公益財団法人森村豊明会（令和3～4年度）	1,550 千円 （令和3～4年度）	盲ろう児の生活における工夫を提示する生活支援研究棟の情報機器端末等の整備事業
国立病院機構東京国際医療センター（令和5～7年度）	70 千円(令和5年度) 50 千円(令和6年度)	先天性および若年性の視覚聴覚二重障害の難病に対する医療および移行期医療支援に関する研究
株式会社デジリハ（令和6～8年度）	240 千円	特別支援教育における身体性の向上に資するデジタル機器の活用に関する研究

(イ) 科研費

科研費の状況について、実施件数は以下のとおりであり、ほぼ横ばいで合った。

	令和3 年度	令和4 年度	令和5 年度	令和6 年度
実施件数	29 件	25 件	25 件	24 件

令和6年度実施課題までを対象とした、新型コロナウイルスによる研究課題の延長措置があったため、新規の申請件数が少ない状況にあったが、令和6年度には申請数、採択数、採択率及び交付額ともに令和5年度から向上した。さらに、令和7年度には、個人研究だけでなく、研究所の研究班として申請した課題も採択されたところであり、科研費等の獲得に向けた所内の取組が実を結んできている。

イ 寄付・基金による自己収入

障害のある子供の教育のより一層の振興を図るため、令和2年度に NISE 基金を開設し、広く国民からの寄附を募

NISE 基金についてホームページによる周知に加え、研究所の紹介や主催行事の機会をとらえて積極的に広報を行った結果、寄附件

	<p>り、随時受け入れている。令和3年度から令和6年度の間、合計で40件、17,234,242円の寄附を受け入れた。一層の自己収入増につなげるため、令和6年度に、所内設置の自動販売機の売上金の一部をNISE基金への寄附に充てられるように契約の見直しを行ったことに加え、令和7年度には、返礼品の見直しや寄附手続きの簡略化に向けた検討を進めているところ。</p> <table border="1" data-bbox="526 435 1064 651"> <thead> <tr> <th></th> <th>令和3年度</th> <th>令和4年度</th> <th>令和5年度</th> <th>令和6年度</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>件数</td> <td>10件</td> <td>6件</td> <td>8件</td> <td>16件</td> </tr> <tr> <td>金額</td> <td>15,291千円</td> <td>238千円</td> <td>462千円</td> <td>1,111千円</td> </tr> </tbody> </table>		令和3年度	令和4年度	令和5年度	令和6年度	件数	10件	6件	8件	16件	金額	15,291千円	238千円	462千円	1,111千円	<p><u>数、金額ともに増加傾向にあり、第5期を通じて多くの寄附を受け入れることができた。</u></p>	
	令和3年度	令和4年度	令和5年度	令和6年度														
件数	10件	6件	8件	16件														
金額	15,291千円	238千円	462千円	1,111千円														
<p>2. 体育館及びグラウンドの外部利用の促進</p> <p><その他の指標></p> <p>・障害者スポーツでの利用を含め広く外部利用を促進するために、各種団体などへ幅広い広報を行い、取組を推進したか。</p>	<p><主要な業務実績></p> <p>【体育館及びグラウンドの外部利用促進<その他の指標>】</p> <p>ア 幅広い広報の実施</p> <p>体育施設については、継続して研究所要覧やNISEパンフレットに体育施設の利用案内を掲載し、広く周知したほか、更なる施設利用促進のため、ホームページのリニューアル及びチラシデザインの刷新を行った。</p> <p>具体的に、ホームページでは、各施設の個別のページを作成し、設備の写真や利用案内リーフレットを見やすく改善するとともに、横須賀市の体育施設のホームページとの相互リンクを設けて周知の強化を図った。</p> <p>また、チラシについては、施設の特徴や利用方法がより伝わりやすくなるようデザインを工夫するとともに、研究所公開や横須賀市教育研究所による教員研修、近隣の町内</p>	<p><根拠></p> <p>体育施設については、<u>ホームページやチラシをリニューアルしたり、横須賀市と連携して広報を強化したりするなど、施設利用促進のための取組を行った。</u></p> <p>さらに、施設の有効活用策として、新たに所在地である横須賀市と協定を結び、<u>災害時に救援物資集積拠点並びに地域医療救護所として活用できる体制を構築した。</u>全国各所で様々な自然災害が発生している昨今の現状を踏まえれば、<u>非常時に地域の担い手の一つの機関として地域に貢献することは重要であり、そのための体制整備ができたことの意味は大きい。</u></p>																

	<p>会や放課後等デイサービス等で配布し、周辺地域を中心に広報を行った。なお、体育館については、研究所公開において、体育館に障害種別研究班の紹介ブースを設置したり、パラスポーツの「ボッチャ」など、障害者スポーツの体験会を実施したりするなどし、実際に利用してもらうことを通して広報を行った。</p> <p>イ 災害時における横須賀市への施設の提供</p> <p>施設の外部利用の一環として、令和6年度に横須賀市との協定を結び、災害発生時に災害救援物資集積拠点並びに地域医療救護所として災害時に活用できる体制を構築した。</p>		
<p>3. 保有財産の見直し</p> <p><その他の指標></p> <p>・保有の必要性について不断の見直しを行ったか。</p>	<p><主要な業務実績></p> <p>【保有財産の見直しについて】</p> <p>保有財産については、研究・研修事業等に活用されており、保有の必要があると判断した。保有財産の使用状況については、施設利用状況実態調査の実施や、所内の財務・施設委員会の定期開催・審議を通して、有効利用の促進に努めている。</p> <p>また、当研究所、独立行政法人青少年教育振興機構、独立行政法人国立女性教育会館及び独立行政法人教職員支援機構の4法人のホームページに相互リンクを貼り、4法人間における施設の利用促進を図った。</p>	<p><根拠></p> <p>保有財産については、研究・研修事業等に活用されていることを確認し、<u>保有の必要があると判断している。</u></p>	

<p>IV 予算、収支計画及び資金計画</p> <p>1. 中期計画予算</p> <p>2. 令和3～7年度収支計画</p> <p>3. 令和3～7年度資金計画</p> <p>V 短期借入金の限度額</p> <p>VI 剰余金の使途</p>	<p><主要な業務実績></p> <p>1. 中期計画予算 第5期中期目標期間見込評価用事業報告書 P59 参照</p> <p>2. 令和3～7年度収支計画 第5期中期目標期間見込評価用事業報告書 P60 参照</p> <p>3. 令和3～7年度資金計画 第5期中期目標期間見込評価用事業報告書 P61 参照</p> <p>V 短期借入金の限度額 該当なし</p> <p>VI 剰余金の使途 該当なし</p>		
--	--	--	--

<p>4. その他参考情報</p>
<p>特になし。</p>

1. 当事務及び事業に関する基本情報			
IV-1	その他業務運営に関する重要事項		
当該項目の重要度、困難度	<p>【重要度：高】【困難度：高】</p> <p>令和3年度に、科技イノベ活性化法上の研究開発法人となることから、研究の多様性の確保に努め、大学・関係機関等と連携しながら先端的な研究を推進することが必要であり、重要度は高い。また、新たに連携を進めていくことになるため、困難度は高い。</p>	<p>関連する研究開発評価、政策評価・行政事業レビュー</p>	<p>令和7年度行政事業レビュー番号 予算事業ID 001546、001547</p>

2. 主要な経年データ								
評価対象となる指標	達成目標	基準値 (前中期目標期間最終年度値等)	令和3年度	令和4年度	令和5年度	令和6年度	令和7年度	(参考情報) 当該年度までの累積値等、必要な情報
共同研究の実施件数	中期目標期間中に1以上	—	0	0	2件（3機関）	3件（3機関）		

3. 中期目標期間の業務に係る目標、計画、業務実績、中期目標期間評価に係る自己評価及び主務大臣による評価					
中期目標・中期計画					
主な評価指標等	法人の業務実績・自己評価		主務大臣による評価		
	業務実績	自己評価	(見込評価)		
<p>1. 内部統制の充実</p> <p><その他の指標></p> <ul style="list-style-type: none"> 内部統制システムを充実・強化を行ったか。 <p><評価の視点></p> <ul style="list-style-type: none"> 主務大臣からの指摘事項等への対応を行ったか。 	<p><主要な業務実績></p> <p>【内部統制の充実<その他の指標、評価の視点>】</p> <p>理事長のリーダーシップに基づく自主的・戦略的な組織運営、適切なガバナンスにより、法人の政策実施機能の最大化を図るため、内部統制の充実・強化を図った。</p> <p>具体的には、以下のとおりである。</p> <p>ア リスク対応計画（アクションプラン）の作成</p> <p>理事長が委員長を務める内部統制委員会において、各年度、年度計画を遂行する上でのリスクを洗い出し、それへの対応を作成したアクションプランを作成するとともに、アクションプランが適切に機能しているかを確認するためのモニタリングを実施した。</p> <p>イ 理事長の指示等の情報伝達</p> <p>理事長が主宰する月2回の総合調整会議において各部・センターへの情報の共有・伝達に努めた。また、掲示板システムを備えた情報システムを活用し、全職員へ</p>	<p><自己評価> A</p> <p>主な定量的指標、その他の指標において、いずれも所期の目標を上回る成果が得られたものと考え、A評価とした。所期の目標・指標を十分に達成している具体的な根拠は以下のとおりである。</p> <p><根拠></p> <p>左記の業務実績にある取組を行うことにより、<u>内部統制の仕組みが機能した組織運営及び業務運営を行った。</u></p> <p>さらに、令和4年度の<u>有識者からの意見</u>である「<u>内部統制システムの充実・強化が図られているとの自己評価を、今後も継続強化することを期待する</u>」を踏まえ、<u>内部統制システムの流れに、監事による確認を追加することとし、内部統制の一層の強化を図った。</u></p>	<table border="1"> <tr> <td>評価</td> <td>A</td> </tr> </table> <p><評価に至った理由></p> <p>全体として中期目標に定められた以上の業務の進捗が認められるため。</p> <p>定量的指標を着実に達成し、定量的指標の120%以上を達成しており、研究内容の質的向上に寄与した点は評価できる。</p> <p>他にも、教育委員会・大学・関係機関との連携や共同研究を通じて、研究所が有する専門性以外の知見を取り入れ研究活動の充実を図ったこと、内部統制システムの過程に、監事による確認を追加することによる内部統制の強化をはかったこと、及び、研究データの活用のための仕組みの整備として、国立情報学研究所（NII）が運用する「NII Research Data Cloud」を利用した研究成果リポジトリの整備を進め、運用を開始した点などは評価できる。</p> <p><指摘事項、業務運営上の課題及び改善方策></p> <ul style="list-style-type: none"> 情報セキュリティ水準の維持・強化並びに職員の情報セキュリティに対する意識及び能力の向上を図ることは重要であるが、情報セキュリティ上のインシデントが発生した場合は、組織として迅速に対応すべきである。 引き続き、自治体、教育機関、民間企業、福祉機関、医療機関等の多様な機関との組織的かつ継続的な連携によるさらな 	評価	A
評価	A				

	<p>の情報伝達を徹底した。</p> <p>ウ 定期的な内部監査の実施及び結果の業務への反映</p> <p>毎年度、内部監査及び監事監査を行い、監査後は監査結果を理事長へ迅速に報告し、理事長は監査結果を基に各部署に必要な指示を行った。定期的な監事監査を行い、その結果を業務に反映させた。</p>		<p>る協力関係の構築及び外部資金の獲得等も視野に入れた共同研究の推進が必要である。また、自治体であれば首長部局の福祉部門等、関係団体であれば地域福祉、障害児、障害者福祉団体など、より幅広い部門と連携を期待する。</p> <p>・次期中期目標期間においては、限られたリソースの中で、研究職員が研究活動や研修活動に注力できるようにするとともに、研究所の活動に関する企画運営や組織運営、広報等の機能強化を図るため、これまで以上に機動的な業務運営が可能となる組織体制の見直しを図るとともに、研究職員と事務職員の役割分担についても、適切に見直しを図ること。</p> <p><その他の事項></p> <p>【有識者からの意見】</p> <p>・報告から推察するに、研究所では内部統制システムが機能していると考えられる。</p>
<p>2. 研究データの管理・活用</p> <p><その他の指標></p> <p>・組織的な体制・環境の整備を行ったか。</p>	<p><主要な業務実績></p> <p>【研究データの管理・活用について<その他の指標>】</p> <p>ア 制度・技術両面による環境整備</p> <p>統合イノベーション戦略 2021（令和3年6月18日閣議決定）及び科学技術・イノベーション基本計画（令和3年3月26日閣議決定）に基づき、当研究所におけるオープン・アンド・クローズ戦略に基づいた研究データの管理・利活用の促進を図るために、令和3年度～4年度の期間で設置された「研究データ管理・活用WG」における課題の整理・検討を踏まえ、令和6年度からの実施に</p>	<p><根拠></p> <p>これまでに<u>組織的な管理体制の構築及び研究データの管理・活用のための基盤を整備したことで、令和7年度からの運用開始の目途がたったところである。</u>このことは、<u>特別支援教育の振興・発展に寄与していくものである。</u></p>	<p><その他の事項></p> <p>【有識者からの意見】</p> <p>・研究データの活用のための仕組みの整備として、国立情報学研究所（NII）が運用する「NII Research Data Cloud」を利用した研究成果リポジトリの整備を進め令和6年8月に運用を開始した点を評価する。</p>

向けた制度・技術両面の環境整備を進めた。

イ 研究データの管理基本方針等の策定

当研究所が保有する研究データの特性を踏まえた「研究データの取扱いに関する基本方針（データポリシー）」及び「データポリシーにおける管理対象データの研究所の基準等及び公開・共有データの研究所の方針」を令和4年度に策定した。これに則った具体的な運用を進めるために、科学技術・イノベーション推進事務局による「公的資金による研究データの管理・利活用に関するメタデータ説明書第1.0版」及び国立国会図書館サーチによる「メタデータ流通ガイドライン」を基にメタデータ項目の選定を進めた。

ウ 研究データの活用のための仕組みの整備

国立情報学研究所(NII)が運用する「NII Research Data Cloud」を利用した研究成果リポジトリの整備を進め令和6年8月に運用を開始した。

運用を開始するまでには、研究成果リポジトリの運用方針やオープンアクセスポリシー策定の他、インターネットを介して著作物を公開することに関連する要項の改正等を行い制度面の整備を行うとともに、研究成果リポジトリのコンテンツ管理機能や検索機能を整備することで研究成果を検索しやすいインデックス構成やメタデータ構成とすることにより、利用者が著作物にアクセスしやすい仕組みを整えた。また、職員向けに研究成果リポジトリを活用し各種の著作物や研究データを公開するための登録手順等の説明会を実施し研究成果リポジトリの利用を継続的に推進するための取組を行った。

	<p>なお、令和7年度に、研究成果リポジトリへ研究成果の登録を進めるとともに、障害種や研究テーマ別にインデックスを割り当てることにより利用者が求めている情報及び付加情報を検索できるように、利便性の向上を図る予定である。</p>		
<p>3. 情報セキュリティの対策の推進</p> <p><その他の指標></p> <ul style="list-style-type: none"> ・情報セキュリティ対策を厳格に実施したか。 	<p><主要な業務実績></p> <p>【情報セキュリティの対策の推進<その他指標>】</p> <p>ア 所内情報システムのセキュリティ対策</p> <p>「政府機関等のサイバーセキュリティ対策のための統一基準群」の改正とともに、令和3年度には、業務委託に係る規定、持込パソコンについての安全管理措置要項及びWeb 会議サービスの利用手順の見直し、テレワークに係る情報機器のアップデート等の対策を行った。令和5年度には、クラウドサービスの利用やWeb 会議サービス利用時の対策の強化、情報システムのライフサイクル各段階においてセキュリティ対策で留意すべき点を追記するなどの情報セキュリティポリシー見直しを行ったことに加えて、令和5年12月の情報基盤システム更新において、RADIUS サーバ導入による認証機能の強化、ファイアウォールに加えてIDS/IPSを有するUTM装置導入によるゲートウェイセキュリティ機能の強化、Microsoft Defender 導入によるエンドポイントプロテクション機能の強化等、情報セキュリティポリシーに基づく情報セキュリティ水準の一層の強化を図り、引き続きそれらを維持している。</p> <p>イ 外部機関による監査への対応</p>	<p><根拠></p> <p>情報セキュリティ水準の維持及び情報セキュリティに関する職員の意識向上を図った結果、業務に影響を及ぼすようなインシデントは1件も発生しなかった。</p>	<p><その他の事項></p> <p>【有識者からの意見】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究所業務の円滑な実施及び施設の長寿命化については、計画どおり、施設・設備の整備を行うことができたとされており、情報セキュリティ水準の維持及び情報セキュリティに関する職員の意識向上を図った結果、業務に影響を及ぼすようなインシデントは1件も発生しなかったとあり、この期間の成果を評価できる。

	<p>令和4年度に実施された外部機関による監査のマネジメント監査・ペネトレーションテストそれぞれの指摘事項に対して、外部機関が令和5年1月に実施した「サイバーセキュリティに関する対策の基準に基づく監査のフォローアップ」において、<u>改善計画に基づく情報セキュリティ対策の維持・強化に努めていることが確認された</u>。引き続き、情報セキュリティ水準を満たす取組を継続している。</p> <p>ウ 情報セキュリティに関する職員の意識向上</p> <p>新規職員採用研修において情報セキュリティについての研修を行ったり、全職員を対象とする情報セキュリティ説明会を開催したりすることにより、情報の格付けの周知や不審なメールへの注意喚起を行った。また、毎年度、役職員に対する標的型攻撃メール訓練を2回実施し、情報セキュリティに関する意識及び能力の向上を図った。</p> <p>このほか、PCのOSのサポート終了等についての最新の情報を周知することにより、情報セキュリティへの職員の意識向上を図った。</p> <p>エ 情報セキュリティ担当職員の資質向上</p> <p>NISC主催の勉強会及びCSIRT研修に情報セキュリティ担当職員を参加させ、情報セキュリティに関する最新の情報収集及び資質の向上を図った。</p>		
--	--	--	--

<p>4. 大学・関係機関等との連携</p> <p><主な定量的指標></p> <ul style="list-style-type: none"> ・中期目標期間中に共同研究の実施、少なくとも1件以上 	<p><主要な業務実績></p> <p>重要度：高、困難度：高</p> <p>【共同研究の実施<定量的指標>】</p> <p>組織的かつ継続的な連携の一環で、以下のとおり令和5～6年度において、<u>2件、3機関</u>と共同研究を実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「知的障害のある児童生徒に対する系統的なプログラミング教育推進のための先導的研究」 <p>実施年：令和5～6年度</p> <p>共同先：株式会社 e-Craft</p> <p>特別支援学校における実践を通して、知的障害のある児童生徒のための系統的なプログラミング教育の在り方について研究した。プログラミング教材を開発している大手通信会社との共同研究が実現したことで、具体的なツールを活用した実践及びその結果のフィードバックや課題等に関する具体的な協議が可能となり、プログラミング教材について、知的障害のある児童生徒にも活用しやすいインターフェースやツールの改善と活用方法について成果を上げることができた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「肢体不自由教育における ICT 活用に関する研究」 <p>実施年：令和5～7年度</p> <p>共同先：国立大学法人広島大学、国立高等専門学校機構</p> <p>肢体不自由の障害特性を踏まえながら学習指導要領に示される資質・能力の育成を目指した ICT 機器を活用した各教科等における授業に焦点をあて、事例研究を通して、効果的な指導方法や教材教具の活用、そ</p>	<p><根拠></p> <p>組織的かつ継続的な連携の一環で、以下のとおり令和5年度に続き、<u>2件、3機関</u>（<u>目標値に対して200%</u>）と共同研究を実施した。</p> <p>左記のとおり、両研究とも、他の機関と共同して取り組み、<u>研究所では十分に持ち合わせていない知見を得られることで、研究の幅の広がりや内容の一層の充実につながった</u>と考えている。</p> <p>加えて、知的障害のプログラミング教育は実践事例が十分に蓄積されておらず、また市場規模が小さいために民間事業者の参入が難しい現状にあることや、文部科学省が GIGA スクール構想によって整備されたデジタル学習基盤を前提とした、より質の高い、深い学びの実現を目指している現状を踏まえれば、<u>各研究課題は、学校現場の喫緊の課題の解決及び国の施策の推進に寄与するものであり、その研究成果は、現場が抱えている課題へ大きく貢献するものである。</u></p>	<p><その他の事項></p> <p>【有識者からの意見】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・横浜市教育委員会が、横浜市立高校のうちの1校を、「自校通級」などの支援を充実させ、発達障害児を積極的に受け入れる方針を示しましたことは研究所との連携による成果ではないかと思う。上記のような横浜市教育委員会の取組を踏まえ、さらに研究所による支援を強化することで、後期中等教育における発達障害の生徒への学習指導、進路選定についての知見と支援の在り方を研究いただき、子供たちの豊かな成長につながる教育方法について検討していただくことを期待する。高等学校教員の中に特別支援教育に関する関心が広がっていかないという現状が指摘されており、就業に直結する後期中等教育段階の発達障害児支援について当事者・家族のニーズは高いため、高等学校での実践を通じた研究のさらなる発展に期待する。 ・令和5年度から2ケ年間、横須賀テレコムリサーチパークに所在する株式会社 e-Craft とプログラミング教材について、知的障害のある児童生徒にも活用しやすいインターフェースやツールの改善と活用方法について共同研究を実施した事例など、民間企業との連携の拡充を期待する。 ・今期は連携協定に基づく広島大学及び国立高等専門学校に加えて、新たに神奈川歯科大学等との連携に向けた協議を進めている、複合障害などの研究の深化に向けて有用な連携であり、今後の進展を期待する。
--	--	---	---

<p><その他の指標></p> <ul style="list-style-type: none"> ・久里浜特別支援学校をはじめ特別支援学校等と連携し、障害のある子供の教育に関する実際の・総合的な教育研究の推進を図ったか。 ・共同研究の実施や外部資金の共同での獲得等を視野に入れ、研究活動を中心とした組織的かつ継続的な連携を大学や民間企業等と実施したか。 <p><評価の視点></p> <ul style="list-style-type: none"> ・主務大臣からの指摘事項等への対応を行ったか。 	<p>れを支える教員研修等について、地方自治体や教育現場の取組に役立つ知見をまとめる。連携協定を締結している広島大学及び国立高等専門学校機構の研究者と共同で研究を進められたことで、教職課程を有する大学としての知見や工学分野の知見を取り入れながら研究を進めることができた。</p> <p>重要度：高、困難度：高</p> <p>【大学・関係機関との連携】</p> <p>ア 筑波大学附属久里浜特別支援学校との連携</p> <p>(ア) 協定に基づく連携</p> <p>筑波大学附属久里浜特別支援学校とは「教育研究協力に関する協定書」を平成 16 年に締結し、相互の連携による教育研究交流を通して、障害のある子供の教育に関する実際の・総合的な教育研究の推進を図ることとしている。また、平成 24 年には、「防災及び災害応急対策活動等の相互協力・応援に関する協定書」を締結し、相互に防災上の協力を行うとともに、被災した場合には相互に応援することにより、防災及び応急対策活動等の万全を期すこととしている。</p> <p>(イ) 教育研究及び研修における連携</p> <p>教育研究としては、聴覚班による聴力測定の見学、意見交換、聴力検査・事前指導に関わる意見交換、聞き取り調査等、自閉症班及び幼児班による授業参観や授業研究会での助言等、先端的・先導的研究チームによるプログラミング教材を活用した授業実践と情報提供等を実施し、双方連携しながら活動を進めた。</p>	<p>協定書に基づき、筑波大学附属久里浜特別支援学校とは、研究職員による指導助言や連絡会議の開催による定期的な連絡調整、行事参加等による交流など、日頃からの連携・交流体制を継続できた。こうした関係性のもと、国内外からの視察受入れ時の対応協力や専門研修における実地研修の実施が実現しており、<u>特別支援教育の充実や理解啓発の促進に向けて連携・協力して貢献することができた。</u></p>	
---	--	--	--

	<p>また、当研究所が行う特別支援教育専門研修の 実地研修先として久里浜特別支援学校を設定し、研 修を実施した。</p> <p>(ウ) その他連携</p> <p>双方の役職員を構成員とする連絡会議を設け、定 期的に運営等の課題について連絡調整を図ったほ か、久里浜特別支援学校が実施する防災訓練や運動 会等の行事に研究所職員が参加するなど、日常的に 連携・交流を行った。特に事務職員にとって、障害 のある幼児児童との交流は、業務への意識向上や特 別支援教育の現場を知る有意義な機会となった。</p> <p>また、国内外からの視察受け入れの際にも協力を して対応しており、特別支援教育に係る研究や研修の 現状についての説明と併せて学校現場の実際の様子 も見ていただくことで、より深い理解につなげてい る。</p> <p>イ 教育委員会との連携</p> <p>(ア) 神奈川県教育委員会との連携</p> <p>令和3年10月に神奈川県の公立学校における特 別支援教育の充実及び特別支援教育に係る国の政策 立案・施策の推進に寄与することを目的に「神奈川 県教育委員会と独立行政法人国立特別支援教育総合 研究所の連携・協力協定」を締結した。</p> <p>また、円滑な連携・協力を資することを目的とし て連携・協力推進会議を設置するとともに、同会議 の下に研究部会と研修部会を置き、協定締結の趣旨 を着実に進めていくための体制を整備した。</p> <p>連携・協力推進会議と両部会は令和4年度から6</p>	<p>近隣自治体である、神奈川県及び横浜市と 連携協定を締結し、それに基づいて、<u>学校現 場の声を反映し、かつ、実践を伴った実際の な研究の実施や、実地研修の受入れによるラ ボ型研修の充実につなげられたことは非常に 有意義であった。</u></p> <p>また、研究職員の講師派遣等を通して、教 育委員会を支援し、<u>教員の専門性の向上に寄 与することができたこと</u>に加えて、研究所の コンテンツについて、<u>ユーザー目線でのフィ ードバックももらえることで、今後のコンテ ンツ作りや情報発信の改善・強化につながる 成果を得ることができた。</u></p>	
--	--	--	--

	<p>年度まで、毎年度2回ずつ開催しており、①県立特別支援学校等と当研究所が協働して行う調査研究活動、②特別支援教育に係る専門性の向上を図る取組、③当研究所の研究成果物等の活用方法等について意見交換を行った。</p> <p>実際の活動に当たっては、研究活動に関しては、担当研究チーム・班と研究協力校等で連携の在り方に関する協議を重ねたほか、研究の参考とするため、研究職員が学校や教育環境の現状及び課題について聴取したり授業参観に出向いたりした。また、研修に関しては、県内の特別支援学校及び小・中学校等の教員の自己研修や校内研修に、研究所のコンテンツである「学びラボ」や「特別支援教育リーフレット」等を役立てていただくための活用促進方法等について意見交換を行ったほか、県教育委員会と県立総合教育センターが行う研修会や会議に研究職員を講師として派遣し、教員の専門性の向上に資する活動を行った。</p> <p>(イ) 横浜市教育委員会との連携</p> <p>令和4年7月、横浜市教育委員会と、市立の小・中・高等学校等及び特別支援学校における特別支援教育の充実及び特別支援教育に係る国の政策立案・施策の推進に寄与することを目的として連携・協力協定を締結した。横浜市は当研究所と比較的近い地域に小中学校等を多く設置している自治体である。</p> <p>協定を締結後、当研究所が取り組む重点課題研究、障害種別特定研究、テーマ別研究及び障害種別研究において、教育委員会及び学校には研究協力機関として、また、指導主事や教員に研究協力者として参</p>		
--	---	--	--

	<p>画いただき、研究の推進に協力いただいた。</p> <p>また、当研究所の専門研修の実施に際して、教育委員会の指導主事等に講師として登壇いただいたり、市立学校に実地研修を受け入れていただいた一方で、当研究所の研究職員が、市立学校や特別支援教育関係の研究会に講師として出向いたり、学校での支援・助言活動を行うなど、双方の活動に連携・協力して取り組んだ。</p> <p>(ウ) 全国特別支援教育センター協議会</p> <p>研究所は、各地の都道府県・政令指定都市立教育センターが加盟する全国特別支援教育センター協議会(令和7年4月1日現在で64機関が加盟)の事務局を担っている。</p> <p>毎年、全国特別支援教育センター協議会総会及び研究協議会を開催しており、こうした機会を活用して、当研究所が実施する研究や事業の説明・周知を行った。</p> <p>また、今期の新たな取組として、加盟機関間の情報交換や交流等を一層促進するため、メーリングリストの整備・活用を提案し、加盟機関の了承のもと、運用を始めた。このメーリングリストを活用し、当研究所からは各種セミナーの案内や研究成果物の配布・周知を行い、また、加盟機関からも事業の開催案内や刊行物についての情報発信が行われ、ネットワークの強化につながった。</p> <p>ウ 大学・関係機関との連携</p> <p>(ア) 広島大学との連携</p> <p>先述の通り(本評価書 p14~15)、連携協定を締結</p>	<p>各地域の現状・課題認識に応じて、それぞれの教育センターにおいて研修事業や管下の学校の指導・助言等に試行錯誤しながら取り組まれている中、他自治体の状況を知ることができる全国的なネットワークの存在は貴重である。全国特別支援教育センター協議会について、定例の会議開催だけにとどまらず、メーリングリストの整備による<u>ネットワークの強化を図れたことは、各地域の取組を支援し、全国的な特別支援教育の充実につながるもの</u>と考える。</p> <p>広島大学及び国立高等専門学校機構とは、連携協定に基づき、共同研究等に取り組んでおり、先述の通り、<u>研究所では十分持ち合わせていない領域</u>(教員養成大学及び総合大学、</p>	
--	--	---	--

	<p>し、障害種別特定研究「肢体不自由教育における ICT の活用に関する研究」に参画いただいたり、共催で国際シンポジウムを開催したり、西日本ブランチ広島オフィスを拠点とした地域連携を活発に進めたりしている。このほか、広島県立教育センターが実施する特別支援教育・教育相談に関する研究事業への参画やジョイントセミナーの開催など、西日本エリアを中心に積極的に情報発信を行った。</p> <p>(イ) 国立高等専門学校機構との連携協定締結</p> <p>先述の通り（本評価書 P14）、研究連携協定を締結し、障害種別特定研究「肢体不自由教育における ICT の活用に関する研究」に参画いただいている。このほか、国立高等専門学校機構主催の障害者支援機器フォーラムにおける当研究所研究職員のプレゼン発表や、研究所セミナーにおける国立高等専門学校機構と連携をしている特別支援学校の成果発表の設定など、様々な行事等で相互の報告や発表を行い、また、情報交換・共有、意見交換、協議による交流を行い相互の研究に生かした。</p> <p>(ウ) 福岡教育大学との連携</p> <p>福岡教育大学における九州エリアにおける教員養成の中核拠点の形成を目指した将来構想を踏まえて、特別支援教育を担う教員の資質向上と、地域課題の解決に向けた研究における連携・協力体制をとることにより、我が国の特別支援教育及びインクルーシブ教育システムの構築・推進並びに関連分野の発展・推進に寄与することを目的とし、当研究所と福岡教育大学との間で連携協定を締結した。</p> <p>とりわけ、地域課題の解決に向けた研究の推進に</p>	<p>工学分野）<u>の知見を提供いただけることで研究の充実につながった。</u></p> <p>また、特別支援教育に関するイベントを共催したり、それぞれの主催イベントに参加し合ったりすることで、<u>広報や理解啓発の取組の強化にもつながった。</u></p> <p>さらに、<u>新たに神奈川歯科大学との共同研究に向けた協議を進めているところ</u>であるが、知的障害のある児童生徒にとって、被災時の状況を VR 機器の使用によって疑似体験できることは、彼らの理解を助け、さらには生命の安全に資するものであり、研究の意義は大きいと考える。同様に、盲ろう児の指導を担当する教員にとって、視覚と聴覚の両方に障害のある「盲ろう」の状態を疑似体験できることは、児童生徒の見え方や困難さを十分に踏まえた指導・支援につなげることができ、大変意義があるものと考ええる。</p>	
--	---	--	--

	<p>において、当研究所と大学、及び自治体が、それぞれどのような役割を担い協働するのか等の観点から検討を進め、教員の養成・研修と研究の一体的取組や共同研究等の組織的かつ効果的な実施などについて盛り込んだ協定書を令和7年7月4日に締結した。</p> <p>(再掲)</p> <p>(エ) 大阪大学との連携に向けた協議</p> <p>大阪大学大学院連合小児発達学研究科の研究領域が、当研究所の研究課題と関連する可能性が考えられたこと、さらに、医科学系の研究と当研究所の教育系の研究の融合は有益な成果をもたらすと考えられたことから、当研究所の各研究班の取組の中で、関連すると思われる研究活動等を取り上げ、連携の可能性について協議を進めた。(再掲)</p> <p>(オ) 神奈川歯科大学との共同研究に向けた協議</p> <p>横須賀地域研究機関等連絡協議会の参画機関である神奈川歯科大学と連携し、同大学教授が開発したVR(仮想現実)教材を活用した、知的障害のある児童生徒に対する防災教育におけるICT活用の検討や、盲ろう児に関わる教員向けの、指導・支援内容の課題や改善点を把握することができる研修コンテンツの開発を目的とした共同研究の可能性についての協議を令和6年7月から開始した。協議はオンラインにより実施し、具体的な研究内容について意見交換を行った。令和7年度から共同研究を実施する方向でさらに検討することとしている。(再掲)</p> <p>エ 他機関との連携</p> <p>(ア) 久里浜少年院との連携</p>	<p>教育や福祉の関係機関に限らず、少年院、医療センター、歯科診療所といった<u>様々な領域の関係団体とも積極的に連携</u>した。課題認</p>	
--	--	---	--

	<p>久里浜少年院で行われている要支援在院者に対する新たな職業能力開発指導の実践研究事業に当研究所の研究者が参加するとともに、久里浜少年院を含む矯正教育関係者が当研究所の実施する専門研修の講義を聴講するなどした。</p> <p>(イ) 久里浜医療センターとの連携</p> <p>久里浜医療センター名誉院長に当研究所専門研修等の講師を担当してもらうとともに、医療センター職員と当研究所研究職員で構成する合同ケース会を開催し、ゲーム症に関する検討を行うなどした。</p> <p>(ウ) 三浦半島地域障害者歯科診療所との連携</p> <p>横須賀市歯科医師会が運営する三浦半島地域障害者歯科診療所の歯科医師、歯科衛生士、久里浜特別支援学校の教員と連携し、障害のある子供の歯科受診の支援を行った。具体的には、同校に在籍する自閉症児童の歯科受診にあたって、児童が見通しを持ち安心して受診できるように、実態の把握から事前指導について教員と当研究所の研究職員で検討するとともに、歯科医師、歯科衛生士とも情報交換しながら具体的な支援方法の確認・共有を行った。</p> <p>オ 民間企業等との連携</p> <p>(ア) 先導的・先端的研究の実現に向けた取組</p> <p>第5期中期目標期間に新たに設けられた研究区分「先端的・先導的研究」において、令和4年度の所内公募により採択された「知的障害のある児童生徒に対する系統的なプログラミング教育推進のための先導的研究」について、令和5年度から2ケ年間、横須賀テレコムリサーチパークに所在する大手通信</p>	<p>識を共有したり、互いに知見を提供し合った</p> <p>りすることで、<u>それぞれの取組の向上につながり、ひいては、広く共生社会の実現に資するもの</u>と考える。</p> <p>教育委員会等の関係機関を通じて実践フィールドを提供でき、かつ、特別支援教育の専門家としての知見の提供や実践結果の分析等を行うことができる当研究所と、最新の支援機器やツールを提供できる民間企業が組むことで、研究所では十分に持ち合わせていない領域の知見や技術を補えるとともに、実践結果について、実践校からの意見も含め、開発</p>	
--	---	---	--

	<p>会社の関連会社である株式会社 e-Craft とプログラミング教材について、知的障害のある児童生徒にも活用しやすいインターフェースやツールの改善と活用方法について共同研究を実施した。</p> <p>(イ) 株式会社デジリハからの受託研究</p> <p>主務大臣の指摘を受け、令和6年12月に株式会社デジリハと受託契約を結び、肢体不自由のある子供の身体性の向上に資するデジタルツールの活用に関する研究を開始したところである。株式会社デジリハが開発した障害児者向けのリハビリツール「デジリハ」の活用促進を図る観点から、学校で活用した際の効果を検証するための評価指標の設計支援等を行うこととしている。</p> <p>(ウ) 横須賀地域研究機関等連絡協議会</p> <p>横須賀地域研究機関等連絡協議会の加盟機関により実施される研究フォーラムや視察研究会等へ当研究所から職員が参加している。</p>	<p>者に直接フィードバックできるため、<u>障害のある児童生徒の学びの充実に資するものである</u>と考える。</p>	
<p>5. 施設・整備に関する計画</p> <p><その他の指標></p> <p>・管理施設の長寿命化のための計画的な修繕・改修等を推進したか。</p>	<p><主要な業務実績></p> <p>【施設・整備に関する計画について<その他の指標>】</p> <p>第5期中期計画に基づき、研究活動、研修事業、情報普及活動の業務の円滑な実施及び施設の長寿命化のため、施設の老朽化等を勘案し、計画的に改修工事を行い、予定どおり竣工した。</p>	<p><根拠></p> <p>研究所業務の円滑な実施及び施設の長寿命化のため、<u>計画どおり、施設・設備の整備を行うことができた。</u></p>	<p><その他の事項></p> <p>【有識者からの意見】</p> <p>・施設・設備の老朽化が進む中で、効果的・効率的な施設マネジメントの視点から、いわゆる「施設のトリアージ」を進める。「インフラ長寿命化計画」等を策定して、研究や研修等の優先度を踏まえた修繕・改修等の検討がこれまで以上に必要である。また、未使用となっている土地や施設などのいわゆる「遊休地等」があるとすれば、その積極的活用の検討などが必要である。</p>

<p>6. 人事に関する計画</p> <p><その他の指標></p> <ul style="list-style-type: none"> 研究職員・事務職員の幅広い人材の確保を図ったか。 研修等の実施により、職員の計画的な資質向上及び育成を図ったか。 外部資金等による多様な研究活動の業績を人事評価に適切に反映させ、更なる研究力の向上につなげたか。 	<p><主要な業務実績></p> <p>【人事に関する計画について<その他の指標>】</p> <p>令和3年度から令和7年度においては、総務部、研究企画部、研修事業部、情報・支援部、発達障害教育推進センター、インクルーシブ教育システム推進センターの4部2センター制を維持し、各事業を推進した。突発的な対応が必要となる業務や組織横断的に対応が必要となる業務については、組織横断的にワーキンググループを設置し、機動的かつ柔軟な業務運営にあたった。</p> <p>また、職員研修については、独立行政法人国立青少年教育振興機構、独立行政法人国立女性教育会館、独立行政法人教職員支援機構及び当研究所の4法人が共同で職員研修を実施することにより、単独実施では困難な研修や業務の効率化、経費の削減を図ることができた。</p> <p>このほか、研究所独自の取組として、外部講師を招いた研究力向上セミナーを実施し、研究デザイン、研究方法、統計・分析、効果的な結果の示し方（図の作成）等について学ぶ機会を設けたり、事務職員向けに、特別支援教育に係る国の教育制度・動向や普段の業務の遂行に関わる事項の勉強会を開催するなど、職員の資質向上及び育成に資する取組を実施した。</p>	<p><根拠></p> <p>業務量に応じた柔軟な組織編成や、人事交流及び新規採用等により、<u>研究所の諸事業の効率化、職員の適正な配置、研究活動等の強化を図ることができた。</u></p> <p>また、職員研修についても、<u>他法人と連携実施して効率化を図ったことに加え、独自の企画も実施し、研究所としての課題認識や職員のニーズに対応した職員の資質向上・育成に資する機会を確保した。</u></p>	<p><その他の事項></p> <p>【有識者からの意見】</p> <p>・「若手研究者比率」や「新規採用者に占める若手研究者比率」などを高めたり、クォーター制を導入して女性研究者を積極的に採用したり、女性管理職を積極的に登用したりするなどして、多様な職員による研究所経営をさらに進める必要がある。</p>
--	---	--	---

	<p>(常勤職員数は各年度4月1日現在)</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>令和3 年度</th> <th>令和4 年度</th> <th>令和5 年度</th> <th>令和6 年度</th> <th>令和7 年度</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>常勤職員数</td> <td>70</td> <td>69</td> <td>68</td> <td>74</td> <td>75</td> </tr> <tr> <td>新規採用者数</td> <td>6</td> <td>8</td> <td>12</td> <td>11</td> <td>5</td> </tr> <tr> <td>人事交流受入 数</td> <td>2</td> <td>3</td> <td>2</td> <td>3</td> <td>2</td> </tr> </tbody> </table>		令和3 年度	令和4 年度	令和5 年度	令和6 年度	令和7 年度	常勤職員数	70	69	68	74	75	新規採用者数	6	8	12	11	5	人事交流受入 数	2	3	2	3	2		
	令和3 年度	令和4 年度	令和5 年度	令和6 年度	令和7 年度																						
常勤職員数	70	69	68	74	75																						
新規採用者数	6	8	12	11	5																						
人事交流受入 数	2	3	2	3	2																						
<p>7. 新型コロナウイルス感染症拡大防止のための研究所の事業について</p> <p><その他の指標></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ポストコロナ段階を見据え、インターネットを活用した事業・業務を推進するとともに、学校関係者及び関係機関等に有用な情報を提供していく取組を進めたか。 	<p><主要な業務実績></p> <p>【新型コロナウイルス感染症拡大防止に係る取組】</p> <p>ア 研究事業における取組</p> <p>研究の実施に際しては、学校現場等への訪問によるインタビュー調査や実践事例の収集などの研究活動については、学校長の許諾を得る等、了解を得られた場合に対面で実施し、オンラインで可能と考えられる場合には、オンラインでの実施とした。</p> <p>また、研究協議会や、研究成果の還元に係る公開セミナー等についてもオンラインで実施し感染症の拡大防止措置を図った。</p> <p>イ 研修事業における取組</p> <p>研修事業においては、各研修室に空気清浄機やアルコール消毒液を設置して新型コロナウイルス等の感染症対策のための環境整備に取り組んだ。また、令和6年度には、前年の令和5年度に新型コロナウイルス感染が5類に移行後1年が経過したことから、マスクの着用については引き続き任意としつつ、専門研修の集合・宿泊研修</p>	<p><根拠></p> <p>感染症拡大防止に関し、<u>可能な限りの措置を行い、各業務を進めることができた。</u></p> <p>研修事業においては、各研修室に空気清浄機やアルコール消毒液を設置して新型コロナウイルス等の<u>感染症対策のための環境整備に取り組んだ。</u></p>																									

	<p>の期間を令和5年度の3週間から1週間増やして4週間とするなど、社会状況を踏まえながら段階的に緩和を図ってきている。</p> <p>さらに、免許法認定通信教育の単位認定試験の実施においては、感染拡大防止の観点から、受験時に県をまたぐ移動をしなくて済むよう、受験者が存在する全ての都道府県に試験会場を設置する対応を、令和2年度以降継続している。なお、5類移行後は、試験当日の検温は行わず手指消毒も任意としているが、試験官はマスクの着用を必須とし、受講者についても推奨という形でマスクの着用をお願いしている。</p>		
--	--	--	--

4. その他参考情報
特になし。

項目別調書 No.	中期目標	中期計画
<p>I-1</p> <p>特別支援教育に係る実際の・総合的研究の推進による国の政策立案・施策推進等への寄与及び教育現場への貢献</p>	<p>【重要度：高】</p> <p>研究活動は、研究所の諸活動の中核であり、我が国の特別支援教育のナショナルセンターとして、国の政策立案・施策推進に直接に寄与することはもとより、研修事業や情報普及活動を通じて研究成果を教育現場に還元することは、インクルーシブ教育システムの構築を図る上で不可欠であることから、重要度は高い。</p> <p>(1) 国の政策課題や教育現場等の喫緊の課題に対応した研究の推進と研究成果の普及</p> <p>国の特別支援教育に関する政策立案・施策推進等に寄与するため、権利条約の批准、障害者基本計画、国内外の障害者施策を取り巻く状況の変化、国の政策動向等を踏まえ、特別支援教育のナショナルセンターとして、国との緊密な連携による国の政策課題や教育現場等の喫緊の課題に対応した研究を中心に精選、重点化して、戦略的かつ組織的に実施すること。また、その成果によって、障害のある子供一人一人の教育的ニーズに対応した教育の実現に貢献すること。</p> <p>特に、近年では、通常の学級における取組等、特定の障害種に限らない課題が多くなっていることから、障害種を超えた横断的研究や、通常の学級における指導の充実のため、通常の学級における障害のある児童生徒を含めた学級全体への働き掛け等についての研究を進めること。</p> <p>これらの研究の実施に当たっては、中期目標期間において実施する研究について、国との協議を経て研究体系を策定し、学校における ICT 活用の広がりなど研究の背景となる教育を巡る状況、研究の必要性や方向性、研究所が実施する研究の内容、達成すべき成果等、今後5年間のロードマップを明らかにした「研究基本計画」を基本としつつ、戦略的かつ組織的に実施する。なお、「研究基本計画」については、特別支援教育を巡る国の動向や社会情勢を勘案し、随時、柔軟に見直しを行うこと。</p> <p>また、各都道府県教育委員会や特別支援学校長会等の関係機関に対する研究ニーズ</p>	<p>(1) 国の政策課題や教育現場等の喫緊の課題に対応した研究の推進と研究成果の普及</p> <p>① 我が国の特別支援教育のナショナルセンターとして行うべき研究活動について、学校における ICT 活用の広がりなど研究の背景となる教育を巡る状況、研究の必要性や方向性、研究所が実施する研究の内容、達成すべき成果等、今後5年間の研究のロードマップを明らかにした「研究基本計画」を基本としつつ、次の研究を戦略的かつ組織的に実施する。なお、「研究基本計画」については、特別支援教育を巡る国の動向や社会情勢を勘案し、随時、柔軟に見直しを行う。</p> <p>イ 重点課題研究：文部科学省との緊密な連携のもとに、国の特別支援教育政策の推進、又は教育現場等の喫緊の課題解決に寄与する研究を行う。</p> <p>ロ 障害種別特定研究：各障害種における喫緊の課題の解決に寄与する研究。</p> <p>それぞれの研究は、ナショナルセンターとして相応しい研究を文部科学省、関係団体との緊密な連携のもとに行う。</p> <p>上記の研究課題については、社会の変化等を踏まえ、実施の必要性、研究内容等について毎年度見直しを行う。</p> <p>研究の実施にあたっては、複数の課題について、参画する都道府県等を公募し、研究実施に有用な教育現場の情報を得るなどしながら、都道府県等と協力して研究を行う。</p> <p>② 上記の研究課題は、国との密接な連携により実施し、毎年度概ね5～7課題を実施</p>

	<p>調査を行うことや各学校長会、保護者団体、大学等の関係機関・団体と相互の課題認識・研究方法・研究資源などを共有することにより、より効率的かつ効果的に研究を推進すること。さらに、研究に参画する都道府県等を公募し、教育現場の情報を得るなどしながら協力して研究を行うこと。</p> <p>研究力の向上に向けた体制整備については、久里浜特別支援学校をはじめ特別支援学校等との連携を強化するとともに、先導的な実践を行う様々な学校との連携を確保しながら「科学技術・イノベーション創出の活性化に関する法律」（平成二十年法律第六十三号）（以下「科技イノベ活性化法」という。）上の研究開発法人として、多様な障害領域の研究者を配置している大学や国の研究機関との組織的かつ継続的な連携体制を構築し、研究の多様性の確保に努め、先導的な研究を推進すること。また、特別支援教育以外を専門とする研究機関や関係機関や多様な機関との共同事業の実施等連携を進めること。さらに、国立教育政策研究所をはじめとする研究機関や小・中・高等学校等の校長会等関係団体との連携も強化すること。</p> <p>研究成果については、特別支援教育に関する国の政策立案・施策推進等に寄与するよう国に提供したり、教育実践に寄与するよう、都道府県等教育委員会・特別支援教育センター・学校等に提供したりするとともに、広く一般にも公開するなど、研究成果等の普及及び特別支援教育に関する理解啓発を図ること。また、研究所で実施する研修事業にも研究結果を反映させ、研修内容の見直しを図るとともに、より一層の充実を図ること。</p> <p>なお、研究成果が教育現場等に対し有効に提供・活用されているか否かについて検証すること。</p> <p>【指標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 国の政策立案・施策実施や教育現場の喫緊の課題解決のために必要とする課題に関する調査研究を、大学や国の研究機関等多様な機関との連携を進めながら、毎年度5～7件程度実施する（実績：平成28年度 10件、平成29年度 10件、平成30年度 10件、令和元年度 11件）。 ・ 全国の公立の教育センターを含む教育委員会、学校等の教育現場における研究成果の活用状況（教育委員会での業務での活用、研修会等での活用、学校への情報提供等） 	<p>する。</p> <p>③ 上記の研究課題のほか、将来的な教育政策の検討資料を提示する「先端的・先導的研究」、大学等との共同の研究、国からの要請等に応じた研究、科学研究費補助金等の各種研究資金制度を活用した外部資金研究等の実施を促し、研究活動の活性化を図る。</p> <p>④ 研究課題の精選・採択や研究計画・内容の改善を図るため、文部科学省と協議するほか、毎年度、都道府県等教育委員会や特別支援教育センター、学校長会等に対して研究ニーズ調査を実施するとともに、研究計画を立案する段階において、特に、期待される研究成果の明確化に留意する。</p> <p>⑤ 研究を戦略的かつ効果的に推進するために、研究課題に応じて外部の研究協力者・研究協力機関を積極的に登用するとともに、障害種を超えて柔軟な研究チームを編成する。また、筑波大学附属久里浜特別支援学校（以下「久里浜特別支援学校」という。）をはじめとする特別支援学校等及び近隣の関係機関の協力を得ることや、学校長会、保護者団体、大学等の関係機関・団体と相互の課題認識・研究方法・研究資源などを共有することにより、より効率的かつ効果的に研究を推進する。</p> <p>⑥ 研究成果については、その目的に応じて、国の政策立案・施策推進等に寄与するよう国に提供したり、教育実践に寄与するよう都道府県等教育委員会・特別支援教育センター・学校等に提供したりするとともに、広く一般にも公開する。また、研究成果報告書のほか、サマリー集やリーフレット、指導資料等を作成し、研究成果の効果的な還元を図る。</p> <p>さらに、研究所で実施する研修事業にも研究結果を反映させて研修の充実を図る。</p> <p>⑦ 全国の公立の特別支援教育センターを含む教育センターや都道府県・指定都市・中核市教育委員会における研究成果の活用状況（教育委員会での業務での活用、研修会等での活用、学校への情報提供等）について毎年度アンケート調査を実施し、6割以</p>
--	--	---

	<p>について毎年度アンケート調査を実施し、6割以上の現場で改善に活用される（実績：平成28年度 30%、平成29年度 46.6%、平成30年度 70.5%、令和元年度 82.9%）。</p> <p>※ 第4期中期目標では、教育センターとして都道府県、指定都市、中核市が設置する教育センターのみを対象としていたが、第5期では全ての市区町村が設置するセンターとしたため、実績値は、目標よりも低い。</p> <p>(2) 評価システムの充実による研究の質の向上</p> <p>研究の実施に当たっては、特別支援教育政策の充実及び教育現場の教育実践等の推進に貢献する観点から、内部評価及び外部評価を実施し、研究計画・内容の改善、研究の効果的・効率的実施及び研究の質的向上を図ること。また、PDCAサイクルを確立し、十分に機能させ、研究内容の更なる質的向上を図るための評価システムを充実すること。</p> <p>【指標】</p> <ul style="list-style-type: none"> 毎年度、外部評価を実施し、全ての研究において、研究終了時に高い評価（5段階評価で4以上）を得る。（実績：平成28年度 100%、平成29年度 100%、平成30年度 100%、令和元年度 100%） 	<p>上の教育委員会や教育センターに活用されているかの検証を行う。</p> <p>(2) 評価システムの充実による研究の質の向上</p> <p>① 「研究基本計画」に基づき、重点課題研究及び障害種別特定研究については、研究課題ごとに、国の政策課題や教育現場の課題への貢献等の観点から、中間及び終了時における内部評価及び外部の専門家からなる研究所運営委員会による外部評価を実施し、研究計画・内容の改善、研究の効果的・効率的実施及び研究の質的向上を図る。重点課題研究及び障害種別特定研究の終了時の外部評価において、高い評価（5段階評価で4以上）を得る。</p> <p>また、先端的・先導的研究の研究課題については、外部の専門家とともに開始前に実施の必要性等の評価を実施するとともに、進捗状況等を内部で確認する。その成果については外部の専門家に報告して成果の意義や普及等について助言を得る。</p> <p>さらに、外部資金研究等については、その成果を研究所運営委員会に報告して成果の意義、および活用や普及に関する助言を得るなどし、これに基づいて、多様なメディアを活用し様々な機会を捉えて発信することで、研究活動の推進を図る。</p> <p>② 研究の評価に当たっては、研究区分の特性に応じた評価システムを構築するとともに、研究成果の活用可能性を含めた評価の観点・項目の設定、自己評価の充実などの評価システムの改善を図る。また、評価結果を研究課題の設定や研究内容の改善に生かすとともに、研究所の研究活動の質的向上につなげるなど、PDCAサイクルを重視して評価システムを運用する。</p>
--	--	---

<p>I-2</p> <p>各都道府県等における特別支援教育政策や教育実践等の推進に寄与する指導者の養成</p>	<p>【重要度：高】</p> <p>ポストコロナ社会において、ICTを活用した適切な支援をはじめ、教育現場のニーズに対応できる各都道府県等の特別支援教育の指導者養成は喫緊の課題である。また、新しい時代の特別支援教育を担う教員の専門性向上に向けては、特別支援学校や特別支援学級、通級による指導の担当教員のみならず、全ての職員の資質を向上させることが求められており、各都道府県等が進める教員の資質向上への支援は喫緊の課題であることから、重要度は高い。</p> <p>(1) 国の政策課題や教育現場のニーズ等に対応できる指導者の専門性の向上</p> <p>インクルーシブ教育システムの構築に向けて、各都道府県等における特別支援教育政策や教育実践等の推進に寄与する指導者の養成を図るため、各都道府県等における障害種ごとの教育の中核となる教職員を対象とした専門的・技術的な研修及び各都道府県等における指導的立場にある教職員を対象とした特別支援教育政策上や教育現場等の喫緊の課題等に対応した専門的・技術的な研修を実施すること。</p> <p>研修の実施に当たっては、研修の背景、必要性や具体的な内容を明らかにした「研修指針」を基本とするが、特別支援教育を巡る国の動向や社会情勢を勘案し、随時、柔軟に見直しを行うこと。企画段階においては、新型コロナウイルス感染症での課題や教育現場における現状を踏まえつつ、これまでの研修の実施状況やアンケート結果から導き出された課題や改善が必要な事項等を整理するとともに、国や地方自治体、教職員支援機構、久里浜特別支援学校をはじめ特別支援学校等の関係機関と協議・連携の上、研究所の研修に求められるニーズを的確に把握し、ICT環境の整備の推進等、社会情勢の変化等を研修内容に反映させること。研修の形態については、研修目的に留意しつつ、宿泊及びオンラインを適切に組み合わせ、講義のほか、研究所の研究の成果を踏まえた演習・研究協議、フィールドワーク等の形式を多く取り入れるなど工夫し、学術的な理論に裏打ちされた実践的かつ効果的な研修を実施すること。また、研修受講者が、研修で得られた成果を各地域に還元できるようにすること。</p> <p>研修実施後は、その内容や実施方法による効果等を分析し、ポストコロナ社会におけるICTの活用や一層のオンライン研修の充実を図るとともに、「集合・宿泊型研修等と</p>	<p>(1) 国の政策課題や教育現場のニーズ等に対応できる指導者の専門性の向上</p> <p>① 研修の背景・必要性や研究所が実施する研修の基本方針や概要、実施体制等を明らかにした「研修指針」を基本としつつ、次の研修を実施する。</p> <p>なお、「研修指針」については、特別支援教育を巡る国の動向や社会情勢を勘案し、随時、柔軟に見直しを行う。</p> <p>イ 特別支援教育専門研修：各都道府県等の障害種ごとの教育の中核となる教職員を対象に、障害種別にコース・プログラムを設け、その専門性と指導力の向上を図る研修（約2か月間の宿泊若しくはオンライン研修、又は宿泊とオンラインを組み合わせで行う研修）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 視覚障害・聴覚障害・肢体不自由・病弱教育コース （視覚障害教育専修プログラム） （聴覚障害教育専修プログラム） （肢体不自由教育専修プログラム） （病弱教育専修プログラム） ・ 知的障害教育コース （知的障害教育専修プログラム） ・ 発達障害・情緒障害・言語障害教育コース （発達障害・情緒障害教育専修プログラム） （言語障害教育専修プログラム）
--	--	---

	<p>オンライン研修とのベストミックス」の在り方についての検討を早急に進め、「ワールドを有する実践研究と架橋した研修」という研究所の強みを生かした研修体系を構築すること。また、研究所、国立青少年教育振興機構、国立女性教育会館、教職員支援機構の4法人は、研修のより効率的・効果的な実施に資するため、その連携について検討すること。</p> <p>さらに、研修を通じて、国の特別支援教育政策や久里浜特別支援学校をはじめ特別支援学校等との共同研究で得られた成果等の最新の知見等を普及するとともに、国の特別支援教育政策の動向や教育委員会・受講者等の意見を踏まえたカリキュラム等の見直しを行い、外部有識者の意見を取り入れながらPDCAサイクルを十分に機能させる取組を行うこと。</p> <p>【指標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 研究所が設定する受講者定員に対する実際の受講者の参加率が、80%以上となるようにする。(実績：平成28年度100%、平成29年度83.3%、平成30年度83.3%、令和元年度83.3%) ・ 教育委員会等派遣元に対して調査を実施し、研修受講者の研修修了後における指導的役割の実現状況について80%以上の達成を図る(実績：平成28年度100%、平成29年度100%、平成30年度94.4%、令和元年度97.2%)。 ・ 研修受講者が事前に設定した自己目標の研修修了直後における実現状況について80%以上の達成を図る(実績：平成28年度96.4%、平成29年度96.4%、平成30年度93.3%、令和元年度94.4%)。 <p>※ 第5期中期目標期間の指標は第4期中期目標期間の実績よりも低いが、第5期中期目標期間においては、PDCAサイクルを回しながら、ポストコロナ社会における新たな研修体系を構築する必要があることを踏まえ、指標を80%以上としている。</p>	<p>ロ インクルーシブ教育システムの充実に関わる指導者研究協議会・セミナー：特別支援教育政策上や教育現場等の喫緊の課題（特別支援教育におけるICTの活用や高等学校における通級による指導、発達障害等への対応等）に対応するため、各都道府県等において指導的立場に立つ指導主事や教職員等を対象に開催する短期間（2～3日間程度：宿泊又はオンライン）の研修・セミナー</p> <p>② 研修の計画及び実施に当たっては、文部科学省や久里浜特別支援学校をはじめとする特別支援学校等及び近隣の関係機関、教職員支援機構、大学などの関係機関と連携し、研究所の研修に求められるニーズや、ICT環境の整備など学校教育を巡る状況の変化、社会情勢の変化等を的確に反映させる。また、インクルーシブ教育システムの構築に向けて国の特別支援教育政策や研究成果等の最新の知見等をカリキュラムに取り入れるとともに、講義のほか、演習・研究協議等の形式を多く取り入れ、受講者が受講した内容を実際の教育や活動の中で生かせるようプログラムを工夫する。</p> <p>③ 研修のより効率的・効果的な実施に資するため、国立青少年教育振興機構、国立女性教育会館、教職員支援機構との連携について検討する。</p> <p>④ 研究所が設定する受講者定員に対する実際の受講者の参加率が、80%以上となるようにする。また、任命権者である教育委員会等に対して、研修修了1年後に受講者の指導的役割の実現状況についてのアンケート調査（各地域で行う研修や研究会等の企画・立案、講師としての参画などの指導的役割の実現状況）を実施し、80%以上の達成を確保する。</p> <p>また、特別支援教育専門研修の受講者に対して、事前に設定した研修の自己目標の修了直後における実現状況についてアンケート調査を実施し、80%以上の達成を確保する。</p> <p>これらのアンケート調査で、80%を下回った場合には、研修の内容・方法等を改善するとともに、あわせて、国の特別支援教育政策の動向等を踏まえたカリキュラム等の見直しを適宜行うなど、PDCAサイクルを重視した研修の運営を行う。</p> <p>なお、その際は外部有識者等の意見を取り入れながら改善に努める。</p>
--	--	--

(2) 各都道府県等が実施する教員の資質向上に関わる支援

各都道府県等におけるインクルーシブ教育システムの構築に向けた幅広い教員の資質向上のため、多様な学びの場に対応した講義配信コンテンツの計画的な整備を図り、インターネットにより学校教育関係者等へ配信すること。また、特別支援学校教諭免許状取得率向上のための免許法認定通信教育及び免許法認定講習を実施するとともに、大学等が開設する講習への協力、受講者が受講しやすくなる環境・方策及び科目・単位の拡充の可能性について検討すること。さらに、大学等と連携して、教員養成段階の学生等を対象とした特別支援教育に関する専門的な講習を実施すること。

これらの実施に当たっては、利用者のアンケート調査等を基に、内容及び運用の改善を図ること。

【指標】

- ・ 講義配信の自治体の団体受講登録について、中期目標期間終了までに、80%以上の都道府県で行われるようにする。

(実績：令和2年度 19.1% (9県)) (令和2年12月現在)

- ・ 講義配信の受講登録数を、中期目標期間終了までに、8,000人以上とする (実績：平成28年度 1,877人、平成29年度 2,722人、平成30年度 3,876人、令和元年度 5,916人)。
- ・ 免許法認定通信教育及び免許法認定講習による単位取得者数を中期目標期間終了までに、4,000人以上とする (実績：平成28年度 551人、平成29年度 1,470人、平成30年度 1,574人、令和元年度 1,323人)。

(2) 各都道府県等が実施する教員の資質向上に関わる支援

- ① 各都道府県等における障害のある児童・生徒等の教育に携わる教員をはじめ、幅広い教員の資質向上の取組を支援するため、「研修指針」を基本としつつ、特別支援教育に関する基礎的及び専門的内容の講義を収録し、インターネットにより学校教育関係者等へ配信する。

イ インターネットによる講義配信 (以下、「NISE 学びラボ」という。) で配信する講義コンテンツについて体系的・計画的な整備を図るとともに、最新の情報を提供できるように、計画的に更新する。また、大学等と連携して、教員養成段階の学生等を対象とした特別支援教育に関する専門的な講習を実施する。これらの実施に当たっては、利用者のアンケート調査等を基に、内容及び運用の改善を図る。

ロ NISE 学びラボの活用例や研修モデルを提案し、教育委員会や学校が実施する研修におけるNISE 学びラボの活用を推進するとともに、教育委員会、特別支援教育センター、幼稚園、小・中学校、高等学校、特別支援学校等に対して、幅広く広報し、利用を促進する。また、NISE 学びラボの自治体の団体受講登録について、中期目標期間終了までに80%以上の都道府県で行われるようにするとともに、NISE 学びラボの受講登録数を、中期目標期間終了までに、8,000人以上を確保する。

- ② 特別支援学校教諭免許状の取得率向上のため、インターネットを通して免許法認定通信教育を実施する。また、特別支援教育専門研修において、免許法認定講習及び免許状更新講習を実施する。

免許法認定通信教育の実施に当たっては、各都道府県教育委員会が免許法認定講習の開設がしにくく、且つ、免許取得率が低い領域である視覚障害教育及び聴覚障害教育について開設する。

また、受講者の利便性を考慮した運営の工夫や科目・単位の拡充の可能性の検討を行うとともに、免許法認定通信教育及び免許法認定講習による単位取得者数を中期目標期間終了までに、4,000人以上を確保する。

<p>I-3</p> <p>総合的な情報収集・発信や広報の充実及び関係機関等との連携強化を通じた特別支援教育に関する幅広い関係者の理解の促進</p>	<p>【重要度：高】</p> <p>特別支援教育に係る有用な情報等を、教育関係者はもとより、民間企業や各種団体等に対しても広く提供し普及を図ることは、国の特別支援教育政策を進めていく上で重要である。また、インクルーシブ教育システムの構築は、権利条約の理念が目指す共生社会の形成に向けて不可欠であり、特別支援教育推進のための基盤となることから、各地域におけるインクルーシブ教育システムの構築へ向けた取組を強力に推進する必要があることから、重要度は高い。</p> <p>(1) 特別支援教育に関する情報発信</p> <p>① 戦略的な広報の推進</p> <p>我が国唯一の特別支援教育のナショナルセンターとして、特別支援教育の政策・施策及び現状や課題、研究所の存在や活動内容（研究内容やその成果）等について、学校、民間企業、各種団体等、多方面に周知させ、それら各方面からの理解・支援を得ることができるよう取り組むこと。</p> <p>また、情報収集・発信方策や広報の在り方を明示した広報戦略を基本としつつ、特別支援教育に関する政策・施策や研究活動及び教育現場の課題等に関する情報を総合的に収集すること。研究所の活動内容等と併せて、全ての学校をはじめとする関係者に必要かつ有益な情報が提供されるよう、研究成果の普及やインターネットをはじめ広報効果の高い ICT ツールを活用した情報提供の量的充実を図るとともに、国と連携しながら、サマリー集やガイドブック、リーフレット等わかりやすい形で情報提供を行い、現場での活用を促進すること。</p> <p>【指標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 研究所のホームページについて、情報提供のコンテンツを充実し、広く学校、民間企業、各種団体等に周知するとともに、有用度に関する関係団体への聞き取りをもとに定期的に改善を行い、毎年度、年間 75 万以上の訪問者数を確保する。 	<p>(1) 特別支援教育に関する情報発信</p> <p>① 戦略的な広報の推進</p> <p>幼稚園等、小・中学校、高等学校及び特別支援学校の関係者の理解・支援の充実に貢献する。このため、関係機関との連携を推進し、研究所における情報収集・発信方策や広報の在り方と取組を強化する等を目的に作成する「広報戦略」を基本としつつ、次のとおり、戦略的・総合的に情報収集及び情報提供を行う。</p> <p>なお、「広報戦略」については、特別支援教育を巡る国の動向や社会情勢を勘案し、随時、柔軟に見直しを行う。</p> <p>イ 研究所の研究成果をはじめ、特別支援教育に関連する学術的な研究から教育実践に関わる内容まで、幅広い情報を計画的に収集する。</p> <p>ロ 収集した情報については、専門的な研究内容や、教育現場に必要な実践に関する情報、理解・啓発に関する基礎的な内容など、情報内容に応じて、体系的・階層的に整理して、発信する対象を考慮したコンテンツとして整備する。</p> <p>ハ 幼稚園等、小・中学校、高等学校及び特別支援学校の教員や教育委員会、保護者、関係団体等に対して、インターネットをはじめ広報効果の高いツールなど様々な手段を活用して、研究成果などの研究所が有する情報の発信、提供を充実するとともに、現場での活用を促進する。</p>
--	---	---

	<p>② 教育関係者はじめ国民への幅広い理解啓発・理解促進の活動の推進</p> <p>インクルーシブ教育システムの構築に向けて、研究所セミナー等の開催を通じて、教育委員会・学校・教員・国民への幅広い理解啓発活動を充実すること。特に特別支援教育の指導の経験のない又は経験年数の少ない教員に対し特別支援教育の理解啓発・理解促進を行うこと。</p> <p>また、発達障害教育に関し、インターネットを通じた情報提供の充実を図り、幼稚園、小・中・高等学校等の教員や保護者への理解促進を図るとともに、教育と福祉等の関係機関との連携に関する取組を推進すること。</p> <p>さらに、特別支援教育における支援機器等教材に関する情報を収集し、特別支援教育教材ポータルサイトの充実等により、幼稚園、小・中・高等学校及び特別支援学校の全ての学校において、ICT 機器等の教材を広く普及させるための取組を実施すること。</p> <p>【指標】</p> <ul style="list-style-type: none"> 発達障害教育推進センターの Web サイトについて、年間 10 万件以上の訪問者数を確保する。(実績値：平成 28 年度 11 万件、平成 29 年度 9 万 8 千件、平成 30 年度 8 万件、令和元年度 7 万 6 千件) 	<p>ニ 研究所のホームページについて、情報コンテンツを計画的・体系的に整備することにより、様々な利用者層にとって、有用でわかりやすいものとなるようにアクセシビリティやユニバーサルデザインへの配慮に留意する。</p> <p>ホ 研究成果については、ホームページを通じて、研究成果報告書のほか、サマリー集やガイドブック、リーフレット等わかりやすい形で情報提供を行うとともに、学会発表及び誌上発表を行う。</p> <p>ヘ 研究所における研究成果を中心とする特別支援教育に関する論文等を広く公開し、特別支援教育の発展に寄与することを目的として毎年度 1 回研究紀要を刊行する。</p> <p>研究所における研究活動等の諸活動に関する情報や特別支援教育に関する情報を提供することを目的に特総研ジャーナル、英語版の NISE Bulletin を毎年度それぞれ 1 回刊行し、ホームページに掲載する。</p> <p>また、メールマガジンなどを活用して、研究所の研究成果や特別支援教育に係る最新の情報等を紹介する。</p> <p>ト 研究所のホームページの有用度（ホームページの使いやすさや情報量の多さ、情報検索の容易さ等）に関して関係団体への聞き取りを定期的に行い、これに基づき、ホームページの利便性の向上を図る。ホームページの利用状況等を把握して、毎年度、年間 75 万以上の訪問者数を確保する。</p> <p>チ 国内外の大学図書館等と連携し、研究所の研究成果や研究所が保有する学術文献に関する情報を特別支援教育の研究者（大学教員、大学院生等）に積極的に提供して、特別支援教育に関する研究の振興と質の向上に貢献する。</p> <p>② 教育関係者はじめ国民への幅広い理解啓発・理解促進の活動の推進</p>
--	--	--

		<p>(教育委員会・学校・教員・国民への幅広い理解啓発活動)</p> <p>教育委員会・学校・教員・国民への幅広い理解啓発活動を充実するため、以下の取組を実施する。</p> <p>イ 特別支援教育に関する教育現場等関係機関との情報共有及び研究成果の普及を図るための研究所セミナーを毎年度計画的に開催し、有益な情報が得られたとの回答について 85%以上を確保する。また、研究所及び特別支援教育の理解啓発を推進するため、久里浜特別支援学校をはじめとする特別支援学校等とも連携し、国民に対し研究所の施設の公開や活動成果の展示等の取組を行う。</p> <p>ロ 地域における特別支援教育の理解啓発を図るため、教育委員会、特別支援教育センター（教育センターに特別支援教育を担当する部署がある場合当該部署を含む。以下、「特別支援教育センター等」という。）、関係団体等及び大学と連携を図りながら、講演や研究協議、ICT 機器などの教材展示等を行うセミナーを毎年度開催する。（集成型だけでなくオンラインによる開催を含む）</p> <p>このセミナーは、全国を地区ブロックに分け、中期計画期間中に戦略的・計画的に開催する。</p> <p>ハ 幼稚園等、小・中学校、高等学校等で特別支援教育の指導の経験のない又は経験年数の少ない教員に対する特別支援教育の理解啓発・普及を目的としたリーフレットを作成し情報発信の充実を図る。</p> <p>また、その中で、障害のない子どもやその保護者への障害に関する理解啓発に関する内容を扱う。</p> <p>(発達障害教育に関する理解啓発活動)</p> <p>発達障害の子どもの指導及び支援体制の充実を図るため、発達障害のある子どもの教育について、インターネットを通じて、教員や保護者の一層の理解促進を図るとともに、教育委員会等と連携した指導者養成や専門性向上の取組、福祉等の関係機関との連携による理解啓発の取組を行う。</p>
--	--	---

	<p>(2) インクルーシブ教育システム構築の国際的動向の把握と海外の研究機関との研究交流の推進</p> <p>我が国におけるインクルーシブ教育システムの構築に資するため、諸外国のインクルーシブ教育システム構築の動向を把握し、公表すること。</p> <p>また、海外の特別支援教育の研究機関との交流を図り、研究の充実を図るとともに、国際的なシンポジウム等を開催し、広く情報の普及を図ること。</p> <p>【指標】</p>	<p>イ 幼稚園等、小・中学校、高等学校等の教員、保護者等に対して、発達障害のある子供の教育に関する基本的な知識、具体的な指導・支援の方法等、有用なコンテンツの整備を進める。また、国立障害者リハビリテーションセンター発達障害情報・支援センターと連携し、全てのライフステージにおいて切れ目のない支援が行われるよう情報提供の充実を図る。これらを通して、発達障害教育推進センターの Web サイトについて、毎年度、年間 10 万件以上の訪問者数を確保する。</p> <p>ロ 教育委員会や特別支援教育センター等と連携した指導者養成や専門性向上の取組を通じて、発達障害のある子どもの教育の充実を図る。また、福祉等の関係機関との連携を通して、地域における支援体制構築の促進を図る。さらに、文部科学省や厚生労働省、保護者団体等の関係機関と連携した事業を実施する。</p> <p>(支援機器等教材に関する理解啓発活動)</p> <p>幼稚園等、小・中学校、高等学校及び特別支援学校において、特別支援教育における支援機器等教材を広く普及させるため、研究所の i ライブラリー (教育支援機器等展示室) や発達障害教育推進センター展示室を計画的に整備するとともに、支援機器等に関する情報を特別支援教育教材ポータルサイトに掲載し、ホームページ上で活用できるように情報提供する。</p> <p>(2) インクルーシブ教育システム構築の国際的動向の把握と海外の研究機関との研究交流の推進</p> <p>イ 諸外国のインクルーシブ教育システムの構築に係る最新動向を計画的に把握する。</p> <p>特に、我が国のインクルーシブ教育システムの推進において参考となるよう中期目標期間終了までに、7 か国以上の諸外国の動向や取組について、収集・整理し、研究所のホームページ等での公表を行う。</p>
--	---	---

- ・ 中期目標期間終了までに、7か国以上の諸外国のインクルーシブ教育システム構築の動向を把握し、情報発信するとともに、海外の研究機関とのシンポジウムやセミナー等を開催する。

(実績値：平成28年度 8か国、平成29年度 8か国、平成30年度 6か国、令和元年度 6か国、令和2年度 7か国)

(3) 自治体や学校が直面する課題の解決に関する支援や情報発信

① インクルーシブ教育システムの構築に向けた都道府県等への支援

我が国のインクルーシブ教育システムの構築に向けて、都道府県・市町村から派遣された職員と地域の課題解決に向けた取組を進め、研究所がその成果を他の地域にも還元すること。成果については、広く一般にも活用されるよう方法を工夫し、国及び各都道府県・市町村等に幅広く提供すること。

また、インクルーシブ教育システムの構築（障害者差別解消法への対応を含む。）に係る各都道府県・市町村・学校からの相談に対する支援の充実を図ること。

さらに、全国特別支援教育センター協議会が全国におけるインクルーシブ教育システム構築において重要な役割を果たすよう、その取組を支援すること。得られた知見については、国における政策立案にも資するよう、関係者のプライバシーに配慮しつつ、国にも提供すること。

【指標】

- ・ 都道府県・市町村から派遣された職員と地域の課題解決に向けた取組を、中期目標期間中に30件以上実施する。
- ・ 地域のインクルーシブ教育システム構築のために、各都道府県・市町村からの相談支援の充実を図るとともに、研究所の支援が有意義であったかどうかを毎年度調査し、有意義であったとの回答を80%以上確保する。

※ 第4期中期目標期間では、都道府県・市町村から派遣された職員が研究所職員と研究をする取組を行い、参加した自治体の100%で有意義との回答を得ているが、新型

- ロ 海外の特別支援教育の研究機関からの研究員の受入れや研究職員の派遣及び共同協議会等を行い、研究交流の促進を図るとともに、特別支援教育に関する国際シンポジウム等を定期的に行い、広く教育関係者等への情報の普及を図る。

また、海外からの視察・見学を積極的に受け入れ、情報の提供を行う。

(3) 自治体や学校が直面する課題の解決に関する支援や情報発信

① インクルーシブ教育システムの構築に向けた都道府県等への支援

イ インクルーシブ教育システムの構築に関する都道府県や市町村の課題の解決を図るための取組について、派遣された職員と研究所職員が連携・協働して事業を推進する。本事業を中期目標期間中に30件以上実施するとともに、研究所の支援が有意義であったかどうかを毎年度調査し、有意義であったとの回答を80%以上確保する。

上記の取組の成果については、地域における報告会や協議会の開催等を通じて広く一般にも普及を図るとともに、成果をまとめたリーフレットの作成等を通して、他の都道府県・市町村等にも普及を図る。

- ロ 都道府県等におけるインクルーシブ教育システムの推進に係る相談に対応するとともに、研修会等への講師派遣や専門的な知見の提供等、取組の支援を行う。また、全国特別支援教育センター協議会の会員による共同研究等、地域が協働して行う取組を支援する。これらの相談内容や取組については、国における政策立案にも資するよう、関係者のプライバシーに配慮しつつ、国に提供する。

	<p>コロナウイルス感染症拡大防止のためオンラインでの支援が中心となることを想定して80%としている。</p> <p>② インクルーシブ教育システムの構築に向けて、都道府県・市町村・学校が直面する課題の解決に資する情報発信の充実</p> <p>インクルーシブ教育システムの構築に向けて、各都道府県・市町村・学校が直面する課題の解決に資するため、インクルーシブ教育システム構築支援データベースの充実を図るとともに、特別支援教育センター等の関係機関と連携しながら、各学校への周知を行い、活用を促すこと。また、閲覧者の利便性をより向上させたデータベースとすること。</p> <p>【指標】</p> <ul style="list-style-type: none"> インクルーシブ教育システム構築支援データベースの各都道府県・市町村・学校等での活用を促し、事例のダウンロード件数について毎年2万5千件を確保する。 <p>(実績値：平成28年度 2万件、平成29年度 1万8千件、平成30年度 2万4千件、令和元年度 3万2千件)</p> <p>※ 第5期中期目標期間の指標は令和元年度の実績よりも低いが、第5期中期目標においては新たな事例の掲載に努めるのではなく、第4期中期目標期間において掲載した事例の閲覧性の向上に取り組むこととしており、それを踏まえた数値としている。</p> <p>③ 関係団体等との連携による学校支援及び日本人学校への相談支援</p> <p>校長会、教育委員会、教育センター等関係団体と連携した学校への情報提供を充実し、効率的・効果的な特別支援教育に関する情報の普及を図ること。また、要請に応じ講師派遣を行うなど、各都道府県等における特別支援教育の施策推進を支援すること。</p> <p>日本人学校に対して、関係機関と連携を図りながら、保護者も含めた関係者への情報発信を行うとともに、教育相談支援等を必要に応じて行うこと。</p>	<p>② インクルーシブ教育システムの構築に向けて、都道府県・市町村・学校が直面する課題の解決に資する情報発信の充実</p> <p>イ インクルーシブ教育システム構築支援データベースについて、特別支援教育センター等の関係機関と連携して幼稚園等、小・中学校、高等学校等での周知と活用を促すとともに、より閲覧者の利便性を向上させたデータベースとする。また、データベースの各都道府県・市町村・学校等での活用を促し、事例のダウンロード件数について毎年度、年間2万5千件を確保する。</p> <p>③ 関係団体等との連携による学校支援及び日本人学校への相談支援</p> <p>イ 校長会や教育委員会、特別支援教育センター等との関係強化を図り、関係団体が主催する各種会議等を活用して、効率的・効果的に特別支援教育に関する情報を普及する。</p>
--	---	--

	<p>【指標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 毎年度、日本人学校に赴任する派遣教員には研修会を通して、海外駐在予定の保護者等には相談会を通して情報提供を行うとともに、日本人学校に対し、特別支援教育に関する情報提供を定期的（年 15 回程度）に実施する。 	<p>ロ 都道府県等教育委員会・特別支援教育センター等が実施する研修会及び大学の公開講座等への講師の派遣（会場に訪問ゼインターネットを介して行うもの等を含む）を通して、教員の専門性の向上に貢献するとともに、研究成果の普及や広報活動を計画的に進める。</p> <p>ハ 日本人学校に対して、特別支援教育に関する情報提供を定期的（年 15 回程度）に実施し、関係者への情報発信を行うとともに、日本人学校を通して教員や保護者からの相談に対応し、支援する。また、文部科学省と連携し、日本人学校への遠隔指導に関する取組を行うとともに、日本人学校等在外教育施設に赴任する教員（管理職等）の研修会や保護者等への相談会において、情報提供を行う。</p>
<p>Ⅱ－1 業務運営の効率化に関する事項</p>	<p>1. 業務改善及び業務の電子化の取組</p> <p>業務運営に当たっては、「国の行政の業務改革に関する取組方針」（平成 28 年 8 月 2 日総務大臣決定）を踏まえ、現在の業務プロセスを調査・分解し、問題点を明らかにした上で、業務プロセスそのものの再構築を図ること。</p> <p>運営費交付金を充当して行う業務については、事業の重点化、管理部門の簡素化、効率的な運営体制の確保、個々の業務の予算管理の徹底、複数年契約等による調達等合理化の取組等により業務運営コストの縮減を図ること。</p> <p>中期目標期間中、退職手当、特殊要因経費を除き、毎事業年度につき、対前年度比一般管理費 1%以上、業務経費 1%以上の業務の効率化を図ること</p> <p>契約については、「独立行政法人における調達等合理化の取組の推進について」（平成 27 年 5 月 25 日総務大臣決定）に基づく取組を着実に実施すること。</p> <p>「情報システムの整備及び管理の基本的な方針」（令和 3 年 12 月 24 日デジタル大臣決定）にのっとり、情報システムの適切な整備及び管理を行うこと。</p> <p>また、業務の実施に当たっては、電子決裁の推進や、研修の案内や申し込みのオンライン利用の推進など、電子化できる業務の洗い出し及び取組の検討を行い、業務の効率</p>	<p>1. 業務改善及び業務の電子化の取組</p> <p>運営費交付金を充当して行う業務については、事業の重点化、管理部門の簡素化、効率的な運営体制の確保、個々の業務の予算管理の徹底、調達等合理化の取組等により業務運営コストの縮減を図ることとし、経費縮減の余地がないか自己評価を厳格に行ったうえで、適切に見直しを行う。</p> <p>退職手当、特殊要因経費を除き、毎事業年度において、対前年度比で管理経費 1%以上、業務経費 1%以上の業務の効率化を図る。</p> <p>また、契約については、「独立行政法人における調達等合理化の取組の推進について」（平成 27 年 5 月 25 日総務大臣決定）に基づき、毎年度研究所の調達等合理化計画を策定・公表し自己評価する取組を着実に実施する。</p> <p>さらに、調達等に当たっては、複数年契約を推進し、業務運営の合理化・効率化を図る。</p> <p>「情報システムの整備及び管理の基本的な方針」（令和 3 年 12 月 24 日デジタル大臣決定）にのっとり、情報システムの適切な整備及び管理を行う。</p> <p>加えて、業務の実施に当たっては、電子決裁の推進や、研修の案内・申し込みのオン</p>

	<p>化につなげる。なお、デジタル技術の利活用に当たっては、デジタル化自体を目的とするのではなく、デジタル化によって組織を変革し、新たな価値を創造するデジタルトランスフォーメーション（DX）を意識することとする。</p> <p>2. 予算執行の効率化</p> <p>業務達成基準による収益化の原則に基づいた、管理体制のもと、予算執行の効率化を進めること。</p> <p>3. 間接業務等の共同実施</p> <p>「独立行政法人改革等に関する基本的な方針」（平成 25 年 12 月 24 日閣議決定。以下「基本方針」という。）を踏まえ、研究所、国立青少年教育振興機構、国立女性教育会館、教職員支援機構の 4 法人は、効果的・効率的な業務運営のために間接業務等を共同で実施し、その取組を一層推進する。</p> <p>4. 給与水準の適正化</p> <p>研究所の給与水準については、「基本方針」を踏まえ、国家公務員等の給与水準を十分に考慮し、手当を含め役職員給与の在り方について厳しく検証した上で、その適正化を図るとともに、給与水準及びその合理性・妥当性を対外的に公表すること。</p>	<p>ライン利用の推進などを進める。</p> <p>2. 予算執行の効率化</p> <p>業務達成基準による収益化の原則に基づき、中期目標の業務に応じて「研究活動」、「研修事業」、「情報普及活動」の業務ごとに予算と支出実績を管理し、予算執行の効率化を進める。</p> <p>3. 間接業務等の共同実施</p> <p>「独立行政法人改革等に関する基本的な方針」（平成 25 年 12 月 24 日閣議決定。以下「基本方針」という。）を踏まえ、研究所、国立青少年教育振興機構、国立女性教育会館、教職員支援機構の 4 法人において、効果的・効率的な業務運営のため間接業務等の共同実施の取組を一層推進する。</p> <p>4. 給与水準の適正化</p> <p>給与水準については、「基本方針」を踏まえ、国家公務員の給与水準を十分考慮し、手当を含め役職員給与の在り方について厳しく検証した上で、その適正化に取り組むとともに、給与水準及びその合理性・妥当性の検証結果や取組状況を公表する。</p>
<p>II-2 財務内容の改善に関する事項</p>	<p>1. 自己収入の確保</p> <p>国の政策動向に即応した機動的な研究の推進を図るとともに、研究の多様性を確保するため、組織として、積極的に競争的資金等の外部資金導入を図ること。また、受益者負担の適正化や他の独立行政法人の状況を踏まえながら、自己収入の確保を図ること。</p>	<p>1. 自己収入の確保</p> <p>科学研究費をはじめ競争的資金等の外部資金の獲得を積極的に支援するとともに、研修員宿泊棟宿泊料等の受益者負担の適正化や他の独立行政法人の状況を踏まえながら、自己収入の確保に努める。</p> <p>なお、中期目標期間を通じて、定期的に施設使用料等を検証するなど、自己収入の拡</p>

	<p>宿泊研修施設や体育館及びグラウンドについては、更なる利用促進に向けた取組を行い、稼働率の向上を図るとともに、定期的に料金を検証し、自己収入の拡大を図るために必要な措置を講じる。</p> <p>2. 体育館及びグラウンドの外部利用の促進</p> <p>体育館については、研修事業での活用を図るとともに、障害者スポーツでの利用を含め広く外部利用を促進するために、各種団体などへ幅広い広報を行い、取組を推進すること。</p> <p>グラウンドについては、体育館と同様に、障害者スポーツでの利用を含め広く外部利用を促進するために、各種団体などへ幅広い広報を行い、取組を推進すること。</p> <p>3. 保有財産の見直し</p> <p>保有財産については、利用実績等を的確に把握し、その保有の必要性について不断の見直しを行うこと。</p> <p>特に、研修施設については、他法人や関係機関等の施設も利用して研修を実施する可能性も視野に入れつつ、見直しを行うこと。</p>	<p>大を図るために必要な措置を講じる。</p> <p>2. 体育館及びグラウンドの外部利用の促進</p> <p>体育館について、研修事業での活用を図るとともに、広報活動を充実し体育館及びグラウンドの障害者スポーツでの利用を含めた幅広い外部利用を促進する。</p> <p>3. 保有財産の見直し</p> <p>保有財産については、利用実績等を的確に把握し、その必要性等について不断の見直しを行う。</p> <p>また、研修施設については、他法人や関係機関等の施設も利用して研修を実施する可能性も視野に入れつつ、不断の見直しを行う。</p> <p>IV 予算、収支計画及び資金計画</p> <p>1. 中期計画予算 別紙1のとおり（※事業等のまとまりごとに作成予定）</p> <p>2. 令和3年度～7年度収支計画 別紙2のとおり（※予算の作成単位に合わせて作成予定）</p> <p>3. 令和3年度～7年度資金計画 別紙3のとおり（※予算の作成単位に合わせて作成予定）</p> <p>V 短期借入金の限度額 限度額3億円</p>
--	--	--

		<p>短期借入金が想定される事態として、運営費交付金の受入れが遅延する場合や予想外の退職手当などに対応する場合を想定。</p> <p>VI 剰余金の使途</p> <p>研究、研修及び情報収集・発信事業等の充実、機能強化・組織見直し、施設・設備等の充実のための経費に充当する。</p> <p>VII 中期目標期間を超える債務負担</p> <p>中期目標期間を超える債務負担については、施設管理・運営業務等を効率的に実施するため中期目標期間を超える場合で、当該債務負担行為の必要性及び資金計画への影響を勘案し、合理的と判断されるものについて行う。</p>
<p>II-3 その他業務運営に関する重要事項</p>	<p>1. 内部統制の充実</p> <p>研究所の内部統制については、基本方針を踏まえ、理事長のリーダーシップに基づく戦略的な組織運営、適切なガバナンスにより、国民に対する説明責任を果たしつつ、法人の政策実施機能の最大化を図るため、内部統制システムを充実・強化すること。</p> <p>また、内部統制の仕組みが確実に機能を発揮した上で組織及び業務の運営がなされるよう、</p> <p>① 研究所のミッションや理事長の指示を確実に組織内の各階層に浸透させるとともに、役職員のモチベーション・使命感を向上させる仕組みの運用</p> <p>② 研究所のマネジメント上必要なデータを組織内で収集・共有し、理事長に伝達した上で、組織・業務運営において活用</p> <p>③ 内部統制が有効に機能しているかどうかを継続的にモニタリングを、理事長のリーダーシップの下、日常的に進めていくこと。</p> <p>2. 研究データの管理・活用</p>	<p>1. 内部統制の充実</p> <p>内部統制については、理事長のリーダーシップに基づく自主的・戦略的な組織運営、適切なガバナンスにより、国民に対する説明責任を果たしつつ、法人の政策実施機能の最大化を図るため、内部統制システムの充実・強化を図る。</p> <p>また、内部統制の仕組みが確実に機能を発揮した上で組織及び業務の運営がなされるよう、</p> <p>① 研究所のミッションや理事長の指示が確実に全役職員に伝達されるため、掲示板システム等の情報システムの運用</p> <p>② 研究所のマネジメント上必要なデータについて、各種会議等で情報の収集・共有を行い理事長に伝達した上で、組織・業務運営において活用</p> <p>③ 内部統制を有効に機能させるため、定期的な内部監査の実施及び監査結果の業務への反映</p> <p>を理事長のリーダーシップの下、日常的に進める。</p> <p>2. 研究データの管理・活用</p>

	<p>研究所が保有する様々な学術情報や研究データの管理・保存や、他の研究機関等との間でデータの共有・活用を図るため、組織的な体制・環境の整備を行うこと。</p> <p>3. 情報セキュリティ対策の推進</p> <p>政府の情報セキュリティに関する方針等に基づき、情報セキュリティ対策を厳格に実施すること。</p> <p>また、職員に対する教育訓練を毎年度行うとともに、PDCA サイクルにより情報セキュリティ対策の改善を図ること。</p> <p>4. 大学・関係機関等との連携</p> <p>(1) 久里浜特別支援学校をはじめ特別支援学校等との連携・協力</p> <p>学校現場の実態を踏まえたエビデンスベースの実践的研究等を推進するため、研究所は、久里浜特別支援学校をはじめ特別支援学校等と連携し、障害のある子供の教育に関する実際の・総合的な教育研究の推進を図ること。また、久里浜特別支援学校をはじめ特別支援学校等での実践研究の充実に向け、積極的な協力を行うこと。</p> <p>研修においても、久里浜特別支援学校での実地研修をカリキュラムに盛り込むなどして、研修受講者の専門性向上を図ること。</p> <p>(2) 関係機関との連携強化</p> <p>全国の特別支援教育センターとの連携を強化し、研究・研修の実施、成果の報告、情報収集・発信を一層推進していくこと。</p> <p>また、近隣に位置する関係機関等との連携を強化し、特別支援教育に関する学際的研究の可能性を広げること。</p> <p>さらに、共同研究の実施や外部資金の共同での獲得等を視野に入れ、研究活動を中心とした組織的かつ継続的な連携を大学や民間企業等と実施すること。特に、教育における ICT や先端技術の活用が進んでいることから、ICT の活用に関する情報収集や連携強</p>	<p>研究所が保有する様々な学術情報や研究データの管理・保存や他の研究機関等との間でのデータの共有・活用の促進を図るため、組織的な管理体制の構築や、研究データの管理・活用のための基盤を整備する。</p> <p>3. 情報セキュリティ対策の推進</p> <p>政府の情報セキュリティに関する方針等に基づき、情報セキュリティ対策を厳格に実施する。</p> <p>また、職員に対する教育訓練を毎年度行うとともに、PDCA サイクルにより情報セキュリティ対策の改善を図る。</p> <p>4. 大学・関係機関等との連携</p> <p>(1) 久里浜特別支援学校をはじめ特別支援学校等との連携・協力</p> <p>自閉症や知的障害に係る教師の専門性や人材育成が求められていることから、研究所は、久里浜特別支援学校をはじめ特別支援学校等との連携を推進し、全国の参考になる障害のある子どもの教育に関する実際の・総合的な教育研究を行い、その成果を発信する。</p> <p>また、久里浜特別支援学校の災害時に備えた避難訓練へ協力を行うとともに、久里浜特別支援学校をはじめ特別支援学校等での実践研究の充実に向け積極的な協力を行う。</p> <p>(2) 関係機関との連携強化</p> <p>研究所をハブとして、インターネットを活用した全国の特別支援教育センター等同士のネットワークの構築を進め、研究活動や研修、情報収集・発信が活発に行われるよう推進するとともに、研究所が実施する研究成果の報告や研修事業の場として活用する。</p> <p>また、近隣に位置する関係機関等との連携を強化するとともに、共同研究の実施や外部資金の共同での獲得等を視野に入れ、研究活動を中心とした組織的かつ継続的な連携を大学等と実施する。また、本中期計画期間中に複数の関係機関と連携協定に基づく</p>
--	---	--

	<p>化に努め、研究活動の水準向上に取り組むこと。</p> <p>【指標】</p> <ul style="list-style-type: none"> 第5期中期目標期間中に複数の関係機関と計画的に事業を推進するため、連携協定を締結し、少なくとも1以上の共同研究を実施する。 <p>5. 施設・整備に関する計画</p> <p>令和3年2月に策定した「インフラ長寿命化計画（個別施設計画）」に基づき、業務の円滑な実施に必要な施設整備を進めるとともに、管理施設の長寿命化のための計画的な修繕・改修等を推進すること。</p> <p>6. 人事に関する計画</p> <p>新規採用や人事交流、多様な専門性を有する研究職員やデジタル技術を活用できる専門人材等の採用・活用等により、研究職員・事務職員の幅広い人材の確保を図ること。また、研修等の実施により、職員の計画的な資質向上及び育成を図ること。</p> <p>評価に関しては、研究者が行う、外部資金等による多様な研究活動の業績を人事評価に適切に反映させ、更なる研究力の向上につなげること。</p> <p>以上について、人材確保・育成方針を策定すること。</p>	<p>事業を推進し、少なくとも1以上の共同研究を実施する。</p> <p>5. 施設・整備に関する計画</p> <p>令和3年2月に策定した「インフラ長寿命化計画（個別施設計画）」に基づき、研究活動、研修事業、情報普及活動等の業務の円滑な実施に必要な施設整備を進めるとともに、メンテナンスサイクルを構築し、予防保全、コスト抑制の観点も踏まえ、計画的かつ効率的な修繕・改修の実施を図る。</p> <p>本中期計画期間中に整備する施設・設備は別紙4のとおり。</p> <p>6. 人事に関する計画</p> <p>研究所の研究活動、研修事業、情報普及活動等を効率的に行うため、業務運営の効率化や業務量の変動に応じた柔軟な組織体制の構築に努めるとともに、中期計画を着実に実行するため、新規採用や人事交流により幅広い人材の確保を図り、職員の計画的な育成かつ適正な配置を行う。また、研究力の向上に向けて、任期付研究員・客員研究員等として多様な専門性を有した研究者の確保や関連する外部機関との人材交流を推進するとともに体制を整備する。</p> <p>さらに、職員の資質の向上や専門的な能力の向上を図るため、職員研修等を計画的に実施するとともに、実施に際しては、「基本方針」を踏まえ、他法人との共同実施による職員研修とするなど、効率化を図る。</p> <p>そのほか、職員のワークライフバランスの促進や適切な人事評価制度の運用等を進める。</p> <p>また、以上のことについて、人材確保・育成方針を策定する。</p> <p>7. 積立金の使途について</p> <p>前中期目標期間の最終年度における積立金残高のうち、文部科学大臣の承認を受けた金額については、独立行政法人特別支援教育総合研究所法（平成11年法律第165号）</p>
--	--	--

	<p>7. 新型コロナウイルス感染症拡大防止のための研究所の事業について</p> <p>ポストコロナ段階を見据え、研究所の研究活動、研修事業、情報普及活動等の事業について、インターネットを活用した事業・業務を推進するとともに、学校関係者及び関係機関等に有用な情報を提供していく取組を進めること。</p> <p>また、集合型の研究協議会、各種研修会、セミナー等の開催や体育施設等の利用にあたっては、新型コロナウイルス感染症拡大防止のための措置を図ったうえで実施すること。</p>	<p>に定める業務の財源に充てる。</p> <p>8. 新型コロナウイルス感染症拡大防止のための研究所の事業について</p> <p>ポストコロナ段階を見据え研究所の研究活動、研修事業、情報普及活動等の事業について、インターネットを活用した事業・業務を推進するとともに、学校関係者及び関係機関等に有用な情報を提供していく取組を進める。</p> <p>また、集合型の研究協議会、各種研修会、セミナー等の開催や体育施設等の利用にあたっては、コロナウイルス感染症拡大防止のための措置を図ったうえで実施する。</p>
--	--	---